

『水滸伝』の成立と受容
——宋代忠義英雄譚を軸に

馬場 昭佳

目次

序論（1）

第一部：『水滸伝』の成立——宋代忠義英雄譚への転換

第一章：『水滸伝』征遼故事の成立背景

——「宋代忠義英雄譚」に則した作品形成（10）

第二章：宋江の死と四人の奸臣（30）

補：呉従先「読水滸伝」訳注（45）

第三章：張叔夜から見る『水滸伝』宋江の忠義化（53）

第二部：清代における『水滸伝』受容——宋代忠義英雄譚としての浸透

第四章：清代における『水滸伝』七十回本と征四寇故事について（73）

第五章：『忠義璇図』について（91）

第六章：『蕩寇志』——『水滸伝』の鏡（111）

結論（129）

参考文献（135）

序論

『水滸伝』は明代中期から爆発的に流行した白話小説である¹。北宋末期の徽宗の時代、奸臣の暗躍によって大きく混乱する社会を背景に、宋江ら梁山泊に集結した一〇八人の好漢の個性豊かな活躍を、口頭言語に比較的近い白話によって巧みに描いている。したがって『三国志演義』・『西遊記』・『金瓶梅』と共に「四大奇書」の一つとして高く評価され、明代の長編白話小説を代表する作品として中国文学史に燦然たる一頁を刻んでいる。

その影響力は文学の世界だけではなく、社会にも及んでいった。例えば、明末の特異な思想家として知られる李卓吾が高く評価したことにより、馮夢龍など多くの知識人が『水滸伝』を含む白話小説に価値を見出すようになる。一方で『水滸伝』に描かれる好漢の反抗姿勢を真似て、実際に反乱を起こす者も現れた²。これに対して社会の平穩を重んじる政府は反乱を誘発する有害書と見なし、厳しくその出版や流通を取り締まる動きを見せた³。

文学のみならず社会にも多大な影響を与えた『水滸伝』は、どのようにして成立したのか。またどのように人々に受け入れられたのか。その成立と受容に関する問題は多くの研究者によって追究されてきた。近年では、侯会『《水滸》源流新証』（华文出版社、二〇〇二）、陈松柏『水浒传源流考论』（人民文学出版社、二〇〇六）、高日暉・洪雁『水浒传接受史』（齐鲁书社、二〇〇六）のように、この問題に焦点を当てた研究書も出されている。

従来『水滸伝』成立・受容研究を一言で概括するならば、一つひとつの事象の解明に焦点が当てられてきたと言えるだろう。成立研究では、史実および小説以前の諸作品と『水滸伝』を対照することによって、人物や物語の変遷が追究されてきた。受容研究では、『水滸伝』の影響を受けた作品を分析することによって、また政府が出した禁令に着目することによって、当時の人々の『水滸伝』観が明らかにされてきた。

これまでの成立・受容研究によって解明されてきた事実は非常に多い。しかし成立と受容それぞれの背景にまで踏み込んだ考察はあまり多くない。『水滸伝』は明清二代の社会にも多大な影響を与えた作品である。したがって、その成立と受容の背景を解明しなければ、『水滸伝』がなぜ強い影響力を及ぼせたのかという問題は解けないのではないだろうか。

本論文は『水滸伝』の成立と受容について、「宋代忠義英雄譚」という筆者独自の定義に焦点を当てることで、その背景を考察するものである。さらには、

『水滸伝』が中国文学史において果たした役割についても検討したい。

一、従来の通説

まずは『水滸伝』に関する基本的な情報や通説について、本論文での議論の便宜上、成立・内容および版本・清代における受容事情の三点に分けてまとめておこう。

・ 成立

『水滸伝』は明代中期に突如として創作された作品ではない。北宋末期に起こった宋江の活動という史実を源流とし、長きにわたる通俗文芸の世界での洗練を経た上で成り立った作品と考えられている。その途上の作品としては、例えば通俗的な歴史読本『大宋宣和遺事』や、「黒旋風双猷功」・「同楽院燕青博魚」といった雑劇作品が挙げられる。なお本論文では、『水滸伝』以前に通俗文芸で演じられていた諸芸能を「梁山泊故事群」と定義する。また、史実と梁山泊故事群を合わせて「『水滸伝』前史」と定義する。

作品の成立に長い時間と多くの人の手が費やされている点は、同じく「四大奇書」に属する『三国志演義』や『西遊記』と同様であると考えられている。すでに指摘されているように、『三国志演義』の母体となる物語は、唐代には語り物として広まっていたことが窺われ、宋代には劉備が善で曹操が悪という認識が定まっていた⁴。『西遊記』では、玄奘三蔵がインドへ仏典を取りに行ったという物語の基本構造が継承されてきた⁵。

また、作者に関しても同様とされている。この三作品では、羅貫中・施耐庵・呉承恩などが作者と目されている。だが彼らは実際には、前代までに演じられてきた数々の講談や戯曲作品を取捨選択しながらも一つの文学作品として調整した編集者と考えの方が妥当であろう⁶。

同じ「四大奇書」でも『金瓶梅』は、この三作品とは創作の事情が大きく異なっている。まず、『水滸伝』の武松の物語から着想を得ていることから、創作時期は『水滸伝』が流通した後であり、その期間も比較的短かったと言える。また「蘭陵笑笑生」なる個人⁷が一から物語構成を創作した作品でもある。

以上をまとめると、『水滸伝』は『三国志演義』や『西遊記』と同じく、長期間・多人数という環境で醸成された作品と見なされてきた。これに対して『金瓶梅』は、短期間かつ一個人という新しい創作環境から生み出された画期的な作品と見なされてきた⁸。

・ 内容および版本

『水滸伝』と一口に言っても、多様な版本が現存する。そして諸版本を分類するに当たっては、まず物語内容について整理しておく必要がある。

『水滸伝』の物語構成は、大まかに二つに分けることができる。一つは、宋江ら一〇八人の好漢が奸臣による迫害などの事情によって梁山泊に集結するまでの部分である。もう一つは、彼らが朝廷に帰順して遼や方臘といった敵対勢力を討伐するも、その過程で好漢たちが次々と死亡してしまい、最後には宋江も毒殺されてしまうまでの部分である。

前者の梁山泊集結までの部分は、全ての版本に見られる。だが後者の朝廷との関係を描いた部分は、版本によって構成が異なっている。よって、梁山泊集結後の部分がいかに構成されているかが、版本を分類する鍵となる。

現存する『水滸伝』版本は、二系統四種類に大きく分類することができる。まず文章表現によって、情緒豊かな表現が見られる文繁本と、簡潔な表現によって物語の筋を追うことを重視した文簡本の二系統に大別できる。前者の文繁本は、さらに内容の量によって、登場した順に百回本・百二十回本・七十回本に分けられる。以下、それぞれの版本を細かく紹介する。

①百回本

おそらく『水滸伝』として最初に登場した版本である。高儒『百川書志』の記述⁹などから推測するに、嘉靖年間にはすでに登場していたと想定できる。なお本論文で基本的なテキストとして使用する容輿堂本は、現存する最古の完全な百回本であり、万曆三十八年（一六一〇）に出版された¹⁰。

②百二十回本

百回本を基にししながら、文簡本に見られる田虎・王慶討伐を二十回に編集して挿入した版本である。かつては百回本に先行すると考える研究者もいたが、百回本に手を加えた痕跡が指摘できること¹¹から、現在では百回本より後発の版本と考えられている。

③七十回本

百二十回本に基づきながらも、金聖嘆が大幅に手を加えた版本である。多くの変更点が指摘できるが、本論文で注目するのは次の二点である。

第一点は、他の版本では含まれていた梁山泊集結後の部分を削除したことがある。結果として、七十回本は一〇八人の好漢が梁山泊に集結した時点で物語が完結する。また既存の文繁本の第一回を「楔子」とし、第二回以降を順次一回ずつ繰り下げている。

第二点は、宋江の忠義を否定したことである。それ以前の版本では、宋江は忠義の人物として描かれていたが、七十回本では口先だけで忠義を唱える狡猾な偽善者として描かれている。

このほか、大量の批評を加える、文章を大幅に書き換えるなど、全体にわたって細かな修正を施している。

④文簡本

文繁本百回本を基に表現を簡略化した版本である¹²。物語の展開を速やかに把握するために出版されたのであろう。なお、百二十回本に先んじて田虎・王慶討伐が組み込まれている¹³。

以上の二系統四種類の版本の差異を図示したのが下表である。文繁本については、各部分に割かれた分量も表示した。文簡本は版本ごとに全体の回数が異なるため、詳細な分量は表示していない。

		～梁山泊 集結	征四寇故事		
			～征遼	征田虎王慶	征方臘
文 繁 本	①百回本	71回	19回	無	10回
	②百二十回本	71回	19回	20回	10回
	③七十回本	楔子+70回	無		
④文簡本		有	有		

表からも分かるように、③七十回本とそれ以外では内容に大きな差異が見られる。これでは同じ『水滸伝』と言っても、読後の印象は大きく異なってしまふ。一方で①百回本・②百二十回本・④文簡本の三者は、内容面では大きな差異は認められない。田虎・王慶討伐は、その前後に影響が出ないように内容がまとめられている¹⁴。

本論文では、七十回本を除く①百回本・②百二十回本・④文簡本、すなわち宋江が朝廷に忠義を尽くす物語を含む版本をまとめて「忠義系『水滸伝』」と定義する。また梁山泊集結後の部分を「征四寇故事」と定義する。

・清代における受容事情

通説では、金聖嘆の創作した七十回本はその登場と同時に他の版本を淘汰し、清代を通じて唯一の通行本となった、と考えられている。この説は、中華民国初期の『水滸伝』研究で提唱されたものである。

一九二〇年に『水滸伝』の成立に関する考察「水滸伝考証」を発表した胡適は、七十回本の『水滸伝』しか見ておらず、それ以外の版本は散逸してしまったと考えていた。後に青木正児から日本に残っていた百回本を送られて、ようやく他の版本の現存を知ることとなった。このような経緯があったことから、鄭振鐸は一九二九年に発表した「水滸伝的演化」で、清代において『水滸伝』

は七十回本のみであり、清代の人々は七十回本以外の版本の存在を全く知らなかった、という結論を下した。

また、清代に『水滸伝』すなわち七十回本は、反乱を誘発する有害書として、官府によってその出版と流通を厳しく禁止された。このような規制を招いた理由の一つは、作品中で梁山泊の好漢が好意的に描かれていることにより、彼らの行為が安易に模倣されてしまうことを恐れたからである。ただし『水滸伝』にはもう一つ、官府側から強く警戒された点があった。それは、宋江が忠義を騙って盗賊行為をすることである。つまり、単に盗賊行為を模倣させるだけでなく、その行為を忠義の名目で肯定してしまう危険性が『水滸伝』にあると考えられたのである¹⁵。

一言付け加えると、金聖嘆が七十回本創作時に組み込んだ意図、すなわち忠義を騙る悪人として宋江を理解させようとする意図は、あまり効果を発揮できなかったと言えよう¹⁶。

二、問題提起

それでは本論文の具体的な方針を示すことにしよう。まずは『水滸伝』成立に関する通説の問題点を指摘したい。

通説によると、『水滸伝』は『三国志演義』や『西遊記』と同様に、史実に題材を取り、通俗文芸における洗練を重ねた結果として集大成された作品と見なされてきた。『宋史』などの歴史書には宋江の事績が記録されており、『大宋宣和遺事』や雑劇作品などには古い時点での物語が見られる。人物描写や物語内容は全体的に見れば時代を経るにつれて進化している。よって通説そのものが誤っているわけではない。

しかし、これのみでは『水滸伝』成立の全貌は説明できない、と筆者は考える。通俗文芸によって洗練されてきた魅力的な好漢や故事は、確かに『水滸伝』の重大な構成要素となっている。だがそれはあくまで要素の一つにすぎないのではないだろうか。

『水滸伝』と『三国志演義』・『西遊記』の成立事情を詳細に分析すると、物語の基本構造の変遷に大きな相違を見つけられる。『三国志演義』の基本構造は、劉備と曹操の対立を中心とする後漢末から三国時代までの変遷と言えよう。『西遊記』では、玄奘三蔵による西天取経となるだろう。いずれの基本構造も、歴史的事実にほぼ合致する。また通俗文芸においてもこの基本構造の枠内で多くの作品が創られた。

一方『水滸伝』の基本構造は、梁山泊に集結した宋江らが朝廷に帰順して功績を立てるも奸臣に謀殺される、と概括できよう。だが史実や梁山泊故事群に

においては、好漢たちが梁山泊に集結する点を除くとこの構造はほとんど確認できない。特に『水滸伝』の重要概念とも言える宋江の忠義は、萌芽すら見出せない。

このように比べてみると、『水滸伝』とその前史との間には大きな断絶が認められる。この断絶は基本構造の違いであり、物語内容の洗練のみによって乗り越えられるものではない。『水滸伝』成立の全容を解明するには、成立前後における基本構造の変化を見定めなければならないだろう。

本論文の第一部では、『水滸伝』成立における前史からの変化について、「宋代忠義英雄譚」という概念を用いることで考察していく。

第一章では、従来は蛇足と見なされてきた征遼故事が、宋代忠義英雄譚への変化による『水滸伝』成立の転換点と密接に関わるかたちで成り立ったことを解明する。

第二章では、『水滸伝』の主人公宋江の死に焦点を当て、その成り立ちが史実や梁山泊故事群に由来しないこと、つまり宋代忠義英雄譚への変化による産物であることを明らかにする。

第三章では、焦点を主人公の宋江ではなく、張叔夜という人物の『水滸伝』やその関連作品における位置づけの変遷に当てることで、宋代忠義英雄譚への変化による『水滸伝』の成立を別の角度から論じる。

次に受容に関する通説について問題点を洗い出したい。

通説によると、清代を通じて『水滸伝』は七十回本のみとなっていた。これは実際に胡適や鄭振鐸が生きていた清代末期においては正しいと言えよう。しかし清代における七十回本の詳細な流通事情について、鄭振鐸は明確な証拠を示していない。したがって清代における『水滸伝』流通の実情は、資料から具体的に論じる必要がある。

この通説が修正されるとなると、新たに考えるべき問題が二つ浮上する。一つは、清代の人々の『水滸伝』認識である。彼らは『水滸伝』を含む「宋江ら梁山泊の好漢の物語」をどのように認識していたのだろうか。

もう一つは、『水滸伝』に否定的な人々の心理である。『水滸伝』は反乱を誘発する有害書と見なす人々が清代にいたことは間違いない。しかしその人々は社会への影響という表層的な理由のみによって『水滸伝』を否定したのであるか。

第二部では、清代における『水滸伝』受容事情を追究し、従来の通説に修正を加える。

第四章では、清代の『水滸伝』出版や関連作品の内容を調べることによって、

七十回本の定本化の時期を絞り込み、さらに梁山泊の好漢の物語に対する人々の認識を解明する。

第五章では、乾隆年間に宮廷が創作した『忠義璇図』を詳しく分析することによって、その内容や創作意図を解説し、七十回本の定本化に与えた影響を指摘する。

第六章では、『水滸伝』を完全に否定するために創られた『蕩寇志』が、実際には『水滸伝』のような宋代忠義英雄譚の再編にすぎなかったことを明らかにする。

そして最後の結論では、第一部の議論を踏まえて『水滸伝』の中国文学史における位置づけの再検討を行い、第二部の議論を踏まえて『水滸伝』を否定する人々の心理を宋代忠義英雄譚の概念によって解明する。

本論文における諸考察は、単に『水滸伝』とその関連作品だけではなく、『金瓶梅』や『儒林外史』など他の白話小説との関係について、さらには時代や地域を超えて通俗文芸一般の性質について理解を深める一助となると考える。

最後に、序章で言及した筆者独自の定義について、簡潔にまとめておく。

- ・宋代忠義英雄譚：通俗文芸の世界で広く親しまれた物語構成の一つ。忠義の英雄、奸臣による妨害、北方の夷狄討伐の三点を備え、悲劇を基調とする。詳しくは第一章で論じる。
- ・梁山泊故事群：『水滸伝』以前に通俗文芸で演じられた、梁山泊に関連する作品群。『水滸伝』のような長編構成は備えていない。
- ・『水滸伝』前史：宋江に関する史実と梁山泊故事群の総称。
- ・忠義系『水滸伝』：諸版本のうち、百回本・百二十回本・文簡本の総称。
- ・征四寇故事：『水滸伝』の梁山泊集結後の部分の物語。百回本で言えば、第七十二回以降を指す。なお百回本では征伐対象は遼と方臘の二勢力だが、議論の便宜上「征四寇」として扱う。

1 『水滸伝』の成立年代に関しては、元末明初に想定する説もある。しかし筆者は、元末明初には出版文化が衰退していたという社会史的視点や、白話小説が広く浸透するのは明代中期以降であるという文学史的視点を踏まえて、明代中期の成立と考えている。

2 例えば、査継佐『罪惟録』卷三十一には、「萬曆末年、徐鴻儒以鄆城人倡白蓮教、巢於梁家楼、直親見梁山泊故事。（万曆末年、徐鴻儒が鄆城の人に白蓮教を吹き込み、梁家楼を根拠地として反乱を起こしたのは、梁山泊の物語を間近に見ている感がある。）」と、徐鴻儒なる人物が『水滸伝』を模倣して反乱を起こしたという記述が見られる。

3 例えば、「兵科抄出刑科右給事中左懋第題本」（『明清史料乙編』第十本所

-
- 収)、『欽定吏部処分則例』卷三十「禮文詞」内の「禁止小説淫詞」の項、などの禁令が出された。
- 4 金文京『三国志演義の世界（増補版）』（東方書店、二〇一〇）五三～一〇二頁参照。
 - 5 『西遊記』の成立に関しては、磯部彰『『西遊記』形成史の研究』（創文社、一九九三）に詳しい。
 - 6 なお呉承恩の『西遊記』作者説は、最近では多くの研究者が否定している。例えば、磯部彰注5前掲書三九頁など。
 - 7 この「蘭陵笑笑生」が何者であるのかは、いまだ決着していない。藤井省三・大木康『新しい中国文学史：近世から現代まで』（ミネルヴァ書房、一九九七）六八～六九頁参照。
 - 8 藤井・大木注7前掲書六一～七一頁。
 - 9 『百川書誌』卷六に「忠義水滸伝一百卷」とある。
 - 10 テキストとしては、その影印本『明容興堂刻水滸伝』（上海人民出版社、一九七五）を使用する。
 - 11 大内田三郎「水滸伝版本考——繁本各回本の関係について——」（『ビブリア』第四十輯、一九六八）参照。
 - 12 大内田三郎『『水滸伝』版本考——再び繁本と簡本の関係について——』（『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』汲古書院、一九八六）参照。
 - 13 「挿増田虎王慶」と題名に書かれた版本がある。马蹄疾『水滸書録』（上海古籍出版社、一九八六）二頁参照。
 - 14 高島俊男『水滸伝の世界』（大修館書店、一九八七）二一二～二一四頁参照。
 - 15 清代の『水滸伝』規制については、高日暉・洪雁『水滸伝接受史』（齐鲁書社、二〇〇六）一六二～一六七頁参照。
 - 16 むしろ金聖嘆を有害書『水滸伝』を広めた悪人と見なす者もいた。例えば、乾隆十九年（一七五四）、胡定は上奏文で「悪薄輕狂曾經正法之金聖嘆妄加贊美。（輕薄な悪人でありすでに法によって裁かれた金聖嘆が妄りに称賛を加えた。）」（『定例彙編』卷三）と述べている。

第一部

『水滸伝』の成立 ——宋代忠義英雄譚への転換

第一章：『水滸伝』 征遼故事の成立背景

——「宋代忠義英雄譚」に則した作品形成

はじめに

『水滸伝』第八十三回から第八十九回には、朝廷に帰順した宋江が最初の任務として北方の夷狄の強国遼を征伐する物語、すなわち「征遼故事」が見られる。宋の正規軍となった宋江率いる梁山泊集団は、遼の支配する都市を次々と攻略し、最後には遼を降伏させるに至った。梁山泊集団の勝利に終始する征遼故事は、彼らの強さが際立って描かれている部分と言えるだろう。だが後述するように、その内容があまりに粗雑なことから、『水滸伝』という作品が現在見られる構成をほぼ備えるようになった後に加えられた蛇足という印象を持たれてしまった。したがってその成り立ちも、深く研究するほどの意義はないと考えられてきた。

征遼故事が物語としての魅力に欠けるという見方に関しては筆者も同感である。だがその『水滸伝』における意義を鑑みると、単なる蛇足として片付けてしまうわけにはいかない。遼の討伐は宋江が朝廷に帰順してから最初に与えられる任務であり、その朝廷への忠義を初めて具体的な行動で示せる絶好の機会となっている。つまり征遼故事は『水滸伝』の重要概念と目される忠義と深く関わっているとも言えるのである。物語として魅力に欠けるという理由のみによって、その創作要因も取るに足らないと決めつけてしまうのは短絡的であろう。征遼故事の成立は『水滸伝』全体の構成の成立と関連づけて考察する必要があるのではないだろうか。

本章では『水滸伝』の征遼故事の成立について、作品全体の成立過程を念頭に置きながら検討していく。『水滸伝』前史である史実や梁山泊故事群の性質、及び同時代の他の通俗文芸作品の特徴を考察することによって、『水滸伝』の基本構成が形成される過程でその不可欠の要素として征遼故事が作り出されたことを明らかにしたい。さらに征遼故事の成立背景に見られる現象が、中国小説史における物語創作意識の或る変化を最初に具現化したものであることにも言及したい。

本論に入る前に、征遼故事に対する従来の評価と、その成立に関する先行研究について確認しておく。

これまで征遼故事は、「既無歴史的根據、又無出色的寫法、實在沒有什麼價值。（歴史的な根拠もなく、突出した描写もないため、見るべき価値は全くない。）」¹、「ほかの部分と話がつながらない。必然性がない。登場人物がふえも減りもしないのも不自然だ。とりはずしてもいっこうさしつかえない。いやとりはずしたほうが自然である。その上、水滸伝はおもしろいのに、この部分は話もつまらないし文章も劣る。」²などのように、概ね手厳しい評価を受けてきた。その原因を探ると、物語の内容、作品内での位置づけ、他の通俗文芸作品からの借用、の三点にまとめられる。

第一点は物語内容そのものにリアリティが著しく欠けている点である。大規模な戦争を行っているにも関わらず、梁山泊集団は一〇八人の好漢に死者を全く出さずに一方的に勝利を重ねる、という不自然かつ単調な展開で征遼故事は描かれている。このほか、遼側の人物が全て実在しない、南方から攻める梁山泊集団が北から南に進軍するという単純な地理の誤りなど、個別の要素でも不自然な点が目立つ。第二点は読み飛ばしても支障がないエピソードと見なせてしまう点である。これは征遼故事において梁山泊集団が実質的にほとんど変化しないからである。そして第三点は他の物語からの借用が確認できる、つまり独創性が認められない点である。中鉢雅量氏の考察によると、征遼故事は全体的に『楊家将演義』もしくはその前身の物語を下敷きにして作られている³。

以上のことから、特に第二点の読み飛ばせるという性質によって、征遼故事は梁山泊に集結した一〇八人の好漢が朝廷に帰順して方臘討伐に赴くという『水滸伝』の基本構成が成り立った後に付加された蛇足と見なされてきた⁴。したがってその成立の解明も、あまり研究意義がないと考えられてきた。征遼故事の成立に関する先行研究は多くなく、以下の二種類にまとめられるが、いずれも妥当性に問題がある。

一つは、当時の漢人の民族的敵愾心の表れとするものである⁵。宋から明にかけて漢人が遼・金・元といった北方の遊牧民勢力の脅威に悩まされ続けた歴史状況を鑑みると、その積年の鬱憤を晴らすために作られたという説明は的確なように思われる。しかしこれには明確な反証を示すことができる。遼側が宋江を味方に引き込もうと暗に接触してきた際に、梁山泊集団の軍師呉用は宋の朝廷が奸臣に牛耳られている実情を憂えたうえで、

若論我小子愚意、従其大遼、豈不勝如梁山水寨⁶。只是負了兄長忠義之心。

愚見を申し上げますと、遼に従うのは、梁山泊の水寨にいるより悪いことはないでしょう。ただしそれでは兄者の忠義の心に背くことになってしまいます。（第八十五回）

という私見を述べている。結局は宋江の意向に従って遼と戦い続けるのだが、呉用が遼への従属に全く抵抗を感じていないことは明らかである。梁山泊集団の中心人物にこのような見解が見られるため、漢人の民族感情を要因とする説には首肯できない⁷。

もう一つは、梁山泊の好漢の一人で超人的な魔法使いである公孫勝のための花道とするものである。宮崎市定氏は征遼故事の直後に公孫勝が仲間から離れること、及びその後の方臘討伐で好漢たちが次々と戦死することに注目した。そして公孫勝を方臘討伐の前に十分に活躍させて物語世界から都合よく退場させるために、征遼故事がその活躍の場として作られたという説を提示した⁸。しかしこの説では、なぜ征伐対象が北方の夷狄の強国遼であるのかという疑問を解決できない。公孫勝が戦争で大活躍すればよいのであれば、その敵は遼以外でもよくなってしまふ。

結局のところ、征遼故事は『水滸伝』の鑑賞と研究のいずれにおいてもほとんど価値を認められてこなかったと言えよう。

第一節、『水滸伝』前史——盜賊の武勇伝

周知のように、『水滸伝』は明代の或る一時期にその全ての内容が創作されたものではない。北宋末期に宋江が盜賊として活動したという史実に端を発し、講談や戯曲など通俗文芸の世界において梁山泊の豪傑たちの物語として次第に洗練が加えられた後、最終的に明代に白話小説として集大成したものである。ただし宋江率いる盜賊団の性質やその活動内容は、長期にわたる変遷を経るうちに徐々に変化していった。

本章では『水滸伝』前史に注目し、史実における宋江の活動及び梁山泊故事群の内容についてそれぞれ整理して、征遼故事といかなる関係にあるのか考えてみたい。

(一ノ一) 史実——機動的な盜賊団

『宋史』や『東都事略』などの歴史書からは、『水滸伝』の主人公宋江に関する事績を断片的ながらも見つけることができる。その記述の大半は、宋江が北宋末の宣和年間（一一一九～一二二五）に山東・河北・淮南など中国東部で略奪を繰り返す盜賊であったことに集中している。

宣和元年十二月、詔招撫山東盜宋江。

宣和元年十二月、山東の盜賊宋江を招撫する詔勅を出した。（『皇宋十朝綱要』卷十八）

（宣和三年二月）淮南盜宋江犯淮陽軍、又犯京東河北、入楚海州。……五

月丙申、宋江就擒。

宣和三年二月、淮南の盗賊宋江が淮陽軍を荒らし、また京東や河北を荒らして、楚州・海州（現在の江蘇省北部）に入った。……五月丙申、宋江が捕まった。（『東都事略』巻十一）

しかし山東一帯で活動していたことから、史実の宋江も梁山泊を拠点としていたと考えるのは早計である。歴史書には宋江が梁山泊に拠っていたどころか、根城をどこかに設けていたとすら記されていない。このことは、史実の宋江が一定の地域を支配して恣に振舞ったのではなく、金品や食料を求めて各地を転々としたことを示しているだろう。

宋江が頻繁に移動を繰り返したことは、彼が率いる盗賊集団の構成人数を鑑みるとより理解できる。その規模は、宣和三年五月丙申に宋江が捕まった具体的経緯から推測できる。

會劇賊宋江剽掠至海、趨海岸、劫巨艦十數。叔夜募死士千人、距十數里、大張旗幟、誘之使戰。密伏壯士匿海旁、約候兵合即焚其舟。舟既焚、賊大恐、無復鬪志。伏兵乘之、江乃降。

盗賊の宋江が略奪を行って海州に侵入し、海岸に向かい、十数艘の大船を奪った。そこで張叔夜は決死の兵士千人を募り、十数里離れた場所で仰々しく旗を掲げ、宋江を誘き出して戦った。一方で密かに兵士を海岸に伏兵として潜ませ、戦闘の始まりを合図にして賊の船を焼き払った。船が燃えると、賊は恐慌状態に陥り戦意を失くした。伏兵がこの隙に乗じて攻撃したので、宋江は投降した。（『東都事略』巻一百八）

宋江集団は、知海州という一地方の長官にすぎない張叔夜が動員した千人ほどの兵士によって制圧されてしまった。陽動作戦に乗せられてしまった点を考慮しても、その規模はあまり大きくなかったと言えるだろう。少なくとも『水滸伝』で描かれているような、遼や方臘の大軍と互角以上に戦えるほどの大集団であったとは考えがたい。

宋江は朝廷に降伏した後、江南で起きた方臘の反乱の鎮圧に赴いた。

宣和二年、方臘反睦州、陷温台婺處杭秀等州、東南震動。以貫為江浙宣撫使、領劉延慶、劉光世、辛企宗、宋江等軍二十餘萬往討之。

宣和二年、方臘が睦州で反乱を起こし、温州・台州・婺州・處州・杭州・秀州などの州を陥落させ、東南地方は混乱した。そこで皇帝は童貫を江浙宣撫使に任じ、劉延慶・劉光世・辛企宗・宋江ら兵二十万ほどを率いて討伐に向かわせた。（『三朝北盟会編』巻五十二）

ただし宋江はあくまで討伐軍の一部将として参加したにすぎない。反乱鎮圧において多少の戦功は立てているが、大局を左右するような功績は一切確認できない。そもそも宋江が方臘討伐に参加した事実自体を疑う研究者もいる。宮崎市定氏は関連史料を詳細に検討した結果、方臘討伐に参加した將軍の宋江は盗賊の宋江とは同名異人である、という説を立てた⁹。宋江という人物が北宋末に実際に二人いたのかという歴史的な問題は本稿では追究しないが、少なくとも宋江の方臘討伐参加が信憑性に欠ける事実だと言うことはできる。このように個人として目立った業績もなく、事実かどうかも確定できないことから考えるに、宋江の朝廷における事績には関心がほとんど払われなかったのであろう。

ここまで述べてきたことをまとめると、史実における宋江は、特定の拠点を持たず機動的に山東一帯を荒らし回る盗賊であったと推定できる。広範囲にわたって被害を出す神出鬼没の盗賊であったことが、朝廷側から見れば非常に煩わしい存在であったことは想像に難くない¹⁰。一方で朝廷に降伏した後の事績は独自性も信憑性も乏しいものであった。歴史書に記すに値する宋江の事績が、朝廷における没個性的な活躍ではなく、盗賊としての特異な活動であったことは一目瞭然である。

(一ノ二) 梁山泊故事群——強大な梁山泊集団

北宋末における盗賊宋江の奇抜な活動は後世の人々の興味を引くようになり、通俗文芸の世界ではそれを題材とした梁山泊故事群が創り出された。梁山泊故事群では宋江だけでなく、その部下の豪傑たちにも焦点が当てられるようになる。例えば『酔翁談録』には盛り場で演じられていた講談の題目として「花和尚」、「武行者」などが挙げられており、『録鬼簿』には『黒旋風双献功』、『同楽院燕青博魚』等の雑劇の題目が見られる。

梁山泊故事群は事実を記述する歴史書ではなく、視聴する人々を楽しませる文芸である。よってその内容も史実に縛られることなく、多くの脚色が施されるようになった。

史実から梁山泊故事群における変化の最たるものは、宋江率いる盗賊集団が強大になったことである。梁山泊故事群におけるその規模は、元雑劇で宋江が登場する際の自己紹介の台詞に明示されている。

某聚三十六大夥、七十二小夥、半垓來小僂儻、威鎮梁山。

それがしは三十六人の大頭目、七十二人の小頭目、数多の手下を集め、梁山に居座っている。(高文秀『黒旋風双献功』第一折)

宋江がこのように多数の手下を従えて梁山泊を根拠地とする大盗賊になった

のは、一つには話が流伝する過程で様々な尾鱗が付け加えられた結果と考えられるだろうが、その直接の要因は梁山泊という土地に対する当時の人々の一般的な印象に求められる。梁山泊は沼沢に囲まれた地勢ゆえに、ならず者や盗賊たちが隠れ住む場所として有名であった。例えば『宋史』卷三百五十三「許幾伝」には、

梁山瀆多盜、皆漁者窟穴也。幾籍十人為保、使晨出夕歸、否則以告、輒窮治無脫者。

梁山瀆には盗賊が多く、漁民たちはみな隠れ家に使っていた。許幾は十人を一保に組ませ、朝に出て夕方に帰るようにさせ、違反すれば罪に問い、必ず徹底的に調べ上げて見逃さなかった。

と、当時の梁山泊（「瀆」と「泊」は同義）が盗賊の棲家になっていたために、住民に対して厳しい管理策が採られていた事情が記されている。また洪邁『夷堅乙志』卷六「蔡侍郎」には、北宋末の宣和七年に蔡居厚という者が病死後に地獄に落ちて責め苦を受けるのだが、それは彼が生前に鄆州を治めていた時に投降してきた梁山瀆の盗賊五百人を殺してしまったからであった、という話が見られる。以上のような歴史書や筆記の記述から窺えるように、当時の人々の脳裏には梁山泊すなわち盗賊の巢窟という認識が形成されていた¹¹。したがって山東一帯を荒らし回った有名な盗賊である宋江に、梁山泊を根城として多数の手下を従える大盗賊のイメージを重ねるのは、極めて自然な連想と言えるだろう。

以上のように梁山泊故事群には宋江集団が強大になる変化が見られる一方で、史実とはあまり変わらない面も見られる。それは宋江が朝廷に降った後の事績の位置づけである。

現在でも内容を確認できる梁山泊故事群は元雑劇を中心に十数種あるが、その中で宋江の朝廷における事績を扱っているものは二種しかない。『水滸伝』の雛型が見られる『大宋宣和遺事』¹²と、これに基づいて明代初期に皇族の周憲王朱有燾が創作したと思しき雑劇『黒旋風仗義疎財』の第四・五折¹³である。しかも絶対数が少ないだけでなく、両者ともその記述は極めて簡潔である。

『大宋宣和遺事』において、宋江が朝廷と関わる部分は次のように記されている。

有那元帥姓張名叔夜的、是世代將門之子。前來招誘宋江和那三十六人歸順宋朝、各受武功大夫誥敕、分注諸路巡檢使去也。因此三路之寇、悉得平定。後遣宋江收方臘有功、封節度使。

元帥の張叔夜という者がおり、代々将軍を輩出する家の子である。先に宋江と三十六人を宋朝に帰順させ、それぞれ武功大夫の詔勅を受けさせ、各路の巡檢使として向かわせた。これにより三路の盜賊は全て平定された。後に宋江を派遣して方臘を捕まえるのに功績があったので、節度使に封じられた。

この前には宋江たちが梁山泊に集結するまでの過程が長々と語られているのだが、朝廷に関する事績はこの引用部分が全てである。朝廷への帰順と方臘討伐の参加がわずかに数十字で概説されているにすぎない。

『黒旋風仗義疎財』では、第四折で朝廷への帰順が、第五折で方臘討伐がそれぞれ描かれている。雑劇一折が概ね数百字からなることから分かるように、その内容は簡潔にならざるを得ない。例えば第五折の方臘討伐は、梁山泊の豪傑がそれぞれ武勇を披露して方臘を捕まえるとそのまま終わってしまう。『水滸伝』における方臘討伐が多く戦死者を出しながら辛くも勝利した経緯を詳細に描いているのと比べると、その差は歴然である¹⁴。

結局のところ、梁山泊故事群は史実の延長線上にあると言えるだろう。その物語の中心は、依然として宋江の盜賊としての活躍にあった。ただし宋江集団の規模は史実とは比較にならないほど強大になり、また梁山泊を拠点とするようになった。一方で朝廷における活躍は盜賊宋江の単なる後日談にすぎず、依然として瑣末な事績と見なされていた。

(一ノ三) 『水滸伝』との断絶——朝廷や忠義と無縁な宋江

ここで本稿の問題関心である征遼故事と、以上で論じてきた『水滸伝』前史との関係について考えてみたい。

史実や梁山泊故事群を見渡してみると、宋江と遼の戦いを窺わせる記述は見られない¹⁵。それどころか、遼の存在自体が宋江らの言葉や彼らを取り巻く環境にも一切現れない。宋江と遼に関係が全く見られないことから、征遼故事の直接の原型は『水滸伝』前史にはないと言えるだろう。

さらに両者の性質を比較すると、直接の原型どころかその萌芽すら見られないとまで言い切ることができる。冒頭で述べたように、征遼故事は朝廷の一員となった宋江らの活躍を描く物語であり、忠義の精神はその動機として重要な役割を果たしている。一方で史実、梁山泊故事群ともに、朝廷における事績は単なる後日談にすぎなかった。このことは、『水滸伝』前史は朝廷を対象とする忠義の精神とも無縁であることを意味する。史実では宋江の行動が記述されるだけであり、その心情については記されていない。梁山泊故事群では宋江らの心情も詳しく描かれているが、その大半を占める雑劇諸作品では笠井直美氏が論じたように、「そもそも朝廷への忠誠心が皆無である」¹⁶。

朝廷における事績の物語は、簡潔ながらも唯一『黒旋風仗義疎財』で確認できた。しかし劇中の宋江らは朝廷に無関心で、忠義とも無縁である。朝廷に帰順したのは自ら望んだからではなく、劇の前半で彼らが助けた李[弔敵]古という人物に次のように説得されたからである。

何不因這機會出來首官、與官裏盡忠。南征北討、得了功勞、做個大官、封妻蔭子、喫堂食、飲御酒、不強似你每那牛皮帳房裏、每日殺人、又不安穩。

どうしてこの機会に投降してお上に忠誠を尽くさないのですか。あちこちで戦って手柄を立てれば、大官となって妻子も恩恵に与るようになるし、お上から支給される飯や酒を口にできるようにもなって、あなたたちのあの牛の皮のテントで毎日殺人をして不安のまま過ごすよりずっと良くなるでしょう。(『黒旋風仗義疎財』第四折)

しかもここで朝廷に帰順する利点として挙げられているのは、生存するうえで不安がなくなることである。受動的かつ即物的な理由で帰順を決めた宋江らに、自発的に朝廷に尽くそうとする精神は全く見出せない。

史実と梁山泊故事群は宋江らの盗賊としての活躍に焦点を当てているが、朝廷における事績や忠義にはほとんど関心が払われていない。一方で『水滸伝』の征遼故事は朝廷に仕えた宋江が忠義を実践する絶好の機会であった。このように両者では宋江の活動の性質が根本的に異なっているのである。したがって征遼故事が『水滸伝』前史から生み出される可能性は皆無に等しい。

第二節、通俗文芸世界における「宋代忠義英雄譚」

当然のことだが、『水滸伝』の内容の全ての原型をその前史のみに求める必要は全くない。そもそもあらゆる文学作品は、政治情勢や社会風俗など様々な事象を反映して創り出されるものである。征遼故事の端緒を『水滸伝』前史に見出せないならば、史実や梁山泊故事群を取り巻く環境に手掛かりを求めるべきだろう。

ここで、『水滸伝』が前史の段階から北宋初期の英雄一族楊家将に関する故事群（以下「楊家将説話¹⁷⁾」）と関係が深いことに注意したい¹⁸⁾。特に注目したいのは、本章冒頭において征遼故事が低く評価される原因の第三点すなわち獨創性に欠ける点で言及した、征遼故事が楊家将説話を下敷きにして作られたという中鉢雅量氏の考察である。中鉢氏は両者の影響関係の解明を目的としており、この関係が生じた背景にまでは言及していない。だが征遼故事の成立が楊家将説話と密接に関わっていることは明らかである。したがって楊家将説話の特徴とその通俗文芸における位置づけを明らかにすれば、征遼故事の成立を解明す

るための大きな手掛かりが得られるはずである。

本章ではまず明代以前における楊家将説話の構成について分析し、次に同様の構成が南宋初期の英雄岳飛に関する故事群（以下「岳飛説話」）にも見られることを論じ、最後に両説話に共通する構成を抽出してその特質について考えてみたい。

（二ノ一）楊家将説話の構成

楊家将説話は、北宋初期に楊繼業（または楊業）とその子楊六郎（名は延昭、もしくは延景）を中心とする楊一門及びその配下の武将たちの活躍を題材にしたものである。その源流は史実にまで遡ることができ、『東都事略』や『宋史』などの歴史書には山西一帯における対遼最前線を防衛する將軍として楊繼業父子の事績が記されている。

楊一門の活躍は、同じ北宋の時代から早くも人々の関心を引きつけていた。歐陽脩「供備庫副使楊君墓志銘」には、

君之伯祖繼業、太宗時為雲州觀察使、與契丹戰役、贈太師、中書令。繼業有子延昭、真宗時為莫州防禦使。父子皆為名將、其智勇號稱「無敵」。至今天下之士至於里兇野豎、皆能道之。

貴方の大伯父の楊繼業は、太宗の時に雲州觀察使になり、契丹と戦い、太師、中書令を賜った。楊繼業には延昭という子がいて、真宗の時に莫州防禦使になった。父子ともに名將であり、その智勇は「無敵」と称された。今や天下の士人から田舎の子供に至るまで、皆その活躍を語るができる。（『居士集』卷二十九）

と記されており、様々な階層の人々が楊一門の活躍を知っていた様子が窺える。また『醉翁談録』には「楊令公」や「五郎為僧」など楊業や楊六郎の兄楊五郎の活躍を扱った講談の題目が見られ、通俗文芸の題材として早い時期から取り上げられていたことも分かる¹⁹。

ここでは楊家将説話の代表として、『元曲選』に収められている雑劇『昊天塔孟良盜骨』（以下『孟良盜骨』）と『謝金吾詐訴清風府』（以下『謝金吾』）を取り上げたい²⁰。まずは両作品の内容を簡単に説明しよう。

『孟良盜骨』は、遼国内の昊天塔で晒されている楊業の遺骨を楊六郎とその部下孟良が取り返す話を描く。事の発端は、遼との戦争で死んだ楊業の靈魂が楊六郎の枕元に現れ、自分の骨を取り戻してほしいと訴えたことにある。遼国に忍び込んだ楊六郎と孟良は、知恵をはたらかせて楊業の遺骨の奪還に成功した。さらに遺骨を再び取り返そうと追撃してきた遼の軍隊も撃退した。

『謝金吾』の粗筋は以下のとおりである。宋の枢密使王欽若は、実は宋朝に

おける楊一門の影響力を除くために遼から送り込まれたスパイであり、女婿の謝金吾と結託して楊家が朝廷から賜った京城の邸宅清風無佞楼を取り壊した。事情を知った楊六郎は無断で対遼最前線の任務地を離れて京城に入ったが、王欽若に捕まってしまう。また楊六郎に同行した部下の焦贇も怒りに任せて謝金吾一家を皆殺しにしたために捕まってしまった。王欽若は二人とも死刑に処そうとするが、彼が遼のスパイである証拠を孟良が入手したことにより事態は一転する。王欽若が処刑される一方で楊六郎らは赦免され、清風無佞楼も再建された。

次に両作品の構成について見てみたい。ともに物語の主軸は、楊一門とその部下たちが遼と戦って勝利することにある。『孟良盗骨』では物語の背景として楊業と遼との戦いがある。楊業は志半ばで戦死してしまうが、楊六郎らはその遺骨を遼から取り戻すことができた。また楊六郎らが実際に遼軍との戦闘に勝利する場面も見られる。『謝金吾』では直接の戦闘描写こそないが、楊六郎と遼のスパイ王欽若との争いが中心になって物語が展開し、王欽若が処刑されることで決着がつく。両作品とも最後には、楊一門が遼に勝利したことによって宋朝に平和がもたらされたことが高らかに謳われる。

楊一門がこのように遼と戦うのは、ある強い心情が動機としてはたらいっているからである。その心情とは、一族が結束して朝廷に貢献する忠孝の精神である。楊六郎は劇中で初めて登場する際に、

父兄為國行忠孝、勅賜清風無佞楼。

私の父や兄弟は国のために忠孝を行ったため、朝廷から清風無佞楼を賜った。(『孟良盗骨』第一折、及び『謝金吾』第二折)

と、これまで自分の一族が挙げた功績を朝廷への貢献という観点から紹介している。この一族の血を継ぐ楊六郎の劇中での活躍は、最後に皇帝から称えられることになる。

楊延景全忠全孝、捨性命苦戦沙場。

楊六郎は忠と孝のかたまりであり、命を賭けて戦場で戦った。(『孟良盗骨』第四折)

楊六郎合門忠孝、焦光贇侠氣超羣。皆是我天朝名将、加服色並賜麒麟。

楊六郎一門は皆忠孝であり、焦贇の侠気は並外れている。皆我が宋朝の名将であり、正式な官服と麒麟の帯を下賜しよう。(『謝金吾』第四折)

つまり孝に厚い楊一門の朝廷への忠義は、自他ともに認める美德となってい

るのである。

ただし楊一門の華々しい活躍は全く障害なしに遂行されたわけではない。同じく宋朝に仕えながら自己保身に執着し、楊一門の活躍に強い危機感をつのらせて彼らの抹殺を図る奸臣が敵対者として立ち上がるからである。『孟良盜骨』では第一折の楊業の靈魂の話において、彼と奸臣潘仁美との対立が語られている。楊業は潘仁美の謀略によって虎口交牙谷で遼軍に包囲されてしまう。救援を要請するために本営に向かわせた七男の楊延嗣は潘仁美に殺されてしまい、楊業自身も結局は万事休して李陵碑に頭を打ちつけて壮絶な最期を遂げた。ここで楊業とともに登場する楊延嗣の靈魂は、

只恨那潘仁美這個姦賊、逼的俺父子並喪番地。

ただ憎らしいのは奸賊潘仁美が、我ら親子ともども異国の地で死に迫いやったことだ。

と、潘仁美への激しい恨みを吐露している。『謝金吾』では遼のスパイとして宋朝から楊一門の勢力を排除しようと画策する王欽若がまさに奸臣として振る舞っている。この二人の奸臣の暗躍により、楊業と楊延嗣は実際に命を落とし、楊六郎も処刑される寸前まで追い詰められている。

ここまで挙げてきた楊家将説話の特徴は、次の三点にまとめられるだろう。第一に、楊一門とその配下の豪傑たちが北方の夷狄の強国遼を打ち破る。第二に、その精神的な背景には結束の強い一族による宋朝への忠義が見られる。そして第三に、朝廷内で暗躍する奸臣によって命を狙われ、中には命を失う者も出た。

楊家将説話はこの三点の要素によって人々の関心を引きつけたと言えるだろう。物語の中核は、忠孝の精神を持ち合わせる英雄とその配下の豪傑たちが力を合わせて外敵を倒すという勇ましい経緯にある。しかし決して彼らの智勇のみが一面的に強調されているわけではない。奸臣の妨害によって命を奪われる危険性が常に背後に潜んでいるからである。このような緊張感が背景にあることにより、かえって楊一門の活躍は命懸けのものとして際立つことになり、聴衆や観客も懸命に戦う楊一門に容易に感情移入できるようになるのである。

(二ノ二) 岳飛説話との共通性

楊家将説話は宋代以降の通俗文芸の世界において盛行していた英雄物語の一つであるが、当時は他にも多くの英雄物語が人々に親しまれていた。例えば三国時代の関羽、唐代の尉遲敬徳、五代の李存孝などの活躍を題材にした物語は、それぞれ楊家将説話とは時代背景も物語構成も異なっているが、英雄の個性とその独特の活躍によって好評を博していた。ただし当時演じられていた英雄物

語の中には、楊家将説話とよく似た構成を持つものも見出すことができる。それは南宋初期の名将岳飛の活躍を描いた岳飛説話である。

岳飛説話も起源は史実に遡れる。『宋史』などの歴史書によると、岳飛は南遷した宋朝の復興のために楊么など国内の反乱勢力や北方より侵略してくる金を破って多大な功績を挙げたが、金との和平を目指す宰相秦檜に疎まれ、その謀略にかかって非業の死を遂げた。通俗文芸における岳飛説話は、この秦檜による謀殺を基にして発展したものであり、雑劇『地藏王證東窓事犯』や小説『大宋中興通俗演義』などの作品が作られた²¹。

岳飛説話と楊家将説話は同じ宋代の事象を描いているが、北宋初と南宋初で時期が大きく隔たっており、内容に直接的な関係もない。それにも関わらず岳飛説話の物語構成を見てみると、楊家将説話と同様の構成要素を確認することができる。

まずは北方の夷狄の強国と戦って勝利する点である。岳飛説話においてその敵国は遼ではなく長江以北を制圧した金であるが、遼も金も北方から宋に圧力をかけた夷狄の強国という点で大差はない。南進してくる金軍に対して、岳飛は部下の牛皋らと協力しながらたびたび勝利を収める。最終的には金軍の南下を押し返し、かつての北宋の首都汴京に迫るまでに至った。

夷狄の強国と戦う精神的背景としての朝廷への忠義は、岳飛の場合さらに鮮明になっている。この事情を端的に表しているのが、背中に「盡（精）忠報國」の四字を刻むことで自らの忠義の志を可視化させたという逸話である。ほかにも岳飛は宋朝への忠義を様々な場面で表明している。

今日只要掃蕩胡虜、迎還二聖、復其旧日江山、以報国家。此乃是我平生之願。

今はただ夷狄を追い払って徽宗・欽宗の二帝をお迎えし、かつての領土を取り戻して国家に報いることだけを望んでおります。これこそが私の一生の願いです。（『大宋中興通俗演義』巻二「岳飛計画河北策」）

このような忠義の主張は、後の時代の作品になるほど純粹になる傾向が見られる²²。

そして岳飛の活躍を妨害する奸臣は、秦檜がその役割を担っている。秦檜は南宋の領土回復を目的とする岳飛の活躍に強い危惧を感じていた。岳飛が汴京一帯まで金軍を撃退すると、秦檜は岳飛を戦場から都に強引に召還し、さらに罪を捏造して殺してしまった。この秦檜による岳飛の謀殺は、岳飛説話の現存最古の物語である『地藏王證東窓事犯』からその核心となっている。

以上のように、楊家将説話の特徴の三点の要素はいずれも岳飛説話において

も確認できた。ただし楊家将説話とは要素の重点の置かれ方は異なっている。楊家将説話では遼を打ち破ることが主軸であり、また一族の物語であるゆえに孝の精神も強調されているのに対して、岳飛説話では奸臣による謀殺が根幹をなしている。無類の忠義の精神と失地回復も実現し得る能力の持ち主でありながら、奸臣の毒牙にかかって非業の死を遂げてしまう。この著しい不条理から生じる悲劇性が、岳飛説話を数ある英雄物語の中でも共感を強く覚えさせるものになっているのであろう。

(二ノ三)「宋代忠義英雄譚」の構成と魅力

楊家将説話と岳飛説話は明代以前の通俗文芸の世界においてそれぞれ盛んに演じられていたが、内容の異なる別個の英雄物語である。だが両者には共通する物語構成が確認できた。その三点の構成要素は、以下のように帰納できる。

第一点は、主人公の英雄が配下の豪傑たちと協力して北方の夷狄の強国と戦い、勝利を収めることである。その個々の戦闘場面では、英雄たちの智謀や武勇が具体的に描かれている。第二点は、英雄が朝廷に対して忠義を抱いていることである。これは英雄が高潔な人物であることを示すと同時に、夷狄の強国と戦う動機にもなっている。そして第三点は、朝廷内での敵対者として奸臣が立ちはだかることである。朝廷による統治の安定という公的な目標を実現しようとする英雄とは異なり、奸臣は自己保身という私利私欲のために英雄を亡き者にしようと画策する。その結果は往々にして英雄の死という悲劇に至る。

以上の三点の要素からなる物語構成を「宋代忠義英雄譚」として定義したい。宋代忠義英雄譚には聴衆や観客の共感を引き寄せる魅力が備わっている。英雄の優秀な活躍や高潔な精神という肯定的な極と、奸臣による妨害や謀殺という否定的な極が、一つの物語内で共存していることによって強い緊張感が生まれ、そこに人々が強く引き込まれるのである。物語の重点を比べると、楊家将説話と岳飛説話は異なっている。楊家将説話では英雄による夷狄の撃破という肯定的な極に、岳飛説話では奸臣による英雄の謀殺という否定的な極に比重が置かれている。しかしいずれも、もう一方の極によって裏打ちされることで人々の共感を引き込む強い緊張感を備えているという点で相違はない。

宋代忠義英雄譚の各要素は、北方の夷狄の強国という宋代独自の事情を除くと、決して楊家将説話と岳飛説話に特有のものではない。例えば忠義の要素ならば、「五関斬将」故事において一時的に曹操に仕えていた関羽が劉備のもとへ戻ることで絶対的な忠誠を貫き通したことにも見出せる²³。また優秀な活躍と悲惨な最期という二極の対比によって人々の共感を得ている英雄物語もある。元代に刊行された『前漢書平話』などに見られる、漢の建国に大いに貢献したが高祖に疎まれて殺されてしまった韓信の物語はその好例であろう。

ところが、複数の要素からなる物語構成までもが二つの説話で一致する例は他には見られない。しかも楊家将説話と岳飛説話は決して同類とは見なされず、別個の魅力的な物語としてそれぞれ盛行していた。これは宋代忠義英雄譚という物語構成が通俗文芸の世界において魅力的な物語の型の一つとして作用していたことを証明しているだろう。

第三節、宋代忠義英雄譚として必要とされた征遼故事

通俗文芸の世界において宋代忠義英雄譚の構成を有する作品は、楊家将説話と岳飛説話のほかにも存在する。それは『水滸伝』である。

まず北方の夷狄の強国に勝利する点は、征遼故事が該当する。冒頭で述べたように、征遼故事において宋江率いる梁山泊集団は次々と遼軍を撃破し、最終的には遼を降伏させるに至った。

次に朝廷への忠義は、宋江が平生から心に強く抱いているものであり、その言動の端々に見取ることができる。宋江は梁山泊に投じる前にも、盗賊に身をやつさざるを得なくなった武松に向かって、

如得朝廷招安、你便可擻掇魯智深、楊志投降了。日後但是去邊上、一鎗一刀、博得個封妻廕子、久後青史上留得一個好名。

もし朝廷から招安を受けたら、魯智深と楊志を誘って投降しなさい。後にたとえ辺境へ行っても槍働きで功績を挙げれば、妻子も恩恵に与り、久しく歴史書に良き名を残すことができるでしょう。(第三十二回)

と、朝廷に仕えて尽力することが最善だと諭している。また朝廷に帰順した後も、

縱使宋朝負我、我忠心不負宋朝。久後縱無功賞、也得青史上留名。

たとえ宋朝が私に背いたとしても、私の忠心は宋朝に背かない。後にたとえ褒賞が下されなくとも、歴史書に名を残すことはできよう。(第八十五回)

と、見返りを求めることなく朝廷に忠義を尽くす態度を度々表明している。このような宋江の愚直なまでの忠義の精神は、『水滸伝』の多くの版本の題名が「忠義水滸伝」、「忠義水滸全書」のように「忠義」の語を冠していることから窺えるだろう。

そして宋江の活躍を妨害する奸臣は、高俅・蔡京・童貫・楊戩の四人によって担われている。この四人は、忠義を尽くす宋江の活躍が自分たちの地位を脅かしかねないと強く警戒していた。よって初めは宋江の朝廷への帰順を阻止しようとして策を巡らせた。その陰謀が尽く失敗に終わり、宋江が朝廷の一員となっ

て活躍した後は、掌握している人事権を悪用してその功績に全く見合わない低い官職しか与えなかった。最後には、後顧の憂いを絶つために宋江を毒殺してしまった。

以上のように『水滸伝』にも宋代忠義英雄譚の構成が確認できる。しかし作品の変遷史に注目すると、同じ構成を有する楊家将説話や岳飛説話とは決定的な違いも見出せる。第二節で見たように、両説話は早い時期から宋代忠義英雄譚として演じられていた。一方『水滸伝』は、小説以前の段階ではこのような物語として流通していたわけではない。これは、征遼故事が『水滸伝』前史に由来しないという第一節の考察結果と同じ理由から説明できる。史実や梁山泊故事群においては宋江の盗賊としての活躍が中心であり、朝廷における活躍はあくまで後日談にすぎなかったからである。さらに梁山泊故事群は個々の豪傑の活躍を描く短編が主であり、国の存亡に関わるような重大な事件を扱う説話としてはほとんど確立していなかった。

『水滸伝』とその前史の関係、及び通俗文芸世界の情勢を総合的に考え合わせると、梁山泊故事群から『水滸伝』へと進展する過程において、魅力的な物語の型である宋代忠義英雄譚を基礎にして故事群を編集するという転換が行われたと想定すべきではないだろうか。

このような転換が行われたのは、単に宋代忠義英雄譚が人々の強い共感を呼び込む物語構成であっただけではない。宋代忠義英雄譚の要素と解釈し得るものが『水滸伝』前史とその関連事情に備わっていたからである。

朝廷への忠義という要素は、宋江の行動から導き出せる。史実や梁山泊故事群には、宋江が朝廷に降って方臘討伐に参加するという後日談が確認できた。この部分は絶対的分量が少なく、事実を簡潔に記すのみであるため、宋江が朝廷に対してどのような感情を抱いていたのかは明記されていない。だがその動機が朝廷への忠義であったと考えるのは、ごく自然な発想と言えるだろう。

英雄の活躍を妨害する奸臣という要素は、『水滸伝』前史に直接の手掛かりはない。だが宋江が活躍した北宋末の史実に注目すると、この時期には国を内部から腐敗させた奸臣がいると考えられていた。その代表的人物が蔡京と童貫である。例えば『宋史』卷二十二「徽宗本紀」の賛には、

跡徽宗失國之由……特恃其私智小慧、用心一偏、疎斥正士、狎近姦諛。於是蔡京以猥薄巧佞之資、濟其驕奢淫佚之志。溺信虛無、崇飾游觀、困竭民力、君臣逸豫、相為誕謾、怠棄國政、日行無稽。及童貫用事、佳兵勤遠、稔禍速亂。

徽宗が国を滅ぼした理由は、……ただ己のわずかな知恵を恃みにして偏っ

た配慮しかできず、正義の士を退けて媚び諂う輩と親しんだことにある。そこで蔡京は上辺と口先だけの性格で、徽宗の奢侈に耽る心を助長させた。道教に溺れ、居宅を飾り立て、民の力を弱らせたが、君臣は安楽に耽って共に驕り昂ぶり、国政を放棄して日々でたらめなことをしていた。そして童貫は戦争を始め、好戦的に遠征を繰り返したため、災いを生み出し混乱に拍車をかけた。

と、蔡京と童貫の暗躍が北宋滅亡の主要因であると記されている。また高俅と楊戩もこの二人に与した人物であった。

以上のように、宋代忠義英雄譚のうち忠義と奸臣の要素は『水滸伝』前史とその時代背景から導き出すことができる。しかし北方の夷狄の強国と戦って勝利を収めるという要素すなわち征遼故事は、第一節で論じたように、史実と梁山泊故事群に手掛かりを全く求められなかった。ちなみに史実の北宋末において、宋が遼に戦争を仕掛けた事実が確認できる。この戦争は方臘の反乱を鎮圧した後に行われたが、宋江は全く関わっておらず、しかも結果は宋の大敗に終わっている。これでは夷狄に勝利するという要素の参考にはならない。

ただしこの要素は宋代忠義英雄譚の基礎をなすものであり、梁山泊故事群を宋代忠義英雄譚に変貌させるためには必要不可欠であった。したがって同じく宋代忠義英雄譚である楊家将説話からプロットを借用して新たに物語を作り出すことで、その欠如を取り繕ったのであろう。

要するに『水滸伝』の征遼故事は、宋代忠義英雄譚に基づいて梁山泊故事群を再構築した際に、その三つの構成要素のうち夷狄を打倒する要素を独自に創れなかったため、楊家将説話を参考にして作り出された物語なのである。ただし魅力的な物語の型に則するためという創作要因は、その内容の出来を一切保証するものではない。宋代忠義英雄譚の一要素として必要に迫られて捻出された征遼故事は、冒頭で見たように『水滸伝』の蛇足と見なされるに至った。

終わりに

『水滸伝』の征遼故事が成立する背景には、梁山泊故事群を通俗文芸で流行していた宋代忠義英雄譚に則して国の大事に関わる物語へと変貌させる過程を見出せた。この過程は、征遼故事を含めた『水滸伝』全体が既存の通俗的な物語に基づいていることを表している。

最後に、本章での考察の中国小説史における意義について考えてみたい。

既存の作品に基づいて新しい作品を創り出す技法は、小説以外の分野では古くから見られるものである。例えば詩の世界における典故表現はその好例であ

るし、戯曲の世界でも『西廂記』の改変などがその例として挙げられよう。だがここで創作の基礎となるのはあくまで文人たちにその価値を認められたものに限られる。通俗文芸の物語内容は明代以前に他の作品の基礎として用いられることはなかった。

一方で白話小説には通俗文芸の物語内容に基づいて創作された作品を多く見出せる。その中でも傑作といえるものが『金瓶梅』であろう。『金瓶梅』は『水滸伝』の武松の物語に基づきながらも完全に独自の作品に仕上がっている。その価値は『水滸伝』と等しく「四大奇書」の一つと評されるに至った。

また白話小説の続書も同様の手法で作られたものと見なせる。例えば『水滸伝』の続書は『水滸後伝』・『蕩寇志』などが刊行されており、『紅樓夢』では数十種にも上る続書が作られた。作品の完成度という点から見ると、個々の続書の文学的価値は決して高くない。しかしこのような続書が特に清代に大量に出版されたという事実は、先行する通俗的な物語の内容に基づく物語創作の手法が白話小説創作の一つの潮流となっていた事態を窺わせる²⁴。

以上から、白話小説の登場とともに物語創作の意識に大きな変化が生じたと言えるだろう。従来は鑑賞されるのみであった通俗文芸作品が、白話小説においては新たな内容の物語を生産する基礎として作用しているのである。

この物語創作意識の変化を踏まえて本稿の考察結果を見てみると、梁山泊故事群を宋代忠義英雄譚に則って国の存亡に翻弄される人々を描く魅力的な物語に変質させたことも、既存の通俗的な物語を基礎とする物語創作の手法を用いたものと見なせるだろう。ただしその手法の性質は『金瓶梅』や続書とは大きく違っている。『金瓶梅』や続書で土台となったのは先行作品の内容であるのに対して、『水滸伝』では楊家将説話や岳飛説話を構成する宋代忠義英雄譚という枠組みに留まっている。だが『水滸伝』は白話小説早期の作品であり、『金瓶梅』や続書とはその文学的環境が全く異なっている。梁山泊故事群から『水滸伝』へと進展する途上の段階では、先行作品にこの物語創作手法で作られたものは全く存在しなかった。

このような事情を考慮すると、『水滸伝』は中国小説史における物語創作意識の変化を初めて具現化した先駆的作品として位置づけられるのではないだろうか。

本章では征遼故事が作り出された背景に、梁山泊故事群を宋代忠義英雄譚に則して衆目を惹きつける物語へと構築する変化が起こったことを論じた。この変化は『水滸伝』成立過程における重大な転換点と言えるだろう。しかしこれのみで『水滸伝』成立の全容が解明できるわけではない。

例えば征遼故事の物語としての完成度は、基づいた楊家将説話とは大きく異なっている。楊家将説話における楊一門と遼との戦いは、奸臣による妨害が背後にあることによって人々の共感を引き寄せる緊張感が生じていた。だが征遼故事は宋江らが一方的に勝利を収めるだけの単調な物語である。しかも高俅ら奸臣は、遼から賄賂を受けて休戦させたことを除くと、従軍中の宋江には危害を加えていない。このような内容の不備は、『水滸伝』が独自性を発揮しようとして失敗した結果なのだろうか。

また方臘討伐に関する問題も看過できない。方臘討伐自体は『水滸伝』前史の段階でも確認できるが、『水滸伝』のような梁山泊集団の崩壊につながる悲劇性は一切見られなかった。つまり方臘討伐の内容も『水滸伝』の成立過程で大きく変質しているのである。あるいはここに宋代忠義英雄譚における奸臣による謀殺という悲劇性が強く表れているのかもしれない。

以上のような『水滸伝』成立に関する諸問題の解明は今後の課題としたい。

-
- 1 胡適「『水滸伝』後考」(『胡適古典文学研究論集』(上海古籍出版社、一九八八)八一頁)
 - 2 高島俊男『水滸伝の世界』(大修館書店、一九八七)「十二、遼国征討」二二一頁。
 - 3 中鉢雅量『中国小説史研究——水滸伝を中心として——』(汲古書院、一九九六)一五三～一七五頁。
 - 4 例えば、胡適注1前掲論文、嚴敦易『水滸伝的演变』(作家出版社、一九五七)一五四～一五五頁など。
 - 5 例えば、魯迅『中国小説史略』(『魯迅全集』第九卷、人民文学出版社、一九八一)第十五篇「元明伝来之講史(下)」、汤国梁・周洪喜「《忠义水浒传》征辽部分得失论」(『济宁师专学报』一九九五年第一期)など。
 - 6 ちなみに容輿堂本より後に刊行された『忠義水滸全書』(全百二十回)では、「棄宋従遼、豈不為勝。(宋を見捨てて遼に従う方がよほどましです。)」のように、より直截な表現に改められている。
 - 7 呉用だけでなく宋江にも民族的敵愾心がないことは、中鉢雅量注3前掲書一八六～一八七頁で言及されている。
 - 8 宮崎市定『水滸伝——虚構のなかの史実』(中公文庫、一九九三)第三章「妖賊方臘」六六～六八頁。同書は『宮崎市定全集』第十二卷(岩波書店、一九九二)にも所収。
 - 9 宮崎市定注8前掲書第二章「二人の宋江」。
 - 10 史実における宋江集団の性質については、中鉢雅量注4前掲書二〇九～二一一頁参照。
 - 11 史実における梁山泊については、宮崎市定注9前掲書第九章「宋江に続く人々」参照。
 - 12 『大宋宣和遺事』自体は、歴史書や講談の種本などの記述を組み合わせて北宋末の事情を描いた通俗的な歴史読物であり、宋末元初に作られたと考えられる。岡村真寿美「『宣和遺事』の成立過程に関する一試論——その歴史書引用部分をめぐって——」(『文学研究』第九十四号、一九九七)参照。

-
- 13 本稿で用いた奢摩他室曲叢本には折の区分はないが、議論の便宜上一套数を一折に当てた。また一般に雑劇は四折構成だが、『黒旋風仗義疎財』は五折から成るといふ異例の形式をとっており、さらに前半三折と後半二折で内容が全く異なる。このような破格の形式は小松謙氏が言うように、「周憲王がしばしば行う実験的試みの一つであろう」（「内府本系諸本考」（『田中謙二博士頌壽記念中国古典戯曲論集』汲古書院、一九九一）一五四頁）。なお本雑劇は万暦年間に趙琦美が抄写した脈望館鈔本にも収められているが、後半二折の代わりに前半三折と辻褃の合う第四折が加えられ、標準的な四折構成の雑劇に改められている。
- 14 『黒旋風仗義疎財』における方臘討伐の特徴については、笠井直美「義賊の誕生——雑劇『水滸』から小説『水滸』へ——」（『東洋文化』第七十一号、一九九〇）二二〇～二二三頁参照。
- 15 雑劇作品の中に『宋公明排九宮八卦陣』という宋江と遼との戦いを題材にしたものがある。だがこれは『水滸伝』成立後に創られたものと考えられる。
- 16 笠井直美注 14 前掲論文二一九頁。梁山泊故事の雑劇において宋江たちに忠義の概念が欠如していることに関しては、同論文二一八～二二〇頁参照。
- 17 本章では「故事」という語を一つひとつの物語として、「説話」という語を一人ないしは少数の英雄を中心とする故事群の総称として用いる。先行研究での用法とは必ずしも一致しない。
- 18 例えば、魯智深と楊五郎というそれぞれの主要人物の人物像が酷似する、泰山への還願という題材が梁山泊故事群と楊家将説話の双方に見られる、など。大塚秀高「天書と泰山——『宣和遺事』よりみる『水滸伝』成立の謎——」（『東洋文化研究所紀要』第四百十冊、二〇〇〇）、陈小林「杨家将故事与水滸故事关系考述」（『殷都学刊』二〇〇八年第三期）参照。
- 19 早期の楊家将説話の形成に関しては、徐朔方「元明兩代的楊家将戯曲和小説」（『戯劇論叢』第三号、一九八二）、上田望「講史小説と歴史書（三）——『北宋志伝』、『楊家将演義』の成書過程と構造——」（『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第三輯、一九九九）、小松謙『中国歴史小説研究』（汲古書院、二〇〇一）第六章「『楊家府世代忠勇通俗演義』『北宋志伝』——武人のための文学——」参照。
- 20 楊家将説話を扱った作品のうち物語として完結しているものは、明万暦年間以降に刊行されたものしか現存していない。『元曲選』は万暦年間の刊行で、編者臧懋循の手が加わっている可能性がある。だが『孟良盜骨』と『謝金吾』は、元代の雑劇作家とその作品について記した『録鬼簿続編』や『太和正音譜』において題名がほぼ一致する作品が確認できる。よってこの二作品の内容は元代の時点ですでに広く人口に膾炙していたと見なしてよいだろう。
- 21 岳飛説話の形成に関しては、千田大介「岳飛故事の変遷をめぐって——鎮魂物語から英雄物語へ——」（『中国文学研究』第二十三期、一九九七）、笠井直美「〈われわれ〉の境界——岳飛故事の通俗文芸の言説における国家と民族（上）」（『名古屋大学言語文化国際言語文化研究科言語文化論集』第二十三卷第二号、二〇〇二）参照。
- 22 笠井直美注 21 前掲論文参照。
- 23 「五関斬将」故事は『三国志演義』成立以前から通俗文芸の世界で演じられていた。周兆新『三国演義考評』（北京大学出版社、一九九〇）一六五～一六七頁参照。
- 24 白話小説において続書が大量に出版された背景については、高玉海『明清

小说续书研究』(中国社会科学出版社、二〇〇四) 第三章「続書現象的文化成因」参照。

第二章：宋江の死と四人の奸臣

はじめに

『水滸伝』において宋江は非業の死を遂げる。朝廷への忠義を志していた地方の下級役人である宋江は、運命に翻弄されるかたちで梁山泊に流れ着いて盗賊集団の頭領に収まる。紆余曲折を経たうえで朝廷に帰順し、さらに北方の夷狄の強国遼と南方の反乱軍方臘を討伐する功績を立てた。だが朝廷で暗躍する四人の奸臣高俅・蔡京・童貫・楊戩に妬まれることになり、結局は彼らの謀略により毒殺されてしまった。

艱難辛苦を嘗めたうえで大功を立てながらも同じ勢力内の敵対者に謀殺されてしまうという展開は、深い同情を読者に植えつける。本来ならば輝かしい未来へ繋がるはずの功績が、逆に当人の命を奪ってしまう。このような不条理は、広く古今東西の伝承や文芸を見渡してみると分かるように、英雄悲劇の典型の一つとして浸透している。例えば、古代中国ならば前漢の韓信や南宋初期の岳飛が挙げられるし、日本でもヤマトタケルや源義経など枚挙に暇がない。いずれも口頭芸能や文学作品など様々なかたちで広く人口に膾炙している英雄である。

宋江の最期が英雄悲劇の普遍性を備えているとすると、『水滸伝』における重要な構成場面であると考えることができる。『水滸伝』の多くの内容がそれ以前の通俗文芸による長期間の洗練を経ていることを踏まえると、宋江の死も同様に多くの人々が長い時間をかけて熟成してきた場面と想定できるかもしれない。

ところが実際に『水滸伝』の成立史を紐解いていくと、前史の段階では宋江の死は全く描かれていない。よってこれまでの研究者は、手掛かりとなる資料が存在しない以上、宋江の死の成り立ちには注意を払ってこなかった。

しかし宋江はその死こそ描かれていないが、その活躍についてはすでに多くのことが判明している。また宋江を毒殺した四人の奸臣も、歴史上実在した人物であり、多くの資料にその事績が記されている。

このように見ても、『水滸伝』の宋江の死の成り立ちについて、前史における諸事情を分析したうえで、前史と『水滸伝』の間に見られる断絶の意味を考察することは十分に可能であろう。そしてこれは『水滸伝』自体の成立を考えるうえでも避けては通れない問題であろう。

本章では、宋江の死の成り立ちについて考察していく。通俗文芸における宋江の活動時期と、高俅・蔡京・童貫・楊戩の四人の奸臣の二点に着目し、それ

ぞれの変遷を検討することによって、『水滸伝』の宋江の死がいかにして創られたのかを解明したい。

第一節、『水滸伝』宋江の死：忠義英雄の悲劇

『水滸伝』前史の宋江の死について考察する前に、まずは『水滸伝』での宋江の死について確認しておきたい。宋江と四人の奸臣の動向に焦点を当てて、宋江の死に至るまでの過程をまとめておく。

梁山泊の頭領宋江は不本意ながら盗賊に身をやつしたとはいえ、常に朝廷への忠義を心に抱き、事あるごとに招安を受ける考えを表明していた。

小可宋江、怎敢背負朝廷。蓋為官吏汚濫、威逼得緊、誤犯大罪、因此權借水泊裏隨時避難、只待朝廷赦罪招安。

私宋江は、どうして朝廷に背きましょうか。ただ官吏が腐敗しており、ひどく威張り散らしたことから、誤って大罪を犯してしまいました。ですから梁山泊を仮の宿りとして一時的に難を避けながら、朝廷が罪を赦して招安してくださるのをひたすら待っております。（『水滸伝』第五十八回）

宋江と朝廷との関係は、一〇八人の好漢が梁山泊に集結した後、本格的に始動する。

これに対し、朝廷で暗躍する高俅・蔡京・童貫・楊戩の四人の奸臣は、宋江の帰順を阻止しようと謀り、幾度も大軍を編成して梁山泊の討伐に赴いた。だが全て失敗に終わったうえに、宋江から徽宗に直接帰順を訴えられてしまったことで、結局は宋江らの招安を受け入れざるをえなくなった。

その後宋江は、共に帰順した梁山泊の軍勢を率いて、朝廷を悩ませる二つの敵対勢力を討伐する。まずは北方の夷狄の強国遼を撃破して降伏させ、続いて南方の反乱軍方臘を鎮圧する。前者の遼征伐が一〇八人に一人の死者も出さず、快調に進軍できたのに比べて、後者の方臘討伐は鎮圧の代償として一〇八人から多くの死者を出す悲惨な戦いであった。ただし結果として宋江は大きな功績を立て、その忠義を実践することができた。

一方で四人の奸臣は、外敵を討伐して朝廷に大きく貢献した宋江を疎ましく感じ、何とかして排除しようと企んだ。そこでまずは宋江ら一〇八人のうち方臘討伐で生き残った者たちをそれぞれ異なる地方に派遣することで連携を分断させ、さらに宋江には遅効性の毒酒を飲ませる策を実行した。

陰謀によって毒酒を飲まされてしまった宋江は、それでも朝廷を怨むことなく、忠義の精神を貫いて死を受け入れた。

今日朝廷賜死無辜、寧可朝廷負我、我忠心不負朝廷。

今日朝廷は無実の私に死を賜りましたが、たとえ朝廷が私に背いても、私の忠心は朝廷には背きません。(『水滸伝』第百回)

以上の経緯をまとめると、盗賊出身でありながら忠義を強く志す宋江と、朝廷の高官でありながら忠義の人物を排除しようとする奸臣の、本来の役割が転倒した対立が『水滸伝』の中軸を形成しているのである。宋江の最期は、作品中で長らく展開してきた両者の対立の最終的な決着であり、悲劇に彩られている。

この宋江と奸臣の対立は梁山泊集結後の部分だけではなく、作品全体にも及んでいる。例えば、一〇八人の好漢林冲や楊志が梁山泊に行き着いた原因を探ると、奸臣の高俅による迫害が遠因となっている。林冲は妻が高俅の養子高衙内に横恋慕されたことにより、高俅によって無実の罪に陥れられてしまった。また花石綱運搬の任務失敗で逃亡していた楊志は、全財産を費やした復職活動を高俅に一蹴された結果、路頭に迷い、正当防衛とはいえ殺人を犯すに至った。梁山泊集結後の部分では宋江に焦点が当てられているものの、忠義と奸臣の対立は『水滸伝』全体を通して描かれていると言ってよいだろう。

『水滸伝』の核心を忠義英雄と奸臣の対立、およびその結果としての宋江の悲劇と捉える見方は、明末以降の人々の間でもはやされた読解の一つとなっていた。例えば明末思想界に多大な影響を与えた李卓吾は、『水滸伝』の中でも特に死をも恐れぬ宋江の忠義の姿勢を絶賛している¹。

則謂水滸之衆、皆大力大賢、有忠有義之人可也。然未有忠義如宋公明者也。今觀一百單八人者、同功同過、同死同生、其忠義之心、猶之乎宋公明也。獨宋公明者身居水滸之中、心在朝廷之上。一意招安、專圖報國。卒至於犯大難、成大功、服毒自縊、同死而不辭。則忠義之烈也、真足以服一百單八人者之心。故能結義梁山、爲一百單八人之主。

水滸に集まった人々は、みな武勇や智力があり、忠や義に厚い人物とすることができると言える。しかし宋江のように忠義を持った者はこれまでにいない。今一〇八人を見てみると、功績と過失、死と生を同じくし、その忠義の心は宋江と同様である。しかしただ宋江のみは、身は水滸にありながら、心は朝廷にあった。ひとえに招安を願い、国に報いることのみを考えていた。遂には大難を克服して大功を成し遂げたが、奸臣に毒を飲まされて首を吊り²、仲間と共に進んで死を選んだ。まさしく忠義の極みであって、一〇八人の心を従えられたのである。だから梁山泊に義兄弟を集結させ、一〇八人の主となれたのである。(『忠義水滸伝序』)

李卓吾は一〇八人の好漢を称えつつも、宋江の忠義はそれとは別格であると高く評価している。

このように宋江の忠義を高く評価する見方は、版本の推移にも影響を及ぼしている。百二十回本は百回本を増補するかたちで作られたが、増加された二十回は宋江が敵対勢力を討伐することで朝廷に貢献する物語となっている。この改変の目的は、宋江の忠義をより深く印象づけるためであろう。

忠義の英雄である宋江と四人の奸臣の対立が『水滸伝』の核心を担っていることは、明代の知識人や出版者に広く浸透していた。したがって『水滸伝』の成立について考察するうえで、宋江の死と奸臣の妨害の二点の成り立ちは追究しなければならない論点となるだろう。

第二節、描かれぬ宋江の死：関心の対象外

宋江は『水滸伝』において不本意なかたちで死を迎える。忠義を尽くして比類なき功績を立てながらも、結局は奸臣に毒殺されてしまった。多くの読者は、北宋末期の徽宗の時代を舞台にした物語で壮絶な最期を遂げた場面を読むことにより、「宋江は北宋末期に殺された」という印象を強く持つであろう。第一章で述べたように、当時の読者は『水滸伝』が宋代忠義英雄譚の中核を借用した楊家将説話や岳飛説話にも広く親しんでいたと想定できる。このことを踏まえると、宋江の死は楊業や岳飛と同様の忠義英雄の悲劇として映ったであろう。

『水滸伝』は基本的に虚構の文学作品であるが、史実に端を発し、通俗文芸での洗練を経てきた歴史を有する。つまり小説内の多くの要素は、変遷というかたちで辿ることができる。例えば梁山泊の構成員は、すでに多くの研究者が指摘しているように、当初は三十六人であったが、人員や順序の入れ替わりなどを経て、最終的に小説の一〇八人に落ち着いた³。

ところが宋江の最期は、梁山泊の構成員のように変遷を辿ることができない。『水滸伝』の重要場面にしては意外に思われるかもしれないが、その理由は至極明快である。資料が全く残っていないからである。よって宋江の死が前史から『水滸伝』にかけてどのように変遷していったのかは、調べようがないということになる。

ただし前史における宋江に関する資料の性質を突き詰めていくと、宋江の死を記す資料が存在しない理由は明らかにできる。そのために、まずは小説の原点となった史実から考えていこう。

一〇八人の好漢はその大半が架空の人物であるのに対し⁴、宋江は『東都事略』や『宋史』などの歴史書にその事蹟が記載されている実在の人物である。歴史資料における記述は少ないものの、その大まかな足跡は辿ることができる。

史実の宋江は山東一帯を荒らし回った盗賊であった。ただし小説とは異なり、梁山泊のような拠点は構えておらず、率いていた人数もあまり多くない。しかも各地を転々とした末に、一地方長官である張叔夜によって制圧されてしまった。その後は朝廷軍に加わり、江南地方で反乱を起こした方臘の討伐に参加したようである。この方臘討伐に従軍した宋江に対しては、盗賊の宋江とは同姓同名の別人という疑問が呈されている。この真偽は定かではないが、いずれにせよ方臘討伐において宋江は目立った功績を上げていない⁵。

以上が史実の宋江に関する記述の全てである。ここからは、歴史書を著した人々が宋江のどのような点に関心を抱いていたのかが浮かび上がってくる。彼らは宋江の盗賊としての活動に注目したのである。少数の集団でありながら世間を震撼させた指導者宋江の奇抜な才能に興味を抱いて筆を執ったのである。

これは言い換えるならば、歴史家たちは宋江の盗賊としての活動以外の点、例えば盗賊をやめた後の活動にはほとんど関心を寄せなかったことになる。宋江の死がなぜ歴史書に記されていないのかという疑問も、この姿勢から説明できよう。宋江の死は歴史家たちの関心の対象にならなかったのである。史実の宋江が『水滸伝』と同様に対立者の謀略によって殺されたのか、それとも戦場で壮絶な戦死を遂げたのか、はたまた天寿を全うしたのか、現在となっては想像に任せるしかない。

史実を基にして話を膨らませた梁山泊故事群においても、基本的な事情は変わっていない。通俗文芸の担い手たちは、宋江らが梁山泊を形成し発展させる過程に重点を置き、講談や演劇作品などにまとめていった。現存する梁山泊故事群は数が多いとは言えないが、その大半を占める雑劇作品は、「梁山泊黒旋風負荊」や「同楽院燕青博魚」など、梁山泊に腰を据えている李逵や燕青らの物語となっている。

梁山泊に集結した宋江らのその後、具体的には朝廷に帰順した後の活躍を描いたものは、『大宋宣和遺事』およびこれに依拠したと思しき朱有燬「黒旋風仗義疏財」の二作品しか確認できない。両者とも宋江らが朝廷に帰順して方臘討伐に参加したことを描いているが、いずれもその描写は簡略であり、後日談として軽く扱われていることが窺える。しかも共に方臘が捕まった時点で物語が終わってしまい、宋江の死は依然として描かれていない。

結局のところ、『水滸伝』前史の段階では、人々の宋江らに対する関心はその最盛期である盗賊としての活躍に限られていたのである。一方でその後の経緯は、朝廷に帰順した後の活躍ですら後日談として重視されなかった。ましてやその先にあるはずの宋江の死に関心が向けられなかったのも無理はない。もし仮に当時の人が宋江たちの活躍に関心を示し、そして宋江の死に興味を抱いて

調べたとしても、資料が見つからずに断念するという結果に終わったであろう。

第三節、南宋初期に現れる宋江

『水滸伝』前史における宋江の死は、歴史家や通俗文芸の担い手たちが関心を寄せなかった以上、その真相を追究する術はない。よって宋江がいつ死んだのかという問いは回答不能に陥ってしまう。

そこで少し視点を変えることにしよう。前史の段階で、宋江はいつごろまで活躍したと考えられていたのか。このように疑問の立て方を変えてみると、一つ興味深い事実が見えてくる。それは、当時の人々は「宋江が北宋末期に死ぬ」とは全く認識していなかったことである。この認識が窺える例を二つ挙げよう。

一つは、明嘉靖年間に邵璨が創作した戯曲『香囊記』⁶である。北宋末期から南宋初期にかけての混乱の時期を背景に、主人公張九成とその一家が金の侵略によって離散するも、張九成が妻から送られた「香囊（香り袋）」を縁として再び一同に会するまでの過程を四十二齣で描いた作品である。

その第二十六齣「義釋」で、冒頭に登場する盗賊の手下は次のように発言する。

自家不是別人、乃是宋江手下的一個兄弟。大宋為秦賊弄權、困辱諸將。契丹占擾中原、勢逼南畿。即日遷都臨安、士民奔走、哭聲載道。

俺はほかでもない、宋江の手下の者だ。宋朝は秦檜の奴に牛耳られ、諸將が苦しめられている。契丹⁷は中原を占領して荒らし、その勢いは南郊にまで迫っている。最近都が臨安に遷ったが、人々は逃げ惑い、泣き声が道に満ち溢れている。

この後宋江本人が登場して、次のように現状を述べる。

如今宋室南遷、士民奔走。路上強暴、侵凌寡弱。

今や宋の皇室は南へ遷り、人々は逃げ惑っている。道々の強盗たちが、弱い者たちを虐げている。

金が中原へ進出したことによって都が南方の臨安に遷り、秦檜が朝廷で権力を掌握している状況は、明らかに南宋初期のものである。『香囊記』ではこの状況下に宋江を登場させているのである。

『香囊記』は梁山泊故事群とは全く関係のない作品である。また作品全体から見ると、宋江はこの場面のみが登場する端役にすぎない。しかしだからこそ、作者邵璨の頭の中では、宋江が南宋初期にも活躍していたという認識があったと言えるのである。さらに付け加えるならば、『香囊記』を鑑賞する人々もこの

南宋初期に登場する宋江を違和感なく受け入れたはずである。一場面にしか登場しない宋江という有名な人物に、一般的な認識と大きく異なる設定を加えるとは考え難い。

もう一つは、明代万暦年間を中心に活躍した呉從先の読んだ『水滸伝』である。現存する『水滸伝』は最古のものでも万暦年間のものであるが、記録によれば嘉靖年間にはすでに出版されていた形跡が窺える。そして現存するものでも百回本・百二十回本・七十回本など多様な版本があるように、成立初期には現存する版本とは異なる内容が載せられていたものも流通していたと想定できる。この初期の『水滸伝』について書かれた資料が、呉從先の「読水滸伝」という文章である⁸。

原書からの引用と思しき文を二つ取り上げよう。

三誓衆曰「宋室流離、金人相阨。苟能我用、當聽其指揮、立大功名。」

宋江は皆に三点の誓いを立てた。「宋の王室は流離い、金人が侵略している。もしおまえたちが私に用いられるならば、私の指揮に従って大きな功名を立てねばならない。」⁹（『小窓自紀』卷三「読水滸伝」）

潜攬西湖、竊嘆曰「誓清中原、長江擊楫、水驚波撼、將軍用命。而今固秀鬱葱、山空水濼。宋徳不長、湖為妖矣。」

宋江はこっそり西湖を見ると、密かに嘆いた。「東晋の祖逖は中原の平定を誓って、長江で楫を叩いたから、水は震え波は立ち、將軍たちは命を懸けたのだ。しかし今ここは草木が鬱蒼と生い茂り、山は人氣がなく水は逆巻いている。宋朝の徳が振るわないのは、この美しい西湖に惑わされているからだ。」（同上）

この二つの宋江の発言は、領土の北半分が金に占領された南宋初期に宋江が登場していることを如実に物語っている。「長江で楫を叩く」というのは、東晋の武将祖逖がこのように行動することによって失われた長江以北の土地を取り返す壮絶な決意を示した故事である¹⁰。南宋初期の状況と酷似する東晋の故事を引き合いに出していることも、宋江が南宋初期に登場する設定を裏付けることになる。

残念ながら呉從先の読んだ『水滸伝』は現存しない。しかし現存する『水滸伝』諸版本が流布する前には、金が南下した南宋初期に宋江が活躍するという設定の『水滸伝』が流通していた事情が窺えるだろう。

以上の二点の資料からは、百回本など現在まで残っている『水滸伝』が流通する前の人々にとって、宋江は南宋初期にも活躍したという認識があったこと

が読み取れた。もし仮に、『水滸伝』読者のように「北宋末期に宋江が死ぬ」という認識が浸透していたならば、この二点のような資料は出現しえない。

北宋末期に起こった社会の混乱は、直後の南宋初期にもほぼそのまま継承されている。そして『水滸伝』前史の段階では、宋江の死には全く関心が向けられていなかった。この二つの事象を組み合わせて考えれば、北宋末期に活躍した宋江が南宋初期にも現れるのは、ごく自然な発想と言えよう。

第四節、奸臣の変遷：無関心から不徹底へ

『水滸伝』において宋江を死に追い込んだのは、朝廷内で暗躍する高俅・蔡京・童貫・楊戩の四人の奸臣である。この四人の妨害は宋江だけではなく、林冲や楊志など梁山泊の好漢全員に及んでいる。つまり四人の奸臣は、『水滸伝』全体の敵役という重要な役割を担っていると言えよう。

『水滸伝』で憎まれ役となっているこの四人は、いずれも歴史上実在した人物であり、やはり奸臣として評価されている。このように述べると、『水滸伝』で描かれる宋江と奸臣の確執は歴史的事実であったと思われるかもしれない。だがこれは二つの理由から誤りと言える。

その理由の一つは、史実の高俅ら四人の実態が『水滸伝』のそれとは大きくかけ離れているからである。史実において北宋が崩壊したのは、奸臣の暗躍が主な原因と考えられている。その奸臣の中でも筆頭と見なされたのが、『水滸伝』にも登場する蔡京と童貫である。北宋最後の皇帝欽宗が即位した際に大学生の陳東は弾劾文を上奏し、蔡京と童貫に王黼・梁師成・朱勔・李彦を加えた六人を、国を崩壊させた元凶「六賊」として厳しく処罰するように求めている。

今日之事、蔡京壞亂於前、梁師成陰謀於後、李彦結怨於西北、朱勔結怨於東南、王黼、童貫又結怨於遼金、創開邊隙。宜誅六賊、傳首四方、以謝天下。

今日の事態は、蔡京が前で国政を崩壊させ、梁師成が後ろで陰謀をめぐらせ、李彦が西北で、朱勔が東南で民衆の恨みを買ひ、王黼と童貫が遼や金の恨みを買って、戦端を開いたことに因ります。ですからこの六賊を誅殺し、首を四方に示して、天下に謝罪すべきです。（『宋史』卷四百五十五）

この弾劾の結果、「六賊」はそれぞれ流刑に処され、蔡京が移送中に病死したほかは、流刑先で処刑されるに至った。

陳東が挙げた「六賊」には、『水滸伝』の四人の奸臣のうち高俅と楊戩が挙げられていない。このうち楊戩が挙げられていないのは、単に時期的な問題にすぎない。楊戩は陳東の弾劾文が出される前の宣和三年（一一二一）にすでに死去していた。ただし生前の楊戩は、「六賊」の一人李彦の前任者として活躍して

いた。よって陳東が弾劾文を上奏する際にもし楊戩が生存していたならば、おそらく李彦の代わりに楊戩が弾劾されていたであろうと推測できる。

注意すべきは高俅である。『水滸伝』では敵役の代表となっている高俅は、史実では「六賊」に代表される奸臣たちの一人という、やや目立たない評価が下されている。高俅は軍政を崩壊させたことで糾弾されているが、上の弾劾と比べると追及の手はやや緩やかなものとなっている。

俅以幸臣躡躋頭位、敗壞軍政、金人長驅、其罪當與童貫等。

高俅は徽宗のお気に入りであることを利用して高い位に上り、軍政を崩壊させ、金人の侵攻を招きました。その罪は童貫と同じです。(『宋史』卷四百四十六)

史実の奸臣たちの重要度は、『宋史』で伝が立てられているかどうかからも判断することができる。李彦以外の「六賊」と楊戩には伝がある。ただし李彦は楊戩伝の中にその事跡を紹介する文が見られるので、伝があると見なすことができる。だが高俅のみは伝が立てられておらず、まとまった紹介文も見られない。

このように、史実の奸臣は『水滸伝』とは実態が大きく異なっている。史実では「六賊」、特に蔡京と童貫が元凶とされていた。一方で『水滸伝』で一番の悪役である高俅は、「六賊」に与した人物としか見られていなかった。

宋江と奸臣の確執が史実ではないもう一つの理由は、史実の奸臣と宋江にはそもそも接点が見出せないことである。もしかしたら、彼らが政治を私物化して社会を混乱させたことが、宋江が盗賊となった遠因の一つと考えることもできるかもしれない¹¹。だが少なくとも両者に直接の面識はない。宋江は名を馳せたとはいえ、結局は一地方の盗賊にすぎない。現に張叔夜という一地方長官の手によって制圧されてしまった。一方蔡京らは当時政治の中枢を担っていた人物である。その彼らの目には、宋江の活動は一地方の小さな問題にしか映らなかったであろう。宋江が朝廷に降伏した後も、関わりは見出せない。史実の宋江はほとんど功績を挙げておらず、また政治の中枢に進出したわけでもない。

以上のことをまとめると、史実の宋江と高俅らは活躍していた舞台が全く異なっており、同時代の人物ということ以外に接点は見出せないのである。

宋江と高俅らに関係がないことは、その後の通俗文芸の世界でも同様である。

まず、宋江らの活躍を扱った梁山泊故事群には、高俅ら四人の奸臣は全く登場しない。その一番の要因は、すでに述べたように、梁山泊故事群が基本的に盗賊としての活躍を描いた物語だからである。朝廷での活躍は後日談程度の比重しか置かれていなかった。

一方奸臣に視点を転じると、高俅らが登場するものは少数ながら確認できる。しかしこの四人に焦点が当てられているものは皆無である。そもそも悪人であることから物語の主役にはなり得ないうえに、敵役として通俗文芸の世界で浸透しているわけでもない。例えば『大宋宣和遺事』では、徽宗のお忍び遊びを描いた場面¹²に、高俅と楊戩が徽宗の腰巾着として登場している。その振舞いは単なる従者のそれにすぎず、政治を動かす奸臣としての側面は全く描かれていない。

要するに、『水滸伝』前史の段階において、宋江と高俅らは全く接点を持っていないのである。高俅らは歴史の領域に留まっており、文芸の世界にはほとんど足を踏み入れていない。一方宋江ら梁山泊の好漢も、朝廷とはほぼ無縁の世界で活躍していた。

このように接点の全くない忠義の宋江と奸臣の高俅が組み合わせられたのが『水滸伝』である。『水滸伝』における高俅ら四人の奸臣は、前史とは一転して、敵役として作品に欠かせない登場人物となっている。忠義の英雄宋江を死に追いやるほか、高俅に至っては作品の初めから登場し、林冲や楊志を迫害してその悪人ぶりを印象づける。忠義の宋江らと奸臣である高俅らの対立が、『水滸伝』の全体を貫いているのである。

しかしその作中での言動を詳しく見てみると、悪人として徹頭徹尾立ちまわっているとは言い切れない面がいくつか見られる。以下、その二点を見ていこう。

まずは、高俅ら四人の奸臣の登場に相当の偏りが見られることである。下の表はこの四人の『水滸伝』における登場回を、宋江ら一〇八人が梁山泊に集結する第七十一回を境にして前後に分けて示したものである。

	集結前	集結後	合計
高俅	2,7,12,54,55	72,73,75,76,78,79,80,81,82,83,89,100	17回
蔡京	17,63,64,67	73,75,78,79,80,83,89,90,100	13回
童貫	63	73,75,76,77,78,80,82,83,89,90,97,98,99,100	15回
楊戩		72,73,75,76,80,83,89,100	8回

一見して明らかなように、四人の奸臣の登場は一〇八人の好漢が梁山泊に集結した後の部分に偏っている。ただし集結前の部分でも、高俅の従弟である高廉や、蔡京の娘婿である梁中書など、四人の奸臣の関係者が好漢を迫害しており、表に示したよりは集結前にも奸臣が登場している印象があるかもしれない。だが関係者の登場を考慮に入れたとしても、奸臣の登場が全体的に梁山泊集結後の部分に偏っている事実は動かない。

次に、『水滸伝』の高俅らには奸臣らしからぬ言動も見られる。例えば、梁中書は、義侠心から犯した罪で自分の管轄区に流されてきた楊志の能力を見抜き、武将として破格の待遇で取り立てる。これは、不遇にある有能な人材を抜擢する、優れた指導者の行為と言えるだろう¹³。また童貫は、方臘討伐の最中に次々と義兄弟を失った宋江を慰めている。奸臣としての人物像を徹底させるならば、このような良き理解者としての側面は一番に書き換えるべきものであろう¹⁴。

以上の二点から考えるに、忠義の宋江と奸臣の対立が作品の中核を担っているにも関わらず、『水滸伝』における四人の奸臣の悪人像はかなり不徹底であると言わざるをえない。

第五節、早急な宋代忠義英雄譚への変化の痕跡

ここまでの議論をまとめておこう。『水滸伝』前史の時点での宋江の死は、人々の関心の対象外であった。それゆえに『水滸伝』が成立する明代中期までは、宋江が南宋初期にも登場するという認識が見られた。一方奸臣は、史実では『水滸伝』と実態が大きく異なっており、通俗文芸とも無縁であった。そのうえ『水滸伝』の奸臣には悪人として徹底されていない面も見られた。総じてみると、宋江の死と奸臣に関しては『水滸伝』とその前史との間に大きな断絶が横たわっているのである。奸臣に関しては、『水滸伝』においても作中に定着しきれていなかった。

この断絶の橋渡し役および奸臣の不安定さについては、第一章で議論した、宋代忠義英雄譚の導入による『水滸伝』の成立で説明できる。前史の時点では、後日談ではあるが宋江は朝廷に帰順して方臘討伐に加わっていた。このことから宋江と朝廷で活躍する動機すなわち忠義は容易に結びつけることができる。また北宋末期には奸臣が暗躍していたという事実があった。一方で同じく宋代を舞台とし、忠義英雄として活躍した楊業が奸臣の潘仁美によって死に迫りやられる楊家将説話、同じく忠義英雄の岳飛が奸臣の秦檜に謀殺される岳飛説話は、広く人口に膾炙していた。以上の諸事情に精通していた者が、宋江を忠義英雄に見立て、彼が功績を立てるも奸臣に殺されるという展開を思いついたのであろう。

かくして宋江の死については、宋代忠義英雄譚に則することによって印象的なものとして仕上げることができた。一方で宋江を妨害する奸臣は、前史の時点では全く接点をもっていなかった。したがって謀殺の場面を除く奸臣の暗躍については一から作り上げなければならなかったが、そのために費やせる時間はあまり多くなかった。第四節で見てきた不徹底な奸臣像は、この早急な形成から説明がつけられる。登場回数への偏りは、作品全体を忠義英雄と奸臣の対立

に組み替えようとしたものの、梁山泊集結以前の部分は通俗文芸での長きにわたる洗練を経たものが多くあり、あまり手を加えられなかったためと考えられる。また奸臣らしからぬ面は、調整が行き届かなかったためであろう。

これを踏まえて『水滸伝』を読み返すと、ほかにも奸臣に関する不十分な調整に起因すると思しき編集の痕跡が見えてくる。

その一つは、第百回の文章に見出せる。高俅ら四人の奸臣が宋江を毒殺するに至る場面は、次のような文で始まる。

且説宋朝元來自太宗傳太祖帝位之時、説了誓願、以致朝代奸佞不清。至今徽宗天子、至聖至明、不期致被奸臣當道、讒佞專權、屈害忠良、深可憫念。當此之時、却是蔡京・童貫・高俅・楊戩四個賊臣、變亂天下、壞國壞家壞民。

さて宋朝はもともと太宗から太祖へ帝位が譲られた時に誓願を立てたために、後々まで悪人がはびこった。今の徽宗陛下は極めて聖明なのだが、凶らずも奸臣に道を塞がれ、悪人に権力を握られ、忠良な者が迫害され、とても悲しんでおられた。この時は蔡京・童貫・高俅・楊戩の四人の賊臣が天下を乱し、国や人々を苦しめていた。

作品では第百回までに、高俅ら四人が梁山泊の好漢を迫害する様子を繰り返して描いてきている。すでに読者の脳裏には、四人の奸臣の人物像が深く刻み込まれているのである。それにも関わらず、あたかも四人の奸臣がここで初めて登場するかのような紹介文が出てくる。作品全体から見ると、この文章はやや不自然な感じが否めない。

この不自然さの原因は、次のように説明できるだろう。まずは宋代忠義英雄譚の基本構成に従って、奸臣が忠義の英雄宋江を謀殺するという物語が形成された。初めはその場面しか作られなかったため、第百回にこのような紹介文が書かれた。その後奸臣の印象を強めるために作品全体に奸臣を登場させるように変更を加えていったが、第百回のこの文は調整されずに残ってしまったのであろう。

もう一つは、『水滸伝』の第十三回までが他の部分より成立が遅れるという説¹⁵である。この説の根拠となるのが、出場詩の有無である。『水滸伝』では好漢の初登場時に、その人となりを描く詩が配されている。例えば、宋江の出場詩は以下のようにになっている。

眼如丹鳳、眉似臥蚕。滴溜溜兩耳垂珠、明皎皎雙睛點漆。唇方口正、髭鬚地閣輕盈。額闊頂平、皮肉天倉飽滿。坐定時渾如虎相、走動時有若狼形。年及三旬、有養濟萬人之度量。身軀六尺、懷掃除四海之心機。上應星魁、感乾

坤之秀氣。下臨凡世、聚山嶽之降靈。志氣軒昂、胸襟秀麗。刀筆敢欺蕭相國、聲名不讓孟嘗君。

目は丹鳳のようであり、眉は横たわる蚕のようである。つややかに両耳は垂れ下がり、きらきらと双眸は黒く輝く。唇は四角く口は真直ぐで、髭は顎の辺りに薄く生えている。額は広く頭は平らで、皮と肉はしっかり備わっている。静かに座っている時は虎のようであり、動き回っている時は狼のようである。歳は三十過ぎで、万人を救う度量がある。身長は六尺で、世の中を平定する志を抱いている。上は星魁に応じており、世界の秀逸な気を感じ取れる。下は俗世に降臨し、山々の霊を集められる。意気は軒昂、胸の内は秀麗。その文筆は名宰相蕭何をも圧倒するほどであり、その名声は孟嘗君にも劣らない。(第十八回)

容貌から描写を始め、度量の広さや能力の高さへと視点を移し、誰もが知る歴史上の人物も引き合いに出しながら、宋江という人物を解説している。読者にとっては、この後作品内で宋江を見ていくうえで、あらかじめその容貌や性格を大まかに想定することができるのである。

だが史進や楊志など第十三回までに登場する好漢は、その初登場時には出場詩が見られず、後に再登場した時(概ね第五十五回以後)に出てくる。出場詩はその人物についてよく分からない時点でこそ有意義なのであり、かなり間があくとはいえ再登場時に改めてその人となりを説明するのは不自然である。その証拠に、百二十回本など後発の版本では、これらの人物は初登場時に出場詩が配されるように改められている。

第十三回までに登場する好漢の出場詩が後に出る原因も、作品の宋代忠義英雄譚への変化から説明できるだろう。注目すべきなのは、第十三回までに高俅が林冲と楊志を迫害する場面が含まれていることである。すでに述べたように、これは梁山泊の好漢と奸臣の対立が作品全体を貫いていることを表すとともに、高俅が『水滸伝』で一番の悪役であることを印象づける効果も上げている¹⁶。つまり第十三回までは、『水滸伝』を宋代忠義英雄譚の基本構成である忠義英雄と奸臣の対立の物語にするための処置の一環として創られたと考えられる。ただし該当部分の創作者が出場詩については失念していたために、第十三回までに登場する人物には出場詩が移されなかったのであろう。

ここまで見てきたように、奸臣に関連するかたちで見られた『水滸伝』中のいくつかの不自然な点は、作品世界に奸臣を定着させる作業が不十分であることに由来している。ただし見方を変えてこの事実について考えてみると、宋江の死とそれをもたらす奸臣を何としてでも作中に組み込もうとする強い意図が見

えてくる。結果として不自然な点が残ったものの、現在に至るまで『水滸伝』が広く読み親しまれていることを鑑みると、魅力的な物語の型である宋代忠義英雄譚を導入した目的は十分に果たしたと言えるだろう。

終わりに

本章では、『水滸伝』に描かれた宋江の非業の死を手掛かりにして、まずは宋江の死と四人の奸臣の変遷を追いかけた。そして宋江の死が、梁山泊故事群に宋代忠義英雄譚が導入された際に創られたこと、一方でその要素の一つである奸臣に関しては宋江の死を演出するために組み込まれた作品内で十分に調整されなかったことが判明した。

最後に、宋江の死が忠義英雄の悲劇として『水滸伝』に描かれた後の影響について簡単に述べたい。

『水滸伝』が流通する前には、宋江は南宋初期にも登場するという認識が広まっていた。それは「宋江が北宋末期に死ぬ」という情報がなかったからである。しかし現存する『水滸伝』諸版本に親しんでいる者の目から見れば、宋江が南宋初期に登場することによりかなり違和感を覚えるであろう。

『水滸伝』に描かれた宋江の死は、梁山泊故事群に宋代忠義英雄譚を導入した際に作られたものであり、時期的に見るとかなり遅れて表れたものである。しかしその死の場面は、それまで曖昧であった宋江の死に対する認識を一変させてしまった。

この事実は、宋江の死の場面が魅力的な物語の型である宋代忠義英雄譚に沿っていたため、さらに言えば古今東西の英雄悲劇の普遍性を備えていたために、短期間で浸透することができたと考えられるだろう。

本章では、宋江の死と四人の奸臣から、宋代忠義英雄譚化による『水滸伝』の成立の二つの側面を追及した。しかしこの現象を引き起こした原因の究明はまだ解決されずに残っている。なぜ『水滸伝』の作者は梁山泊故事群に宋代忠義英雄譚を導入するという、物語世界の転換に踏み出したのだろうか。この問題の解決は、今後の課題としたい。

¹ 『水滸伝』本文に付された「李卓吾評」では、『忠義水滸伝序』とは逆に宋江を貶す発言が目立つ。だがこれは葉昼なる人物が李卓吾に偽託してつけた批評と考えられる。佐藤鍊太郎「李卓吾評『忠義水滸伝』について」(『東方学』第七十一輯、一九八六)参照。

- 2 正確に言うと、首を吊って死んだのは宋江ではなく、その後を追った呉用と花榮である。李卓吾の記憶違いなのか、もしくは宋江が首を縊るという内容の版本が別に存在したのかは定かではない。
- 3 史実から『水滸伝』に至るまでの梁山泊の構成員の変遷については、高島俊男『水滸伝の世界』（大修館書店、一九八七）一六二～一八七頁参照。
- 4 ごく少数ではあるが、楊志や関勝など実在の人物に基づいたと思われる者もいる。余嘉錫『宋江三十六人考実』（作家出版社、一九五五）に詳しい。
- 5 史実の宋江については、宮崎市定「宋江は二人いたか」（『東方学』第三十四輯、一九六七）、高島俊男「宋江実録」（『東洋文化研究所紀要』第二百二十二冊、一九九三）、中鉢雅量『中国小説史研究：水滸伝を中心として』（汲古書院、一九九六）二〇九～二一一頁で詳しく論じられている。また拙論『『水滸伝』征遼故事の成立背景——「宋代忠義英雄譚」を核とする作品形成』（『日本中国学会報』第六十二集、二〇一〇）でも以上の諸氏の論考を踏まえて検討した。
- 6 テキストは毛晋『六十種曲』（文学古籍刊行社、一九五五）を用いた。
- 7 「契丹」という語は一般に遼を指すが、『香囊記』では一貫して金を指している。例えば、「契丹侵擾中原、兀朮下兵書刻期交戦。（契丹が中原を侵略し、兀朮は挑戦状を出し期日を決めて戦った。）」（第十四齣「點將」）、「俺岳爺爺真個是天下無敵、連日與契丹大戰。（我が岳飛様は本当に天下無敵で、連日契丹と大いに戦った。）」（第十七齣「拾囊」）など。
- 8 呉從先の「読水滸伝」に関しては、黄霖「一种值得注目的《水滸》古本」（『复旦学报（社会科学版）』一九八〇年第四期）、欧阳健「吴从先《读水滸传论》评析」（欧阳健・萧相恺『水滸新议』（重慶出版社、一九八三）二八八～三〇四頁）、侯会『《水滸》源流新证』（华文出版社、二〇〇二）七七～一二二頁、参照。
- 9 宋江はこのほか、無実の者に手を出さない、部下に対する方針、の二点の誓約を立てている。本論とは関係ないため省略した。
- 10 『蒙求』に「祖逖誓江」として収録されていることから窺えるように、広く人口に膾炙した故事である。
- 11 六賊の一人李彦は山東地方で過酷な収奪を行っており、これが山東で盗賊が跋扈する要因となったと見なすこともできる。宮崎市定『水滸伝』（中公文庫、一九九三）二一七～二二一頁参照。
- 12 『大宋宣和遺事』は『水滸伝』の雛形が見られる資料としてよく言及されるが、この徽宗の物語はそれとは別の箇所に見られる。
- 13 小松謙「梁山泊物語の成立について——『水滸伝』成立前史——」（『中国文学報』第七十九冊、二〇一〇）。
- 14 笠井直美『『水滸』における「対立」の構図』（『東洋文化研究所紀要』第二百二十二冊、一九九三）七四頁。
- 15 侯会『《水滸》源流新证』（华文出版社、二〇〇二）二七五～二八二頁参照。
- 16 高俅に関して付け加えると、その従兄弟高廉と宋江らとの対決の部分（第五十二～五十四回）も成立が比較的遅れる部分と考えられる。笠井直美注 14 前掲論文七七頁。

補：呉従先「読水滸伝」訳注

呉従先「読水滸伝」には、彼が読んだ『水滸伝』の感想が記されている。自身の著作『小窓自紀』の巻三に収められている。なお、目録では「読水滸伝論」と記されている。

呉従先は、字は寧野、号は小窓、延陵（現在の江蘇省成熟）の人である。生没年は不詳だが、明代の万暦年間を中心に活躍した文人である。個人の感慨を簡潔にまとめた小品文に巧みであり、「読水滸伝」が収められている『小窓自紀』のほか、『小窓清紀』・『小窓艶紀』・『小窓別紀』という文集を著した。『小窓自紀』は万暦甲寅（一六一四）に出版されている。

この「読水滸伝」が研究者の注目を集めたのは、そこに記されている『水滸伝』の内容が現存する諸版本と著しく異なっているからである。第二章では宋江が南宋初期に登場することで言及したが、その他にも、宋江が淮南の盗賊とされている、主たる奸臣が蔡京と童貫である、など多くの相違が指摘できる。

『水滸伝』成立研究にとって悩ましい問題は、小説成立以前の物語内容や構成を伝える資料が極めて少ないことである。『水滸伝』以前の物語を窺わせる資料の多くは演劇の脚本であり、しかもその大半を占める雑劇作品は『水滸伝』との継承関係があまり強くない^①。

呉従先「読水滸伝」は、一九七〇年代に王利器によって初めて紹介された。それ以来、不明な点の多い『水滸伝』成立事情の一端を窺わせる貴重な資料として研究されてきた。

しかしこれまでその全体を詳細に解説した論稿はない。現行本『水滸伝』との目立った相違点を取り上げて論じられるのみで、呉従先が全体として何を伝えようとしたのかは注目されてこなかった。

したがって、「読水滸伝」の全容を理解することは、『水滸伝』成立研究に大いに資するところがあるだろう。また文中には他の作品や事象についての言及もあり、他の文学研究や社会分析などに役立つかもしれない。

なお呉従先の知識には、現在から見ると史実と虚構を混同している点があることは否めない。例えば「陳寿史論」（『小窓自紀』巻三所収）では陳寿と『三国志』について論じているにも関わらず、「諸葛孔明が寿命を延ばそうとして

^① 曲家源「元代水滸杂剧非《水浒传》来源考辨」（『山西师大学报』一九八六年第二期）参照。

呪法を行った」という『三国志演義』に見られる虚構にも言及している。よってその記述を完全に信用するわけにはいかないものの、当時の一知識人の見解を知るには十分な資料であろう。

以上の理由から、「読水滸伝」全体の訳を試みた次第である。テキストは『四庫全書存目叢書』子部二五二冊所収の上海図書館蔵本^②の影印本を使用した。

呉従先の読んだ『水滸伝』は現存する諸版本の内容と著しく乖離しているほか、残念なことに現存しない。そのため文中には不明瞭な箇所が多く、よって誤訳も多いだろう。本訳注が今後の議論の契機となれば幸甚である。

② 目次には「明万曆刻本」と書かれているが、文中に「由」を「繇」に避諱によって改めている箇所があるため、天啓以降の刻本であろう。

【原文】（カッコ（）は、直前の字に対して文脈から類推して適する字を記した。山カッコ〔〕は、本来は1字だが、フォントがないため、このように表記した。）

『宋史』於南渡後、書曰、「淮南宋江平。」余竊怪、徽宗之朝、蔡京柄國、是非倒置、賢奸不剖、藉司馬光以下三百九人為奸黨、請徽宗書而刻之、又頒示天下、俾各立石、以詔後世。昏迷已極、人心不平。故御榻則狐狸升焉、大水則京師灌焉、長鬚則婦人覆焉、胎孕則男子懷焉。天降大災、民不更命、而京略無顧忌、乘其釁者、咸有師名。故高托山自河北起、張仙自山東起、方臘起於睦州、宋江起于淮南。潢池弄兵、天地分裂、兀術擣大梁之墟、而臨安改為小朝廷矣。何繇（由）而得平宋江也。及讀稗史『水滸傳』、其詞軋札不雅、怪詭不經、獨其叙宋江以罪亡之軀、能當推戴、而諸人以窮竄之合、能聽約束。不覺撫卷嘆曰、「天下有道、其氣伸于朝。天下無道、其氣磔於野。信哉。」

夫江一亭長耳。性善飲、朋從與遊、江能盡醉之、且悉其懽。又馴謹而其中了然、呐厚而其諾〔石堅〕然。撫孤濟癘、人人得呼公明、人人咸願為公明用也。又每臨風月、對山林、觸景咨嗟、稍露不平之感、亦人人竊伺之矣。

夫何以賄敗、刺配江州、道經淮、而梁山嘯集徒衆、有雞鳴狗盜之風焉。及聞江來、衆譁迎入壁、推為主寨。江固辭脫。未幾、舊遊有陰德之者、輦其妻孥合焉。而江遂絕意。江且南嚮讓者、三誓衆曰、「宋室流離、金人相阨、苟能我用、當聽其指揮、立大功名。此特寄命之鄉、非久長計也。」衆曰、「謹受教。」「無苛賔旅、奪人妾（妻）女、無妄殺不辜。」衆曰、「謹受教。」「有親者終養之、有家者探視之、居者相聚如家人、來者各若其器使。」衆曰、「謹受教。」而寨中之氣勃然立于旗幟間矣。四方從者、日加多焉。

會童貫與京密、以希功進、故受師討之。方逞雄淮上、度江不敢出。及頃、聞箔（泊）中有炮聲、而炮抵貫壁、連擊如雷、士駭馬逸、棄甲曳兵、上下不相顧、未嘗交一鋒窺一壘、而氣奪矣。貫走詢鄉導、有識者曰、「此雷橫之子母炮也。」江遂匿不動。謀所以要貫者、遣使達其款、冀朝廷寬一死、以希報効、而貫則先期遁已。江以師銳不果用、乃檄諸聚落之不服順者、過皆擒之、不下百〔艸淩〕。朝廷聞益畏、無復有征進之思。

而江常若無棲之鳥、于是擇燕青・戴宗・林冲・張順等、投戈易服、潛攬（覽）西湖、竊嘆曰、「誓清中原、長江擊楫、水驚波撼、將軍用命。而今固秀鬱葱蒨、山空水濼、宋德不長、湖為妖矣。」比放上元燈、延及滿城、煙火照曜、笙歌沸天。戴宗以偽花帽、直達寢室、宮中讖洛無防限。宗睹屏間書「淮南賊宋江・河北賊高托山・山東賊張仙・嚴州賊方臘。」宗抽小刀、削去一行。宮中聚噪、大索城市、而江等始脫歸、出入宮禁、持共主若戲、然卒無異志。吁、江寧賊也哉。

歸則整徒衆、扣河北而河北平、擊山東而山東定、方臘竄跡富春、江儀圖之、宋摯其尾。因而大擾西湖、朝廷震動。江嘗失一張順耳、不得已而招之降。江遂甘心焉。及江請取方臘以贄、而方臘授馘。功高不封、竟盡斃之藥酒中。嗚呼、宋之君臣亦忍矣哉。

當時童貫以辱故脩怨、蔡京以友故疾仇、同朝以黨故不關其說、徒使後人、甘心於叛、溺而不返耳。方江之踞淮南也、約束諸叛、糾集群豪、廣納亡命、若陰為宋收拾不軌之人。然其隨地奮武、若李逵之虎、時遷之甲、武松之嫂、智深之禪、戴宗之走、張順之沒、又明示宋以無不可用之人、江之用心不負夫宋、而宋之屠戮慘加於江。同朝之中、咸謂賊不可共處、則子胥以盜蹠入郢、仲謀以甘寧破楚、雲長以周倉拒魏、太宗以敬德致太平、朝有賊而不見、敵有賊而不羞。徒斤斤于自致之命以淫其毒也。假使善遇之、俾當一面、未必無宗澤東京之捷・翟進西京之捷・徐徽言晉寧之捷・岳飛廣德朱仙鎮之捷・韓世忠江中之捷・張榮興化之捷・吳玠仙人關之捷・楊沂中藕塘之捷。合戰拒虜、取其死力、而乃置之瓦石下哉。宋之所以益衰也。死之後、惑高球（倭）天剛（罌）地煞之說、碑以紀名、祭以乞哀、徒貽笑于天下後世也。

雖然、江可死已、江也而與司馬光等三百九人俱以碑傳、則不朽之骨非蔡京・童貫所能望見者、何必身處小朝廷間而後活哉。他日書『綱目』者曰、「宋江平。」則江之非賊明矣。江何幸而又得此也。可以死已。

【訳】

『宋史』では南渡した後に、「淮南の宋江が平定された」と書かれている。だが私はひそかに次のように怪しんでいる。徽宗の時代、蔡京が国を専横したせいで、是非が逆転し、賢人と姦人が分けられず、司馬光ほか三〇九人を貶めて奸党とし、徽宗にその名を書いていただいて石碑に刻み、天下に公示し、石碑を立てさせ、後世に知らしめた。混迷は甚だ極まり、人心は不平に満ちた。よって御寝台に狐狸が上り¹、大水が都に溢れ²、長い髭が女性に生え、胎児は男性が孕むことになったのである³。天は大災害を降し、民衆は生活に困窮した。だが蔡京は少しも憚らなかつたため、その混乱に乗じた者たちは、みなそのことを蜂起する名分とした。よって高托山は河北から蜂起し、張仙は山東から蜂起し⁴、方臘は睦州で蜂起し、宋江は淮南で蜂起した。反乱が続発して、天地は分裂し、兀朮は大梁の墟⁵（汴京）を攻撃し、臨安が小朝廷と改まった。（このような状況で）どうして宋江を平定できようか。

稗史の『水滸伝』を読んだところ、その表現は煩わしく卑俗で、奇怪で出鱈目だが、ただその叙述内容だけは、宋江が罪を犯し逃亡している身でありながら、頭領として推戴を受け、他の者たちは進退窮まって隠れている人々の集ま

りでありながら、その取り決めに従うさまを描いている。思わず本を撫でて嘆いた。「天下に道があれば、その気は朝廷に広がるが、道がなければ、その気は民間に散じる。まことにそうである。」

そもそも宋江は一亭長でしかない⁶。酒を飲むのが好きで、友人や部下と一緒に遊ぶと、宋江は彼らをみな酒に酔わせ、なおかつその楽しみを満喫する。また恭しくてその心中は明瞭であり、実直であって彼の承諾は石のように堅固であった。独り者に厚く恵むため、人々は進んで「公明」と呼び、みな「公明」に用いられることを望んだ。また風月に臨み、山林に対するといつも、その景色に触発されて感嘆し、不平や不満をやや漏らすのが、人々はこっそりこれを見るだけであった（見て見ぬふりをした）。

そもそも何と賄賂が露見して罪を問われ、江州に刺配され、淮の地を通った。梁山泊では人々が徒党を組み、鶏鳴狗盗の輩がいた。宋江が来ると聞くと、皆が騒ぎ立てて陣営に迎え入れ、頭領に推した。宋江は固辞して逃げようとした。するとまもなく、以前に宋江に助けられた友人が、宋江の妻子を連れてきた。宋江はそこで断る気持ちを諦めた。ひとまず譲った者たちと南面すると、三点人々に誓いを立てた。「宋の王室は流浪し、金人が立ちほだかっている。もしお前たちが私に用いられるならば、私の指揮を聞き入れて、大きな功名を立てなければならぬ。ここは一時的に身を寄せる場所でしかなく、久しく留まるべきではない。」人々「かしこまりました。」「旅人をゆすったり、女子供を攫ったりしてはならない。無実の者をむやみに殺してはならない。」人々「かしこまりました。」「親のいる者は郷里に帰って孝行し、家族がいる者は見舞いに行け。ここにいる者は家族のように集まり、外から来た者はその才能に応じて使い分ける。」人々「かしこまりました。」山寨の気は勃然と旗の間に沸き立った。四方の従う者は、日に日に多くなった。

この時童貫は蔡京と密約し、功績で昇進しようと望んだため、軍隊を引き連れて宋江を討伐した。淮南で武勇をひけらかし、宋江は出てこないと考えた。しばらくして、梁山泊で大砲の音が響くと、童貫の陣営に当たり、雷のように連続して撃たれ、兵士は恐れ戦き馬は勝手に逃げ、鎧を棄て武器を引きずって、上も下も分からなくなり、一戦交えて敵陣を窺うことなく、戦意が崩壊した。童貫は逃げながら道案内役に尋ねると、知っている者が、「これは雷横の子母砲だ」と言った。宋江はそのまま潜んで動かなかった。童貫を迎えうつ方法を謀ったのは、使者を遣わして童貫とよしみを通じ、朝廷に死を許してもらって、その恩に報いようとしたためである。だが童貫は先に逃げてしまった。宋江は精鋭部隊は用いずに、諸集落のうち服従しない者たちに檄を飛ばし、童貫が通

り過ぎれば捕まえるように言ったところ、従った者は百を下らなかった。朝廷はそれを聞いてますます恐れ、征伐しようとする考えはなくなった。

一方宋江は常に宿なし鳥のようであった。そこで燕青・戴宗・林冲・張順らを選び、武器を置き服を変えて、こっそり西湖を見ると、密かに嘆いて言った。「東晋の祖逖は中原を平定することを誓い、揚子江で櫂を叩いたから⁷、水は震え波は立ち、將軍たちは命を尽したのだ。しかし今や緑が鬱蒼と生い茂り、山は人気がなく水は渦巻いている。宋朝の徳がふるわないのは、美しい西湖に惑わされたからだ。」上元灯が城中に溢れる頃合い、花火が輝き、笙や歌が天にまで響いていた。戴宗は偽の花帽をかぶり、寝室まで直接行ったが、宮中は宴会のにぎわいで無防備であった。戴宗は屏風に「淮南の賊宋江・河北の賊高托山・山東の賊張仙・嚴州⁸の賊方臘」と書かれてあるのを見た。戴宗は小刀を取り出すと、一行を削りとった。宮中は人が集まって騒ぎになり、都中で大捜索が行われたが、宋江らは脱出して帰り始めていた。宮中に入り出て、演戯のように皇帝を推戴したが、最後まで反逆の意思はなかった。ああ、どうして宋江は盗賊であろうか。

帰還すると手下たちに準備させ、河北を攻撃して河北を平定し、山東を攻撃して山東を平定した。方臘は富春に隠れ、宋江はこれを攻略しようと図り⁹、宋朝はその宋江の背後を攻撃した。よって西湖は大いに乱れ、朝廷は震動した。宋江はただ張順一人を失うだけであった。朝廷はやむを得ず彼を招安して投降させた。宋江はそのまま受け入れた。そして宋江は方臘を討伐することで帰参の手土産とし、方臘は降伏した。功績は大きかったが封じられず、結局は皆が毒酒に倒れた。ああ、宋の君臣はなんとも残忍である。

当時童貫は屈辱のために怨みを晴らし、蔡京は友人のために敵を憎み、同じ朝廷内の者は党を組んでいたためにその説に関わらなかった。ただ後人に反乱に心を許させ、そこに居座らせてしまった。宋江は淮南に依拠するに当たり、諸所の反乱軍を結集させ、多くの豪傑を集め、亡命者を広く受け入れており、あたかも宋朝のために陰で不法の人を収めたようであった。しかしどこでも武勇を奮うさま、例えば李逵の虎退治・時遷の鎧窃盗・武松の兄嫁殺し・魯智深の禅・戴宗の神行法・張順の潜水などは、宋朝には才能のある者が多くいたことを明示している。宋江は心を込めて宋朝に背かなかつたが、宋朝は殺戮の手を容赦なく宋江に加えた。同じ朝廷の中で、皆が賊とは共生できないという。だが伍子胥は盗蹠を用いて郢に入り¹⁰、孫権は甘寧を用いて楚の黄祖を破り¹¹、関羽は周倉を用いて魏に抵抗し¹²、唐の太宗は尉遲敬徳を用いて天下を平定した¹³。彼らは朝廷に賊がいてもそれとは見なさず、敵に賊がいても侮辱しなかつたのである。ただ自分が伝えた命令に思い入れさせることで賊という毒を利

用しただけである。もし宋江を厚遇し、一面に当てさせたならば、宗沢の東京での戦勝¹⁴・翟進の西京での戦勝¹⁵、徐徽言の晋寧での戦勝¹⁶、岳飛の廣徳や朱仙鎮での戦勝¹⁷、韓世忠の江中での戦勝¹⁸、張榮の興化での戦勝、吳玠の仙人關での戦勝¹⁹、楊沂中の耦塘での戦勝²⁰は必ず起こったであろう。合戦して敵に対抗し、死力を引き出したが、なんとそれを瓦石の下に置いてしまった。宋朝がますます衰えた原因である。死後、高俅の天罡・地煞の説に惑い、碑を作って名を刻み、祭ってその許しを請うたため、ただ後世に笑いの種を残した。

そうではあるが、宋江は死ぬべきだった。宋江も司馬光ら三百九人と同様に石碑で伝えられたならば、その不朽の人格は蔡京や童貫の眺められたものではなかった。どうして身を小朝廷に置いた後まで生きる必要があったのか。後日『綱目』を書いた者は「宋江が平定された」と書いた。つまり宋江が賊でないことは明白である。宋江はどのように幸運にもこれを得ることができたのか。死ぬべきであった。

-
- 1 『宋史』卷二十二に、「（宣和七年九月）有狐升御榻而坐。（狐が御寝台に上って座った。）」とある。
 - 2 『宋史』卷二十二に、「（宣和元年五月）是月、大水犯都城、西北有赤氣亙天。（この月、大水が都に氾濫し、西北では赤い気が天を覆った。）」とある。
 - 3 『宋史』卷六十二に、「宣和六年、都城有賣青果男子、孕而生子、蓐母不能收、易七人、始免而逃去。豊樂樓酒保朱氏子之妻、可四十餘、楚州人、忽生髭、長僅六七寸、疏秀而美、宛然一男子、特詔度爲女道士。（宣和六年、都の青果を売る男子が、子を妊娠して出産したが、産婆は取り上げることができず、七人交替して、ようやく生まれてきたが逃げ出してしまった。豊樂樓の酒保朱氏子の妻は、四十才ほどの楚州の人だが、突然髭が生え、長さは六七寸になり、殊に美しく、一男子のようであったので、特別に度牒を賜って女道士となった。）」とある。
 - 4 『三朝北盟会編』卷三十一に「宣和六年、黼罷之後、燕山日夕告乏、而山東河北盜賊起、少者不下數千人、若張仙高托山輩、皆連兵數十萬餘、科配亦不行矣。（宣和六年、王黼が罷免された後、燕山では日常的に物資が不足し、山東と河北で盜賊が蜂起した。少ない集団でも数千人は下らず、張仙や高托山のような者は、数十万も統率したため、臨時徵税も実行されなかった。）」とある。
 - 5 『史記』卷四十四に「吾適故大梁之墟。（私はもとの大梁の墟へ向かった。）」とある。
 - 6 「亭長」以下の文は、欧阳健「吳从先《读水浒传论》评析」（欧阳健・萧相恺『水浒新议』（重慶出版社、一九八三）二九二頁が指摘するように、劉邦を彷彿とさせる。
 - 7 東晋の武將祖逖の故事。『晋書』卷六十二に、「仍將本流徙部曲百餘家渡江、中流擊楫而誓曰、「祖逖不能清中原而復濟者、有如大江。」辭色壯烈、眾皆慨歎。（祖逖はそのまま百余りの私兵部隊に長江を渡らせると、長江の中程で櫂を叩いて、「祖逖は中原を取り戻せずに再び渡ったならば、この長

江のようになるであろう。」と誓いを立てた。その語気は壮烈であり、皆が感嘆した。) 」とある。この故事は『蒙求』にも「祖逖誓江」として収められている。

- 8 嚴州は、方臘討伐後に睦州から改名された地名である。嚴密にはおかしい。なお前の文では「方臘起於睦州」と正しく書かれている。
- 9 『詩経』「大雅・烝民」に「我儀圖之、維仲山甫舉之、愛莫助之。(私がよく考えるに、この仲山甫は徳により国を治め、人は彼を愛しているが助けることはできない。)」とある。
- 10 盜蹠は春秋時代の盜賊。『元刊雜劇三十種』所収「楚昭王疏者下船」第二折に「柳盜跖為先鋒、孫武子為師首。(柳盜跖を先鋒とし、孫武子を大将とする。)」とある。
- 11 甘寧は三国時代の呉の將軍。もと水賊であった。孫權は甘寧の協力を得て、父孫堅の仇である黄祖を倒した。
- 12 周倉は、『三国志演義』など通俗的な三国志物語に登場する架空の人物。もと黄巾賊であったが、関羽に仕え、生死を共にした。
- 13 尉遲敬徳は隋唐に登場する武将。もとは太宗と敵対する劉武周の將軍であった。
- 14 宗沢は東京留守として、金の將軍兀朮の侵攻を度々防いだ。
- 15 『宋史』卷二十五に「(建炎二年) 庚子、河南統制官翟進復西京。(建炎二年(一一二八) 庚子、河南統制官の翟進が西京を回復した。)」とある。
- 16 徐徽言は知晉寧軍・嵐石路沿邊安撫使として、晋寧を死守した。『宋史』卷四百四十七に伝あり。
- 17 『宋史』卷三百六十五に「兀朮趨杭州、飛要擊至廣德境中、六戰皆捷、擒其將王權、俘簽軍首領四十餘。(兀朮は杭州に逃れ、岳飛は邀撃して廣德の境に到り、六回戦って全て勝ち、その將軍の王權を捕え、敵兵の首四十余りを報告した。))」、「飛進軍朱仙鎮、距汴京四十五里、與兀朮對壘而陣、遣驍將以背嵬騎五百奮擊、大破之、兀朮遁還汴京。(岳飛は軍を朱仙鎮に進め、汴京から四十五里離れたところで、兀朮の陣に対するかたちで陣を敷き、將軍に五百の騎兵を率いさせて山の裏から要撃して、兀朮を大いに破り、兀朮は汴京へ逃げ帰った。))」とある。
- 18 『宋史』卷二十六に「韓世忠及兀朮再戰江中、金人乘風縱火、世忠敗績。(韓世忠は兀朮と再び長江において戦った際、金人が風に乗じて火を放ったため、韓世忠は大敗した。))」とある。
- 19 『宋史』卷二十七に「吳玠率楊政・吳玠・田晟・王喜諸將與兀朮戰于仙人關、大敗之。(吳玠は楊政・吳玠・田晟・王喜ら諸將を率いて兀朮と仙人關で戦い、これを大いに破った。))」とある。
- 20 『宋史』卷二十八に「劉猷犯定遠縣、沂中進戰、大敗之于藕塘。猷挺身遁。(劉猷が定遠県に侵出したので、楊沂中は軍を進めて戦い、藕塘でこれを大いに破った。劉猷は一人で逃げていった。))」とある。

第三章：張叔夜から見る『水滸伝』宋江の忠義化

はじめに

『水滸伝』の淵源である北宋末期の史実において、宋江の活動は張叔夜によって終止符を打たれた。

宣和三年……二月……庚辰、宋江犯淮陽軍、又犯京東河北路、入楚州界。知州張叔夜招撫之、江出降。

宣和三年（一一二一）……二月……庚辰、宋江は淮陽軍を荒らし、更に京東路や河北路を荒らして、楚州の境界に侵入した。知州の張叔夜が彼らを帰順させ、宋江は投降した。（『皇宋十朝綱要』卷十八）

宋江は、朝廷からの度重なる追捕の手を逃れて山東一帯で略奪を繰り返したことで名を轟かせた盗賊であった¹。この悪名高い宋江を取り締まったのが張叔夜である。よって張叔夜は史実の宋江を論じるうえで不可欠な人物と言えよう。

ところが歴史的事実から派生した文学作品『水滸伝』になると、両者の扱いは雲泥の差を呈する。宋江は梁山泊の好漢を従える頭領であり、物語の中心人物となっている。一方張叔夜は、史実と同様に朝廷の役人として登場するが、ただの一端役になっている。登場回数が少ないのみならず、宋江の動向に全く影響を及ぼさない。仮に張叔夜の登場場面を飛ばして読んでも、物語を鑑賞するうえで何ら支障をきたさない。

したがって従来の『水滸伝』研究では、張叔夜は史実における宋江との接点から言及されるに留まり、内容構成や成立過程など作品分析の方面で注目されることはなかった。物語内での位置づけが軽微である以上、追究したところで意義ある成果は期待できない。また端役となってしまったのも、宋江に関する物語が史実で彼を鎮圧した張叔夜を必要としない方向へ発展していった結果、と容易に推測できてしまう。

しかし『水滸伝』を生み出す母胎となった通俗文芸の世界において、張叔夜は決して軽視されていたわけではない。『水滸伝』関連作品を見渡してみると、その多くで張叔夜は宋江の運命を決定する重要人物として登場する。つまり史実および文学作品における張叔夜の人物像を比較してみると、『水滸伝』だけが例外となっている実情が浮かび上がってくる。

それでは、なぜ張叔夜は『水滸伝』でのみ端役と成り下がってしまったのであろうか。その要因を追究していくと、『水滸伝』で宋江が忠義の人物として描かれるようになった背景、すなわち作品成立に関わる重大な問題にも繋がってくる。

本章では張叔夜の人物像に焦点を当てることによって、『水滸伝』において宋江が忠義となった要因を考察する。史実から『水滸伝』出版以後にわたる張叔夜の人物像の変遷を追いかけ、その分析結果を比較検討することで、宋江の忠義化という『水滸伝』成立の一背景について論じてみたい。

第一節、忠義系『水滸伝』の張叔夜：端役

最初に『水滸伝』における張叔夜について見ていく。その前に『水滸伝』の定義を確認しておきたい。

序論で述べたように、『水滸伝』は文繁本と文簡本の二系統に大別され、文繁本は更に内容の分量によって百回本・百二十回本・七十回本に細分される。本章では諸版本を、宋江が朝廷に帰順して活躍する話の有無によって二種類に大別する。宋江の朝廷下での忠義が見られる文繁本百回本・百二十回本および文簡本（以下、議論の便宜上「忠義系『水滸伝』」と称す）と、後に金聖嘆がその部分を削除して出版した文繁本七十回本とに分ける。本節では忠義系『水滸伝』で描かれる張叔夜について論じていく。張叔夜が登場する部分は、各版本間で文字に多少の異同があるものの、話の筋に大差はない。よって百回本を代表として用いる。なお七十回本は事情が大きく異なるため、第四節で別に論じる。

張叔夜が忠義系『水滸伝』で登場する場面はかなり限られている。第七十五回から第八十二回まで、すなわち宋江が朝廷からの討伐軍を撃退して実力を示し、誠意ある招安を受け入れて朝廷に帰順するまでの過程で登場するに留まる。しかも登場回数が物語全体の一割にも満たないだけでなく、張叔夜は宋江の動向に一切関与していない。以下、物語内での張叔夜の言動を詳しく追っていく。

第七十五回、朝廷は太尉陳宗善を招安の使者として梁山泊に遣わす。だが宋江らを毛嫌いしている蔡京と高俅は、朝廷の威厳を顕示するためにそれぞれ腹心の張幹辦と李虞候を同行させた。濟州太守の張叔夜は、職務として陳太尉一行を歓待する。その席上にて、

張叔夜道「論某愚意、招安一事最好。只是一件、太尉到那里、須是陪些和氣、用甜言美語撫卹他衆人。好共歹只要成全大事、太尉留箇清名於萬古。他

數内有幾個性如烈火的漢子、倘或一言半語衝撞了他、便壞了大事。」張幹辦、李虞候道「放着我兩箇跟着太尉、定不致差遲。太守你只管教小心和氣、須壞了朝廷綱紀。小輩人常壓着不得一半、若放他頭起、便做模樣。」張叔夜道「這兩箇是甚麼人。」陳太尉道「這一箇人是蔡太師府内幹辦、這一箇是高太尉府虞候²。」張叔夜道「只好教這兩位幹辦不去罷。」陳太尉道「他是蔡府、高府心腹人。不帶他去、必然疑心。」張叔夜道「下官這話、只是要好、恐怕勞而無功。」張幹辦道「放着我兩箇、萬丈水無涓滴漏。」張叔夜再不敢言語。

張叔夜「愚見を申し上げますと、招安ということはまことに宜しいことです。ただ一つだけ、太尉どのはあそこへ行かれましたら、和やかに接して、優しい言葉で彼らをなだめますように。ともかく大事を成し遂げられれば、太尉どのは長らく清き名を残せるでしょう。彼らの中には烈火のごとき性格の者もいますので、もし一言でも気に障るようなことをおっしゃれば、大事を台無しにしてしまいます。」張幹辦と李虞候「我ら二人が太尉どのについていれば、失敗などあり得ません。太守どのはひたすら気をつけて和やかにと仰せだが、それでは朝廷の綱紀を乱してしまう。くだらぬ奴らは常に抑えきれぬもので、もし凶に乗らせれば、つけあがってしまう。」張叔夜「このお二人はどなたですか。」陳太尉「こちらは蔡太師さまのお屋敷の幹辦どので、こちらは高太尉さまのお屋敷の虞候どのです。」張叔夜「このお二方は行かせない方がよいでしょう。」陳太尉「二人は蔡家・高家の腹心の方です。連れて行かなければ、きっと疑われるでしょう。」張叔夜「私の今の進言は、事がうまくいくようにと思つてのことです。骨折り損のくたびれ儲けとならないか心配です。」張幹辦「我ら二人に任せておけば、万に一つの失敗もありません。」張叔夜はそれ以上進言しなかった。（『水滸伝』第七十五回）

張叔夜は陳宗善に梁山泊では相手に敬意を払うように提言するが、張幹辦と李虞候に弱腰だと非難されてしまう。そして二人の素性を知ると、それ以上の進言は差し控えてしまった。物語はこの後、張幹辦と李虞候が梁山泊で横柄に振舞い、また招安の内容も極めて強圧的なものであったため、好漢たちが激怒してしまい、招安は失敗という結果に終わる。張叔夜の憂慮がほぼ的中したと言えよう。

同様のことは、直後の第七十六回、梁山泊討伐軍を率いる枢密童貫の到着時にも起きている。張叔夜は童貫に対して慎重に戦うように忠告する。

樞相在上、此寇潜伏水泊、雖然是山林狂寇、中間多有智謀勇烈之士。樞相勿以怒氣自激、引軍長驅。必用良謀、可成功績。

樞密さまに申し上げます、かの沼沢に潜む賊は、凶悪な盗賊とはいえ、中には智謀や武勇に優れた者も多くおります。樞密さまは怒りに任せて軍を相手の懐深くに進めませんように。十分に良策を用いれば、功績をあげられるでしょう。（同第七十六回）

だがこの忠告も童貫に一喝されてしまう。

都似你這等畏懼懦弱匹夫、猥刀避劍、貪生怕死、悞了國家大事、以致養成賊勢。吾今到此、有何懼哉。

お前のような臆病な腰抜けどもが、劍を交えることを恐れ、命を惜しむから、国家の大事を誤らせ、賊どもを凶に乗らせたのだ。私が来たからには、何も恐れることはない。（同上）

すると張叔夜は口を閉ざしてしまった。その後梁山泊軍と開戦した童貫は、怒りに任せて深入りした挙句に大敗してしまう。事態はやはり張叔夜が懸念したとおりに進展した。

作中で次に張叔夜の言動が描かれるのは第八十二回、太尉宿元景が朝廷から招安の使者として梁山泊に派遣された時である。張叔夜はあらかじめ梁山泊に赴いてその到来を伝える。今回の招安は朝廷側が誠意を見せたものであったため、宋江は喜んで張叔夜をもてなした。

當時留請張太守茶飯、張叔夜道「非是下官拒意、惟恐太尉見恠回遲。」宋江道「畧奉一盃、非敢爲禮。」托出一盤金銀相送。張太守見了、便道「叔夜更不敢受。」宋江道「些少微物、何故推卻。未足以爲報謝、聊表寸心。若事畢之後、則當重酌。」張叔夜道「深感義士厚意、且留於大寨、却來請領、未爲晚矣。」太守可謂廉以律己者也。

そこで宋江は張太守を留めて一席勧めたが、張叔夜「拒むわけではありませんが、遅れますと宿太尉に咎められますので。」宋江「ほんの一杯差し上げるだけで、大げさなことをするつもりはありません。」そう言いながら、盆に盛った金銀を贈ろうとした。張太守はそれを見て「それはなおさら受け取れません。」宋江「わずかばかりのものです、なぜお断りなさるのですか。これだけでは感謝の思いを表しきれませんが、ほんの気持ちです。もし事がうまく運びましたら、改めてお礼をいたします。」張叔夜「義士どのご厚意には感謝しますが、ひとまず山寨にお預けして、後ほど受領に伺って

も遅くはないでしょう。」太守はまことに清廉潔白を貫き通す人物と言えよう。（同第八十二回）

この時張叔夜は宋江から金銀を差し出されるが、丁重に断っている。相手を尊重しながらも、清廉潔白を貫く人柄が見て取れよう。

以上が忠義系『水滸伝』における張叔夜の主な言動である。招安や梁山泊討伐戦といった特筆される事件の合間に顔を出すのみであり、その言動も物語の本筋には影響を及ぼしていない。張幹辦と李虞侯および童貫への進言は適確であったが、結局相手には受け入れられなかった³。相手の権勢に配慮したためか、主張も強く押し通さない。また宋江との会見も、勅使たる宿元景の露払い役に留まる。いずれの場面でも張叔夜は、物語の展開に少し変化を加えているにすぎない。

忠義系『水滸伝』での張叔夜は、状況を見極められる人格者とは言えるが、決して物語上の重要な人物ではない。仮に張叔夜が登場しなかったとしても、『水滸伝』の本筋は大過なく成り立つ。

第二節、史実の張叔夜：知勇兼備の忠臣

『水滸伝』は北宋末期の史実に由来するものの、基本的には虚構の物語である。魯智深や武松など魅力的な登場人物の多くは架空の存在にすぎない。だが張叔夜は歴史上実在した人物である。

史実の張叔夜に関しては、『水滸伝』との関係から、宋江を鎮圧した功績がとりわけ注目されている。だが張叔夜はそれ以外にも北宋末期において相当の功績を残した人物であり、彼に関する記述は歴史書や筆記などから容易に見出すことができる。ここでは後世への影響力を考慮して、記述の正確性に問題はあるものの、正史である『宋史』から張叔夜の人物像を探っていく⁴。

張叔夜は『宋史』卷三百五十三に伝が載せられている。名が叔夜で、字が稽仲である。確証はないが、おそらく名と字は竹林七賢の嵇康（字が叔夜）に因んで付けられたと考えられる。なお字は、資料によっては「稽仲」となっている。これは「嵇」が固有名詞（姓及び山名）にしか用いられない特殊な字であるため、字型が似ており、かつより一般的な「稽」の字が当てられたのであろう⁵。

張叔夜は名家の生まれである。その系譜は、北宋三代皇帝真宗の時代に活躍した張耆（『宋史』卷二百九十に伝あり）に遡れる。張叔夜は張耆の曾孫にあたる⁶。張耆以下張一族は多くが官僚として活躍しており、張叔夜も恩蔭の制によって官途に就いた。

張叔夜の特徴としてまず挙げられるのは、伝の始めに「少喜言兵（若い頃から兵法を語るのが好きであった）」と記されているように、兵法に深く通じていることである。これは『水滸伝』との関係で必ず言及される、盗賊宋江を制圧した経緯から見て取れよう。なお当時の張叔夜は、知海州（海州は現在の江蘇省北部）という一地方長官であった。

宋江起河朔、轉略十郡、官軍莫敢嬰其鋒。聲言將至、叔夜使間者覘所向。賊徑趨海瀕、劫鉅舟十餘、載擄獲。於是募死士得千人、設伏近城、而出輕兵距海、誘之戰。先匿壯卒海旁、伺兵合、舉火焚其舟。賊聞之、皆無鬪志。伏兵乘之、擒其副賊、江乃降。

宋江が河朔で蜂起し、十郡を略奪してまわり、官軍はその勢いに太刀打ちできなかった。宋江が来襲するという情報が届くと、張叔夜は間者にその行き先を探らせた。盗賊は海岸へ向かい、船十数艘を奪って、略奪品を載せていた。そこで張叔夜は決死の兵士を募ったところ千人いたので、城の近くに伏せさせ、別に軽装備の兵を出して海に向かわせ、賊を誘き出して戦った。これより先に勇敢な兵卒を海岸に伏せさせ、誘導部隊が戦い始めた頃合いを見計らって、賊の船を焼き払った。賊はその事情を聞き知ると、みな戦意を失くしてしまった。伏兵がその機会に乗じて攻撃し、賊の副将を捕まえたので、宋江は降伏した。（『宋史』卷三百五十三）

多くの官軍が手を焼いていた宋江に対して、張叔夜は正面から力づくで押さえ込んだわけではない。宋江率いる盗賊団の情報を丹念に収集したうえで、陽動作戦を用いてその矛先をうまく逸らした。一方で同時に相手の略奪物を燃やすこと、すなわち彼らの生命線を断つことによって、その戦意を喪失させた。つまり張叔夜は戦術面でも心理面でも宋江より有利に立つように作戦を練り、結果として宋江の制圧に成功したのである。

このように状況を見極めて適切な戦略を立てる才能は、宋江制圧時のみではなく、張叔夜の生涯の随所で発揮されている。例えば、最初の官職である蘭州録事参軍に就いた時点で、すでにその優れた戦略眼を状況改善のために役立てている。蘭州は国境に近いので、外敵である羌人の侵攻に悩まされていた。

州本漢金城郡、地最極邊、恃河爲固、每歲河冰合、必嚴兵以備、士不釋甲者累月。叔夜曰、「此非計也。不求要地守之、而使敵迫河、則吾既殆矣。」有地曰天都者、介五路間。羌人入寇、必先至彼點集、然後議所向、每一至則五路皆竦。叔夜按其形勢、畫攻取之策、訖得之、建爲西安州、自是蘭無羌患。

蘭州はもともと漢の金城郡で、極めて辺境にあり、河を防衛線にする守りの固い土地であるが、毎年河が凍結すると、防備を嚴重にしなければならぬため、兵士は甲冑を何ヶ月も外せなかった。張叔夜は「これでは駄目だ。要所を抑えて守らずに、敵に河へ迫られれば、我々は終わってしまう」と考えた。天都という土地があり、五路の間に介している。羌人は侵攻する際に、必ずまず天都に集結し、その後で侵攻先を図るため、一度来襲されると五路はどこも苦しくなっていた。叔夜はその地勢を検討し、攻め取る策をたてると、天都を手に入れ、西安州を建てた。それ以降蘭州は安定した。（同上）

蘭州は冬季の防衛に問題を抱えていた。平時は河が自然の障害となるが、冬になるとその河が凍結して障害として機能しなくなるため、防備の兵士は過度の負担を強いられた。そこで張叔夜が取ったのは、単に蘭州のみの防衛増強策ではなく、より大局的な視点に立ち、天都という戦略上の要所を抑える策であった。結果として、張叔夜の智謀により蘭州には平穏がもたらされた。

張叔夜の才能は頭脳だけに限らない。武芸にも通じており、特に弓の腕に関しては次のような逸話が記されている。

使遼、宴射、首中的。遼人歎詫、求觀所引弓、以無故事、拒不與。

遼に使者として赴いた際、宴席で射礼を行ったところ、最初に的に当たった。遼人は驚嘆し、その引いた弓を見せてほしいと求めたが、先例がないとして拒否した。（同上）

外交の宴席上での儀礼的な行為とはいえ、張叔夜の弓の実力は、遊牧民で弓の扱いに習熟していた遼人をも感嘆させるほどであった。なおこの弓の技量は、後に張叔夜の特技として認識されるようになる。

以上のような軍事面での優れた才能を、張叔夜は何よりも宋朝のために用いた。その強い忠誠心は、靖康の変の際に鮮明に表れている。南道都總管となっていた張叔夜は、すでに還暦を過ぎていたにも関わらず、二人の息子を引き連れて首都汴京へ救援に赴いた。汴京では力の限り金軍に抵抗し、自ら剣を振って敵将を斬るなど奮闘したが、結局汴京は陥落してしまう。

金人議立異姓、叔夜謂孫傅曰「今日之事、有死而已。」移書二帥、請立太子以從民望。二帥怒、追赴軍中、至則抗請如初、遂從以北。道中不食粟、唯時飲湯。既次白溝、馭者曰「過界河矣。」叔夜乃矍然起、仰天大呼、遂不復語。明日卒。年六十三。訃聞、贈開府儀同三司、謚曰忠文。

金人が異姓の者を皇帝に立てようと議論すると、張叔夜は孫傳に「今やこうなっては死ぬよりほかない。」と言い、金の二人の司令官に書簡を出して、趙姓の皇太子を立てて民衆の要望に従うよう願い出た。二人の司令官は怒り、軍中にやって来たが、それでもひるまずに願い出たため、北方へ連行される徽宗・欽宗に従うことになった。道中では食べ物は口にせず、時々白湯を飲むだけだった。白溝河に至ると、御者が「国境の河を渡ります。」と言った。叔夜は突然立ち上がり、天を仰いで大声で叫ぶと、それ以上何も言わなくなった。翌日亡くなった。六十三才であった。訃報が届くと、開府儀同三司と「忠文」の諡を賜った。（同上）

汴京陥落後も張叔夜は宋朝の存続を強く主張した。それが認められないと、北方に拉致される徽宗と欽宗に同行しつつ、絶食することで抗議の姿勢を貫いた。だが国境の河を越える際に感情が高ぶると、そのまま亡くなってしまった。

張叔夜は、兵法に通じ武勇も備え、なおかつ宋朝に忠誠を尽くしたことから、知勇兼備の忠臣であったと言えよう。その生き様は、「忠文」という諡号に端的に表れている。

第三節、『水滸伝』前史の張叔夜：元帥

北宋末期における宋江の活躍は、明代中期に『水滸伝』として集大成するまで、講談や戯曲など通俗文芸のかたちで人々に親しまれていった。ただしこの『水滸伝』前史というべき段階での物語は梁山泊とその周辺における豪傑たちの活動に焦点が当てられているため、朝廷と関わる話、すなわち梁山泊に集結した宋江らのその後の経緯についてはほとんど物語化されなかった。張叔夜はその数少ない宋江の後日談にしか登場しないものの、重要な役割を果たしている。

宋江の後日談を扱った資料の一つが、『水滸伝』の物語の雛形が見出せる資料として注目されてきた『大宋宣和遺事』である。この中で張叔夜は、宋江に関する話の末尾に登場する。

朝廷不奈何、只得出榜招諭宋江等。有那元帥姓張名叔夜的、是世代將門之子。前來招誘宋江和那三十六人歸順宋朝、各受武功大夫誥敕、分注諸路巡檢使去也。因此三路之寇、悉得平定。後遣宋江収方臘有功、封節度使。

朝廷は為す術がなく、ただ高札を出して宋江らを招安するほかなかった。元帥の張叔夜という者がおり、代々武將を輩出する家の出身であった。先に宋江と三十六人を説得して宋朝に帰順させ、それぞれ武功大夫の詔勅を受け

させ、各地方の巡検使として派遣した。これにより三路の盗賊は、すべて平定された。後に宋江を遣わせて方臘を捕まえるのに功績があったので、節度使に封じられた⁸。（『新刊宣和遺事』⁹前集）

強大な勢力を構える宋江に対して朝廷は全く対処できなかったが、元帥の張叔夜は宋江を招安し、さらに官職に就けて他の盗賊を討伐させることに成功した。張叔夜が宋江による騒動を收拾したという点では史実と同じだが、違いも二点指摘できる。一つは事態收拾の経緯が武力鎮圧から話し合いによる帰順に変わったことであり、もう一つは官職が知海州より高位な元帥になったことである。どちらの変化も要因は共通している。宋江が物語の中心であり、かつその勢力が強大であるために、朝廷側の対応も主役の宋江を持ち上げる方向で改められたのであろう。

宋江を配下に迎えて方臘討伐に向かわせる統率者としての役割は、明初の皇族朱有燾が創作した雑劇『黒旋風仗義疎財』¹⁰においてより明確に表現されている。その第四・五折に『大宋宣和遺事』の上記引用文に基づいて創られた場面が見られる。

張叔夜は劇中で初めて登場した際、宋江について次のように述べている。

吾乃大宋元帥張叔夜。……官裏差我來這東平府、招安宋江家這火強盜。然此三十六人、好生勇猛、多能拳棒。今張掛榜文、肯來自首、與他官做、免了他罪。封他都做巡檢、差他前去擒捉方臘。

私は大宋元帥の張叔夜である。……朝廷が私をこの東平府に派遣したのは、宋江という強盗を招安するためだ。だがこの三十六人は、ひどく勇猛で、諸々の武芸に秀でていて。今高札を掲げ、潔く自首してきたら、官職に就けてやって、罪を不問にしてやろう。そして全員を巡検使にして、方臘を捕まえるのに向かわせよう。（『黒旋風仗義疎財』第四折¹¹）

元帥張叔夜は宋江らを、盗賊でありながらも優秀な人材として認識している。この後、張叔夜は宋江らの投降を受け入れて部下として収め、自らの方臘討伐に同行させる。そして宋江らは張叔夜の期待に応じて方臘を捕まえ、張叔夜自身も元帥としての責務を見事に果たすことになった。

『水滸伝』前史で張叔夜が登場するのは、後日談程度の位置づけの物語に限られる。ただしその中でも張叔夜は、史実とは若干異なりながらも、盗賊であった宋江を朝廷のためにはたらかせる仲介者として活躍している。

第四節、七十回本以後の張叔夜：討伐の最高責任者

張叔夜は、史実と『水滸伝』前史の両方で、宋江の動向に深く関わる重要人物として現れていた。だが忠義系『水滸伝』が世の中に出回った後になると、これとはやや異なる張叔夜が作品中に現れるようになる。主に忠義系『水滸伝』の内容に批判的な人々によって、張叔夜は宋江の敵対者として象徴的に取り上げられるようになった。その新たな張叔夜像の嚆矢となったのが、金聖嘆が創作した七十回本『水滸伝』¹²である。

金聖嘆はそれまで世間に出回っていた通行本すなわち忠義系『水滸伝』で宋江が朝廷に帰順して活躍することに不満を抱き、特に宋江が忠義の人物として描かれていることに強く反発した。そこで宋江らが梁山泊に集結した時点で物語を打ち切り、なおかつ宋江を悪人として描き改めた七十回本を出版した。

この出版の経緯から分かるように、七十回本では忠義系『水滸伝』で張叔夜が登場する場面は全て削除されており、張叔夜本人が現れることはない。しかし七十回本でも張叔夜は、間接的ながらも肝要な役割を果たしている。

その役割は、金聖嘆が結末として創作した盧俊義の悪夢に描かれている。梁山泊に一〇八人の好漢が集結した後、盧俊義は宋江ら他の義兄弟全員が処刑される夢を見る。つまり彼らの前途に待ち構える不吉な未来が暗示されて、七十回本は物語を終えるのである。注目すべきは、悪夢の中で宋江らの処刑を司った人物である。

是夜盧俊義歸臥帳中、便得一夢¹³、夢見一人。其身甚長、手挽寶弓、自稱「我是嵇康（影張叔夜字、妙）。要與大宋皇帝、收捕賊人、故單身到此。汝等及早各各自縛、免得費我手脚。」

その晩盧俊義は寢室に戻ると、眠って夢を見、そこである人と会った。その人は身長が極めて高く、手で宝弓を引いて、「私は嵇康である（「張叔夜」の字を隠してある、素晴らしい）。大宋皇帝のために賊どもを捕まえようと思い、單身ここにやって来た。お前たちはすぐに自分を縛り上げろ、私の手を煩わせるな。」と言った。（『第五才子書施耐庵水滸伝』¹⁴第七十回、引用文中のカッコは小字双行評）

盧俊義が夢の中で出会った人物、すなわち宋江らを処刑する者は「嵇康」と名乗る。しかしその実質は、双行評が示すように、張叔夜にほかならない。手ごかりは本文中に示されている。まず身長の高さ「長」と、手で引いている「弓」は、「張」の文字を分解したものである。また嵇康は、第二節で記したように、字が「叔夜」である。よって盧俊義の悪夢が示す不吉な未来とは、張叔夜によって宋江が制圧された史実なのである¹⁵。

金聖嘆はこの悪夢の意図を読者が理解できるように、あらかじめ作品中で史実の張叔夜の功績に言及している。序文で『宋史』の記述を取り上げて張叔夜が宋江を制圧した事実を詳しく論じるほか、第七十回の回前総評でも読者に注意を促している。

忽然幻出盧俊義一夢、意蓋引張叔夜收討之一案、以爲卒篇也。

突然盧俊義の夢が不思議なかたちで表れるのは、作者施耐庵が張叔夜による宋江討伐を引くことによって物語の結末としたのであろう。（同上）

つまり金聖嘆は宋江らを否定するための一方策として、史実の張叔夜を持ち出したのである。なお悪夢の中で嵇康が手にしていた弓は、「張」の偏であると同時に、張叔夜の弓の実力を示す史実の記述を反映したのものである。また嵇康は実際に身長が高かったことで知られている¹⁶。このように突き詰めていくと、盧俊義の悪夢は金聖嘆がかなり綿密に計算したうえで創作した場面と言えよう。

金聖嘆が創り出した張叔夜像は、その後の作品では宋江への敵対姿勢を強化する方向で継承されていく。その一例が、清代初期の介石逸叟の戯曲『存廬新編宣和譜』（以下『宣和譜』と略す）に見える。本戯曲は『水滸伝』では脇役として登場した王進・欒廷玉・扈成を主役に据えた物語である。この三人は梁山泊討伐を指揮する朝廷の役人の下に身を寄せ、将軍として奮闘した結果、討伐に成功し宋江を降伏させるに至る。彼らが仕えた人物、すなわち梁山泊討伐の責任者が張叔夜である。

張叔夜は初登場時に、次のように心壊を表明する。

下官張叔夜、字稽仲、信州永豊人也。由恩蔭起家、遷知海州軍事。目下淮西河北江南、一切盜賊、在在竊發。下官既承王命、縱未經仗劍登壇、寧敢效賦詩退敵。只今走馬上任。聞得梁山賊衆、正爾猖狂。可歎朝廷無人、每輕言招撫。下官蒞任方始、須索練兵選將、爲戰勝殄滅之計。

私は張叔夜、字は稽仲、信州永豊の人である。恩蔭の制によって官職に就き、今は知海州軍事になった。現在のところ淮西・河北・江南では盜賊どもがあちこちで略奪をはたっている。私は王命を拝受し、たとえ韓信のように劍を取って登壇して将軍職を拝命したことはないにしても、詩を吟じて敵を退けるような文名に頼るだけの真似はするまい。ともかく今は急いで任務につくとしよう。聞くところによると梁山泊の賊どもは、まことにやりたい放題。嘆かわしいことに朝廷に優秀な人材がおらず、いつも軽々しく招撫せよと口にしてている。私はこの職に就いたばかりだから、兵を訓練して将軍

を選出し、戦いに勝って相手を殄滅する策を練るとしよう。（『宣和譜』¹⁸第十五齣「忠略」）

ここで張叔夜は、宋江を退治すべき悪党と見なしている。ゆえに招安という平和的解決を最初から念頭に置いておらず、武力で鎮圧する以外に方法はないと考えている。実際に張叔夜は、王進ら優秀な部下の力を借りることによって宋江討伐を成し遂げた。

このような強硬な張叔夜像は、咸豊三年（一八五三）に出版された『蕩寇志』（別名『結水滸全伝』）では更に先鋭化して現れる。本作は、作者の俞晚春が金聖嘆の主張をより明確に表現するため、七十回本の続編という体裁で著したものである。宋江ら一〇八人は善良な心を欠片も持たない極悪人として描かれており、主人公の陳希真・陳麗卿の父娘ら三十六人は朝廷の大將軍の指揮に従って梁山泊を徹底的に壊滅し、宋江らを一人残らず死に追いやる。

『蕩寇志』での張叔夜は『宣和譜』と同様に、主人公陳希真らを従える朝廷の大將軍として登場する。しかも極悪人宋江を断罪する立場ゆえに、圧倒的な神性を備えて現れる。その誕生時から並々ならぬ人物として描かれている。

父母生他時、曾夢見張道陵天師、送一粉團玉琢的嬰孩到家、吩咐道「此乃雷聲普化天尊座下大弟子神威蕩魔真君。吾於玉帝前哀求、請他下凡、爲吾耳孫。日後統領雷部上將、掃蕩世上妖魔、大昌吾宗。汝等不可輕視。」父母領諾。醒來、便生下叔夜、滿室異香、經日不散。長大來、八尺身材、貌若天神、博覽羣書、深通兵法、猿臂善射。

父母は張叔夜が生まれる時に、夢で張道陵天師から一人の玉のような赤子を授かり、「こちらは雷聲普化天尊さまの大弟子の神威蕩魔真君でございます。私が玉帝の前で懇願して、下凡を賜り、耳孫にさせていただきました。後に雷部上將を率いて、世の中の妖魔を掃討し、我が張一族を栄えさせるでしょう。ゆめゆめ軽々しく扱わぬように。」と言いつけられた。父母は承諾した。目が覚め、叔夜が生まれると、異香が部屋に満ち、数日たっても消えなかった。成長すると、身の丈は八尺になり、顔は天神のようで、広く書物を読み、深く兵法に通じ、弓が上手であった。（『蕩寇志』¹⁹第一百三回）

神の転生であると同時に道教の開祖張道陵の末裔でもある張叔夜は、作中では雷部神將の転生である陳希真らを従えて梁山泊を討伐するのみならず、江南の反乱勢力である方臘も討伐し、さらに高俅ら奸臣を朝廷から追放する。このような北宋末期の諸悪を駆除してしまうほどの超人的な活躍は、かなり荒唐無稽の感が否めない。

ただし史実から完全に乖離しているわけでもない。引用文の最後に見える兵法と弓に関する言及は、『宋史』張叔夜伝など史書の記述に基づいたと考えられる。また作中で張叔夜は、梁山泊の副将盧俊義を弓で射殺する活躍を見せる。これも作者が史書の記述から構想したのであろう。

忠義系『水滸伝』が出版された後、宋江を制圧したという史実における活躍から、張叔夜は金聖嘆など忠義系『水滸伝』否定派に持ち上げられた。その結果、彼らが創った作品の中では、悪人宋江を不倶戴天の敵と見なして成敗する責任者として描かれるに至った。

第五節、二人の忠義英雄：張叔夜と宋江

以上、張叔夜の人物像について追いかけてきた。ここで史実から『水滸伝』後に創られた関連作品まで、時間軸に沿って簡潔にまとめ直しておこう。

北宋末期の史実では、知勇兼備の忠臣として活躍した。宋江の鎮圧もその知略が発揮された成果であった。明代前期までの『水滸伝』前史では、注目度の低い後日談の中ではありながらも、有能な宋江を配下に収める元帥として登場した。明代中期に誕生した忠義系『水滸伝』では、本筋には全く関わらない端役となっている。明末以降に出版された七十回本以降では、極悪人宋江を征伐する最高責任者となった。下表は、この変遷を簡潔に図示したものである。

時期	北宋末期	南宋～明前期	明中期	明末以降
段階	史実	『水滸伝』 前史	忠義系 『水滸伝』	以降の 一部作品
張叔夜	知海州	元帥	濟州知府	討伐責任者
宋江への関与	撃破して 投降させる	説得して 帰順させる	なし	妥協せず 討伐する

このようにまとめると、時間軸上に並ぶ四点のうち三番目に表れる忠義系『水滸伝』のみ他とは性質が異なっている状況が浮かび上がってくる。張叔夜は、忠義系『水滸伝』では宋江の動向に全く影響を及ぼしていない。だがそれ以外では、味方として部下に収めるか、敵として討伐するか、方針は両極端に分かれるものの、総じて宋江の運命を決定していた。

張叔夜が宋江の運命に関わる重要人物であったという認識は、文学作品以外からも指摘することができる。例えば清代初期の王士禛は、民間で流行していたカードゲームの一種である葉子戯について次のように記している。

今鬪葉子戲有萬萬貫、千萬貫、百萬貫、花紅遞降等、采用叔夜榜文中語也。

葉子戲の遊戯では「万万貫」・「千万貫」・「百万貫」と賞金が徐々に下がっていくが、これは張叔夜の高札の中の言葉を使っているのである。

(『居易録』卷二十四)

葉子戲の各カードに記された「〇万貫」について、張叔夜が宋江らに懸けた賞金と捉えている。ただし「張叔夜の高札」なるものは、由来がよく分からない。これは余嘉錫が考証したように、おそらく後世の捏造であろう²⁰。もしかしたら第三節で引用した『黒旋風仗義疎材』中の張叔夜の発言から派生したものかもしれない。

張叔夜と宋江の関係が世間に広く認知されていた実情を踏まえると、忠義系『水滸伝』における張叔夜の扱いの特異性がより鮮明になる。またこの特異な扱いは北宋末期から清代までの諸々の記録や物語の中間に突如として現れており、自然に発生したとは到底考えられない。したがって、忠義系『水滸伝』の作者は世間に広まっている通念には従わずに張叔夜を端役に改めた、と考えるべきであろう。

それでは、なぜこのような突然変異が起きたのであろうか。ここまで見てきた張叔夜を取り巻く様々な人物関係を手掛かりにして考察していきたい。

まずは、張叔夜の人物像を確認しておこう。張叔夜の言動の中で最も目につくのは、宋江に対する態度が両極端に分かれていることである。『水滸伝』前史および忠義系『水滸伝』では、宋江を有能な人材と認めていた。だが史実と七十回本以後では、悪人と見なして一切妥協せずに討伐した。

しかし張叔夜の行動原理に注目すると、史実から『蕩寇志』に至るまで全く変わっていない。朝廷の役人として宋朝による秩序安定のために精力を傾けている。物語作品においては、有能な部下を従えて敵対勢力を討伐するかたちで表現されている。ただ部下に収める者と討伐する対象が、忠義系『水滸伝』の前後で異なっているにすぎない。以前では宋江を従えて方臘を討伐し、以後では王進や陳希真を従えて宋江を討伐した。

換言すれば、張叔夜の態度の変化は物語作者それぞれの宋江観を忠実に反映したものでしかない。つまり宋江を有能な人材として称えるか、それとも悪人として貶めるか、に由来している。一方でその張叔夜観、すなわち秩序の安定を目指す朝廷の役人という人物像は終始一貫している。

次に、物語作品における張叔夜とその部下との関係に注目しよう。朝廷の役人である張叔夜は、敵対勢力を討伐するに際し、多くの有能な人材を配下に収

め、彼らの能力を引き出す司令官として行動する。また『蕩寇志』のように戦場で弓を手に取って敵の副将を射殺することもある。このように部下や自らの武勇を駆使して朝廷のために忠義を尽くす姿勢は、「忠義英雄」と見なすことができる。

一方で能力を買われて部下となる者は、その大半が正道な人物とは言いがたい。『水滸伝』前史で部下となる宋江はまさしく盗賊である。『蕩寇志』における陳希真も、一時的ではあるが落草して盗賊に身をやつしていた。このような出自や経歴ゆえに、彼らは直接朝廷のためにはたらくことはできない。ただし張叔夜という朝廷側の人物に従うことによって、彼らもその才能を役立てることが可能となる。このような、有能だが往々にして正道から外れた末に朝廷側の人物の部下になる者を「豪傑」と呼ぶことにする。

以上のように定義すると、張叔夜が重要な人物として登場する作品からは、忠義英雄たる張叔夜が豪傑を従えるという、役割が明確に分担された上下関係が抽出できる。豪傑となる人物は作品によって異なるが、忠義英雄の役割に関わることではない。なおこのような忠義英雄と豪傑の上下関係は、中国の通俗的な英雄物語、特に宋代を舞台にした作品に頻出している。例えば、楊家將説話であれば楊六郎と孟良・焦贊との関係が、岳飛説話であれば岳飛と牛皋が該当する²¹。つまり張叔夜をめぐる人物関係は、宋代忠義英雄譚に則していると言えよう。

張叔夜が端役となっている忠義系『水滸伝』においては、当然のことながら忠義英雄たる張叔夜を核とする関係は存在しない。しかし忠義英雄と豪傑の上下関係ならば容易に見出せる。それは梁山泊における宋江と好漢たちとの関係である。宋江は朝廷への忠義をたびたび表明し、朝廷に帰順した後は好漢たちを率いて敵対勢力を討伐する。一方好漢たちはそれぞれ自分の能力を頭領宋江の下で発揮する。

このように考えていくと、忠義系『水滸伝』で張叔夜が端役に成り下がった理由はひとまず説明できる。忠義系『水滸伝』では宋江が忠義英雄として登場するために、役割の重複する張叔夜は取って代わられたのである。

ただしこれでは現象を説明したにすぎない。なぜ宋江が忠義系『水滸伝』では忠義英雄となったのか、という問題が残っている。史実の宋江は盗賊であり、『水滸伝』前史では忠義英雄たる張叔夜に仕える豪傑に属していた。つまり『水滸伝』以前の宋江は全く忠義英雄たりえない。

この問題を解く鍵となるのは、『水滸伝』前史における梁山泊内の人間関係であろう。梁山泊の構成員の間には、頭領である宋江とその手下たちとの上下関係が見出せる。両者の役割は明確に分かれており、特に『黒旋風仗義疎財』

など雑劇作品において顕著に表れている。宋江は冒頭に登場して状況を説明し、実際の物語はその手下たちが主役となって展開する。

ここで注意すべきなのは、この梁山泊内の上下関係が忠義英雄と豪傑のそれと酷似していることである。上位者が忠義であるか否かを除けば、両者の上下関係にほとんど差異は認められない。

したがってこの類似性を活用する発想、すなわち宋江と梁山泊の好漢の關係に忠義英雄と豪傑の關係を適用するという発想は、作者にとって比較的容易に思いついたのであろう。宋江に関する物語が宋代忠義英雄譚と同じく宋代を舞台にしていることも、なおさらこの発想を容易にしたであろう。

要するに、本来ならば豪傑でしかなかった宋江に忠義英雄の人物像が加えられたのは、当時の通俗文芸で広く浸透していた宋代忠義英雄譚に合うように施された矯正なのである。この宋江の忠義化の背景からは、『水滸伝』の成立が通俗文芸の流行の一端を強く反映していることが窺える。付言するならば、忠義系『水滸伝』における端役としての張叔夜は、その成立過程から弾き出された残滓と見なせるであろう。

終わりに

本稿では、忠義系『水滸伝』における存在感の希薄な張叔夜を出発点として、他の多くの作品では張叔夜が宋江の運命に関わる重要人物として登場することを追いかけて、さらにその人物像を手掛かりにして『水滸伝』で宋江が忠義として描かれるようになった背景を論じてきた。『水滸伝』の張叔夜は、宋江に関する物語を宋代忠義英雄譚に則して再構築する潮流に巻き込まれて、忠義英雄の役割を失ってしまったと言えよう。ただし張叔夜は『水滸伝』から完全に除外されたわけではない。第一節で見たように、状況を見極められる人格者として登場していた。これは忠義英雄たる張叔夜の人物像が人々の脳裏に強く刻み込まれていたことの名残であろう。

最後に、豪傑たる宋江が忠義英雄に仕えるという『水滸伝』前史に見られた関係が、その後も伏流として存在し続けたことに触れておきたい。

まず、忠義系『水滸伝』を注意深く探ると、宋江が豪傑として忠義英雄に従う痕跡が見つけられる。ただしそこで忠義英雄に相当するのは張叔夜ではなく、宿元景である。宿元景は徽宗の側近として登場し、宋江が朝廷に帰順する際の直接の媒介者となった²²。またその後宋江が遼や方臘を討伐する際も、宿元景の手を経ることで徽宗から命令が下されている。

宿元景の役割を考え合わせると、『水滸伝』における張叔夜は役割を二重に吸い取られたことになる。一人は忠義英雄となった宋江であり、もう一人は朝

廷の高官宿元景である。第一節で言及した、忠義系『水滸伝』第八十二回で張叔夜が勅使宿元景の先導役として宋江のもとへ赴く場面は、この忠義英雄に関わる変化を象徴的に表していると言えるだろう。

次に、宋江が豪傑として活躍する展開は時代がかなり下った二十世紀においても見出せる。それは張恨水が一九四三年に出版した『水滸新伝』に描かれている。本作は七十回本の続編という体裁を取り、梁山泊に集結した宋江らが朝廷の一員となって金の侵略に抵抗する物語である。ただし作中の金は、張恨水が自序でも言っているように、抗日戦争期という時代を反映して日本を暗示している。

『水滸新伝』において張叔夜は、宋朝に忠義を尽くす有能な將軍として登場する。一方宋江らは、張叔夜の器量に惚れて投降し、その部下としてはたらく。例えば宋江は張叔夜を次のように高く評価している。

久聞張知州是一位文武全才的英雄人物、有這種人招安我們、也正是我們一條好出路。

張知州のことは文武兩道の英雄だと久しく聞いている。もしそのような人が我々を招安してくれるなら、我々にとって良い活路ともなるだろう。

(『水滸新伝』第十二回)

張叔夜と宋江の関係は、まさしく忠義英雄と豪傑のそれにほかならない。

張恨水は『啼笑因縁』など通俗的な小説を多数著した小説家であり、また『水滸人物論贊』という評論書を書くほど『水滸伝』に精通していた。したがって『水滸新伝』は、抗日戦争という時代状況に触発されることによって、通俗文芸の一典型に沿うように張恨水が張叔夜と『水滸伝』の物語を再構築した作品と言えよう²³。

ここで一つ仮説を試みたい。もし宋江に関する物語が明代に忠義系『水滸伝』に発展しなかったならば、どのような作品が生まれたであろうか。おそらく『水滸新伝』のような、張叔夜が忠義英雄として、宋江らがその配下の豪傑として活躍する物語となったであろう。『水滸伝』前史における宋江に関する物語の性質と同時期の通俗文芸の動向から考えるに、これが最も妥当な推論となる。『水滸伝』前史の宋江は豪傑にすぎず、忠義英雄たりえない。一方で通俗文芸の世界では、楊家將説話や岳飛説話など忠義英雄と豪傑の物語すなわち宋代忠義英雄譚が典型の一つとして浸透していた。したがって想定される忠義英雄たる張叔夜と豪傑たる宋江の物語は、宋代忠義英雄譚に忠実な作品となったであろう。しかし同時に人々から楊家將説話や岳飛説話の模倣作品として認

知されるに留まり、『水滸伝』のように中国小説史上屈指の傑作と見なされることもなかったであろう。

この仮説から見えてくるのは、『水滸伝』の内容がその前史の段階のそれとは大きく断絶していること、かつ成立時に新しく組み込まれた要素によって後世にまで多大な影響を及ぼす作品に変貌したことである。したがって『水滸伝』は、宋江に関する物語群の単純な集大成ではなく、また北宋南宋交替期の歴史的な思想や背景を反映させた作品²⁴でもなく、当時の通俗文芸で浸透していた多くの物語の魅力的な要素の数々を巧妙に取り込んだ画期的な作品と見なすべきではないだろうか。このような『水滸伝』成立に関わる問題の解明は、今後の課題としたい。

¹ 史実の宋江に関しては、宮崎市定「宋江は二人いたか」（『東方学』第三十四輯、一九六七）、高島俊男「宋江実録」（『東洋文化研究所紀要』第二百二十二冊、一九九三）、中鉢雅量『中国小説史研究：水滸伝を中心として』（汲古書院、一九九六）二〇九～二一一頁参照。

² 原文は「高太尉府（空格）候」。前後の文脈から補った。

³ このような「上位の者に忠言したが聞き入れられず、結果として事態は忠告者の懸念どおりになる」という展開は、白話小説に頻出するパターンである。例えば『三国志演義』第七回、強風で中軍旗が折れたため不吉だと思った韓当が孫堅に軍を返すよう進言するが、聞き入れずに出陣した孫堅が戦死してしまう、など。

⁴ 『宋史』は元代末期になってようやく編纂されたものであり、しかも『皇宋十朝綱要』や『東都事略』などそれ以前に著された史書の記述を杜撰に編集したため、『四庫全書総目提要』ですでに指摘されているように、不正確な記述が多く見られる。

⁵ 王振星「“嵇康”与卢俊义的梦意象——金圣叹“梁山泊英雄惊恶梦”解读」（『水滸争鸣』第十一輯、二〇〇九）五三四頁が指摘するように、「嵇」は「稽」から派生した文字という説もある。『三国志』卷二十一に引く虞預『晋書』には、「康家本姓奚、會稽人。先自會稽遷于譙之銍縣、改爲嵇氏。取稽字之上、加山以爲姓、蓋以志其本也。（嵇康の家はもとの姓が奚であり、会稽の人であった。先祖が会稽から譙の銍県に遷った時に、嵇氏と改めた。「稽」字の上部を取り出し、「山」を加えて姓としたのは、その出身元を示すためだろう。）」と記されている。

⁶ 『宋史』では「張耆の孫」と記されているが、誤りである。張叔夜の家系については、孟宪玉「张叔夜籍贯、亲属考」（『中国报业』二〇一一年第十期）参照。

⁷ 原文は「大都」だが、『宋史』（中華書局、一九七七）一一一五五頁の校勘記に従って改めた。

⁸ 従来この最後の一文は「宋江が方臘討伐の功績で節度使に封じられた」と解釈されてきた。しかし「後遣」の主語は、「前来招誘」と同じく張叔夜である。また「宋江を遣わすことで方臘を捕まえるのに功績があった」のも張叔夜である。したがって節度使に封じられたのは張叔夜と解釈すべきであろう。節度使が宋代において名誉職ながら従二品という高位の官職であること

- (兪鹿年編著『中国官制大辞典』(黒竜江人民出版社、一九九二)一〇四〇頁)も踏まえると、やはり元帥たる張叔夜の方が相応しい。なお史実の張叔夜は、元帥にも節度使にも就いていない。
- ⁹ テキストは『士禮居叢書』本を影印した『古本小説集成』(上海古籍出版社)所収本を使用。
- ¹⁰ 『黒旋風仗義疎財』には内容が大きく異なる二種類のテキストがある。
『誠齋樂府』に収められる朱有燉原作本と、万暦年間に宮中での実演用脚本を抄写した脈望館鈔校内府本である。本稿で用いたのは前者で、正名は「張叔夜平蠻掛榜 黒旋風仗義疎財」、全五折・二人歌唱と、雑劇としては破格な構成になっている。後者は、前者の第四・五折を削除、正名も「黒旋風仗義疎財」とし、新たな第四折を創作して雑劇の基本形である全四折・主役独唱に改めたため、張叔夜は登場しない。二種類の『黒旋風仗義疎財』に関する詳細は、小松謙「内府本系諸本考」(『田中謙二博士頌壽記念中国古典戯曲論集』汲古書院、一九九一)一五四～一五五頁参照。
- ¹¹ テキストは『奢摩他室曲叢』(商務印書館、一九二八)所収本を使用。
- ¹² ただし金聖嘆は序文で、施耐庵の原著であると主張している。
- ¹³ 原本ではここに「晁蓋七人以夢始、宋江盧俊義一百八人以夢終、皆極大章法。」という小字双行評があるが、本論の論旨とは関係ないので省略。
- ¹⁴ テキストは貫華堂本を影印した『第五才子書施耐庵水滸伝』(中華書局、一九七五)を使用。
- ¹⁵ 七十回本の盧俊義の悪夢に関しては、王振星注5前掲論文参照。
- ¹⁶ 『世説新語』容止篇に、「嵇康身長七尺八寸、風姿特秀。(嵇康は身長が七尺八寸で、風貌がとりわけ秀でていた。)」とある。
- ¹⁷ 景德元年(一〇〇四)十一月、真宗が対遼戦に出陣した際に、將軍高瓊が文官馮拯に叱責されて、「君何不賦一詩詠退敵騎耶(おまえはなぜ詩を詠んで敵騎を退けないのか)」(『続資治通鑑長編』卷五十八)とやり返したことに基づく表現か。
- ¹⁸ テキストは上海図書館蔵清初刊本を影印した『古本戯曲叢刊五集』(上海古籍出版社、一九八六)所収本を使用。
- ¹⁹ テキストは咸豊三年刊本を影印した『古本小説集成』(上海古籍出版社)所収本を使用。
- ²⁰ 余嘉錫『宋江三十六人考実』(作家出版社、一九五五)七～八頁。
- ²¹ 「忠義英雄」の概念を拡大解釈すれば、包拯説話における包拯と侠客らとの関係も当てはめられるだろう。
- ²² 宿元景は『水滸伝』に道教的再生譚が導入された際に、その地上における責任者として組み込まれた人物である。佐竹靖彦『梁山泊』(中公新書、一九九二)一六九～一七四頁参照。
- ²³ 『水滸新伝』に関しては、高日暉・洪雁『水滸伝接受史』(齊魯書社、二〇〇六)二七四～二七九頁参照。また作中での張叔夜に関しては、魏永生「国家危亡 現大忠大义本色——张恨水《水滸新传》张叔夜形象重读」(『学术交流』二〇〇九年第一期)参照。
- ²⁴ 例えば王利器「《水滸》与忠义军」(『耐雪堂集』(中国社会科学出版社、一九八六)所収)のように、金統治領内で金に抵抗する民間武装組織に対して南宋側が任命した「忠義軍」に『水滸伝』の源流を見出す説、など。

第二部

清代における『水滸伝』受容 ——宋代忠義英雄譚としての浸透

第四章：清代における『水滸伝』七十回本と征四寇故事について

はじめに

明代中期に長編白話小説として集大成した『水滸伝』は、その後も現在に至るまで多くの人々に読まれ続けている。だがそれは単なる娯楽作品としてのみ享受されたわけではない。その内容ゆえに統治者側からは盗賊や反乱を誘発する有害書の最たるものとして度々発禁処分の対象とされたことからもうかがえるように、『水滸伝』が明清二代の社会に及ぼした影響は計り知れない。このように人口に膾炙していた『水滸伝』であるが、一口に『水滸伝』といっても現在の我々は多様な形態の版本を見ることができる。序論で述べたように、明代中期に小説として世に初めて現れた後も物語全体の構成や文章表現などに幾度となく改変が加えられ、文繁本系統の百回本・百二十回本・七十回本や文簡本系統の百四回本・百十五回本などといった様々な『水滸伝』が出版されたのである。

しかし現在のところ、このような活発な出版事情は明代中期から末期までの約百年間に限って起きた現象と考えられている。なぜならば、鄭振鐸が一九二九年に「水滸伝的演化」で述べた、

不料在明末清初之時、却有了一位金人瑞氏、以他的無礙的辨才、強造了一部七十回本的水滸傳出來。更不料他這一部『腰斬』的水滸傳、卻打倒了、煙沒了一切流行於明代的繁本、簡本、一百回本、一百二十回本、余氏本、郭氏本……使世間不知有水滸傳全書者幾三百年。水滸傳與金聖嘆批評的七十回本、幾乎結成一個名辭。除金本外、幾乎沒有所謂其他水滸傳。

なんと明末清初に金聖嘆という人物が現れ、その自由な才能で七十回本の『水滸伝』を創作した。さらになんと彼が「腰斬」したこの『水滸伝』は、明代に流行していた一切の文繁本、文簡本、百回本、百二十回本、余象斗本、郭武定本などを淘汰して葬り去ってしまい、世の中から『水滸伝全書』（文繁本系統の百二十回本を指す：引用者注）なるものが存在することを三百年ほどの間隠してしまった。『水滸伝』と金聖嘆が批評を加えた七十回本は、ほぼ同一の言葉となっていた。七十回本以外には、いわゆる『水滸伝』と呼ぶものはほとんど存在しなかった。

という見解に代表される通説が存在するからにはほかならない。これに従えば、金聖嘆（一六〇八？～一六六一）が明末の崇禎十四年（一六四一）に出版した七十回本がその登場と同時に他の版本を淘汰してしまい、清一代を通じて『水滸伝』の唯一の通行本の地位を確立したということになる。換言するならば、明代の人々が現在の我々と同様に多種多様な『水滸伝』に接することができたのと比べると、清代の人々の環境は非常に限定されたものであったということになる。そしてこの鄭振鐸の言説は、金聖嘆が七十回本創作に際して施した処置「腰斬」という語とともに、その後の『水滸伝』研究に定着することとなった¹。

ところがこの通説が根拠としているのは実際のところ、「自由な才能」をもつ金聖嘆によって創作された七十回本が他の版本よりも文学的に優れている、といった版本に対する見解のみである。そこには客観的な証拠は一つも提示されていない。したがって、客観的な検証のないまま清一代三百年もの長い間七十回本のみが『水滸伝』であったと断定してよいのだろうか。

本章では、『水滸伝』七十回本と「征四寇故事」の二点に焦点を当てながら、清代における『水滸伝』受容事情について再検討を加え、その概要を明らかにしたい。

第一節、『水滸伝』七十回本と征四寇故事

本題に入る前に、「征四寇故事」の定義を明確にし、それに対する明人の捉え方を確認しておく。

序論で述べたように、『水滸伝』の版本は文繁本と文簡本の二系統に大別でき、文繁本は更に百回本・百二十回本・七十回本の三種に分けられる。「征四寇故事」とは、宋江ら一〇八人が梁山泊に集結した後に朝廷に帰順して各地の抵抗勢力を討伐する物語を指す。諸版本のうち百回本・百二十回本および文簡本に見られるが、七十回本には見られない。なお百回本では討伐対象は遼と方臘の二勢力であるが、議論の便宜上一括して「征四寇故事」と定義する。

征四寇故事に対する評価としては、すでに明代の時点で賛成と反対の両方の意見が出されている。この両者の代表となるのが、李卓吾と金聖嘆である。

李卓吾（一五二七～一六〇二）は、白話小説は卑しいものという当時の常識に正面から反対し、『水滸伝』や『西廂記』などを高く評価した。彼の『水滸伝』に対する評価は、百回本の一つである容與堂本に附され、かつ自らの著書『焚書』巻三にも収められた「忠義水滸伝序」で述べられている。

施羅二公、身在元、心在宋。雖生元日、實憤宋事。是故憤二帝之北狩、則

稱大破遼以洩其憤。憤南渡之苟安、則稱滅方臘以洩其憤。敢問洩憤者誰乎。則前日嘯聚水滸之強人也。欲不謂之忠義不可也。

施耐庵と羅貫中のお二方は、その身体は元にあったが、心は宋にあった。元に生まれながら宋のことに憤っていた。したがって徽宗と欽宗が北方に拉致されたことに憤り、遼を大いに破ることでその憤懣を晴らしたのである。朝廷が南方で一時的な平安を貪っていたことに憤り、方臘を滅ぼすことでその憤懣を晴らしたのである。このような憤懣を晴らしたのはいったい誰であろうか。それはかつて水滸に集っていた強人なのである。だから彼らを忠義と言わないわけにはいかない。

李卓吾は遼と方臘が討伐されたことに対して、作者が心の中に抱えていた強い憤懣を解消したものとして肯定的に捉えている。ただしその評価は、作者の心の問題の解消だけに留まっただけではない。続けて李卓吾は、遼と方臘を破ったのが「水滸に集った強人」すなわち元来は朝廷による秩序を乱す盗賊集団であり、一見すると忠義とは結びつき難い宋江らである点に注意を促している。上の引用部分の後に、

有国者不可以不讀。一讀此傳、則忠義不在水滸、而皆在于君側矣。

国政に関わる者は『水滸伝』を読まないわけにはいきません。一度この本を読めば、忠義は水滸ではなく君側に立ち返るのです。

と続けているのは、盗賊集団出身の宋江らですら朝廷のために忠義を尽くすことができるという極端な例としての征四寇故事は、朝廷に対して忠義を尽くすことを一般の読者に強く勧める手本になる、という見解を示していることになる²。したがって李卓吾にとって征四寇故事とは、宋江らが忠義であることを証明する物語であり、当然のことながら『水滸伝』に必要不可欠な構成要素であったと言えよう。

一方で征四寇故事に対して李卓吾とは全く異なる見解を示したのが、既存の『水滸伝』に反発して七十回本を創作した金聖嘆である。彼の主張は七十回本に附した自序のうち「序二」³に記されている。

施耐庵傳宋江、而題其書曰水滸、惡之至、逆之至、不與同中国也。而後世不知何等好亂之徒、乃謬加以忠義之目。……是則將為戒者、而反將為勸耶。

施耐庵が宋江のことを書き表し、その本の題名を『水滸』としたのは、それを甚だ憎み、甚だ退け、同じ中国では共存できないことを表明したかったからである。ところが後世の何者とも知れぬ騒動好きな輩が、妄りに忠義を加えてしまった。……これでは盗賊を戒めるための本が、逆に盗賊を推奨す

る本になってしまうではないか。

金聖嘆以前の時点では、『水滸伝』の作者については李卓吾のように、施耐庵と羅貫中の二人が全体の制作に関わっていると考えられていた。これに対して金聖嘆は、梁山泊集結までの部分は施耐庵の作、それ以降の征四寇故事は「後世の何者とも知れぬ物好きな輩」すなわち羅貫中の続作、というように厳然と区別したのである。そのうえでこの両者について、施耐庵は「甚だ憎み、甚だ退け、同じ中国では共存できない」ものを描くことによって世の中の盗賊行為を戒めるという目的のもとに梁山泊集結までの部分を『水滸伝』として著したのだが、羅貫中はその意図を全く理解せずに忠義の物語として征四寇故事を付け加えたために『水滸伝』が盗賊を推奨する物語に変化してしまった、と主張した。つまり金聖嘆は、元は盗賊集団であった宋江らが朝廷に帰順して活躍するという征四寇故事が『水滸伝』に見られると、無知な人々による安易な模倣を招き、かえって盗賊行為を推奨することになってしまうと述べているのである⁴。

金聖嘆が七十回本を創作するに当たり、宋江らは単なる盗賊集団であって忠義ではない、という立場から描いていることは確かである。その態度は、例えば宋江が「忠義」と口にする場面では必ず「権詐」や「奸詐」などの否定的な評語を加えていることから窺える。しかし『水滸伝』の梁山泊集結までの部分は施耐庵が盗賊行為を戒める目的のもとに著したという主張は、現在のところ、自分の所持する施耐庵の古本を復刻することで彼の意図を再現すると表明したうえで自らの七十回本を「第五才子書」（歴史上五人目の才子施耐庵の本）と冠して出版するという販売戦略と同様に、金聖嘆による捏造にすぎないと考えられている⁵。よって金聖嘆の主張の全てを鵜呑みにするわけにはいかない。だが七十回本を創作するに際して既存の『水滸伝』には見られた征四寇故事を全て切り捨てたことから分かるように、少なくとも金聖嘆にとって征四寇故事は単なる蛇足にすぎなかったとは言えるだろう。

以上で見てきたように、李卓吾と金聖嘆で『水滸伝』における征四寇故事の位置付けは全く正反対であった。李卓吾から見ると必要不可欠な構成要素であったが、金聖嘆の考えでは単なる蛇足となった。しかし両者とも征四寇故事は『水滸伝』を評価するうえでの重要な判断材料の一つとなっていた。

第二節、雍正年間まで：明代からの継続

それでは清代の『水滸伝』受容事情について論じていくことにしよう。しかし清代は三百年にもわたって続いた時代であり、『水滸伝』に関して多くの変化

が起きている。そこで議論の便宜上、雍正年間まで、乾隆年間、嘉慶年間以降の三期に分けてそれぞれ論じることにする。本節では、清朝成立から雍正年間までの期間の状況を考察していくことにしたい。

まずはこの時期に刊行された『水滸伝』の版本について見ていくことにする。従来の版本研究によると、雍正年間までには七十回本は当然出版されているが、それ以外の版本も出版されていたことが確認されている。ここでは先行研究に従いながら、そのうちの代表的なものを挙げてみたい。

百回本では芥子園本・無窮会本・石渠閣補刊本の三種を挙げることができる。佐藤鍊太郎に従うと、芥子園本は刻工黄誠之（一六三二～一六九九）の生没年から康熙年間の刊行、無窮会本は夷狄の蔑称に当たる言葉が埋木改変されていることから清初の刊行と見做される⁶。また石渠閣補刊本は、高島俊男が詳しく解説しているように、その版心の一部に「康熙五年石渠閣補」とあることから、石渠閣という書店が別の書店から版木を手に入れ、そのうちの一部を独自に補刻したうえで康熙五年（一六六六）に出版したものと予想できる。なお現存している石渠閣補刊本はさらに後の、おそらく雍正年間に再補刊されたものであろうと高島は推測している⁷。さらに百回本以外でも、文簡本系統では『英雄譜』として出版されたものが百十五回本と百十回本の二種類見られる。これはやや特殊な版本で、『漢宋奇書』という別名の示すとおり『三国志演義』と合刻され、版面の上三分の一に『水滸伝』、下三分の二に『三国志演義』が配されている⁸。

このほかにも、当時の著名な蔵書家銭曾（一六二九～一七〇一）の蔵書目録『也是園書目』巻十「通俗小説」の項には「舊本羅貫中水滸伝二十卷」という記載が見られる。これは最初期のみ見られる五回一卷という形態のものと考えられること、またわざわざ「舊本」と記していることから、銭曾が所蔵していた『水滸伝』は明代中期ごろの最初期の百回本と推定できる。

以上のように、現在見ることができる版本や記述に限ってではあるが、主に百回本を中心に征四寇故事が含まれた『水滸伝』の存在が確認できた。

次に、この時期に『水滸伝』の影響を受けて創作された文学作品を見ていきたい。これらの作品が『水滸伝』をどのようなものとして扱っているのかを探れば、その『水滸伝』がどの版本に基づいているのかを明らかにできるだろう。これはすなわち、当時の『水滸伝』流通状況のある程度再現することにもつながる。

最初に取り上げるのは、『水滸伝』の続書の代表作、陳忱（一六一三？～？）によって著され、康熙三年（一六六四）に出版された『水滸後伝』⁹である。本書は北宋南宋交代期を背景にしながら、宋江ら一〇八人の生き残りやその子らが様々な因果によって再び集結し、最終的には李俊を頭領として海外にある別

天地暹羅に落ち着き、さらに宋朝からも正式に王として封じられて平和に暮らす、という彼らの後日談を描いている。そしてその始まりである第一回には、前作を簡単にまとめた箇所が見られる。

梁山泊内一百八人、雖在綠林、都是心懷忠義、正直無私。皆爲官私逼迫、勢不得已、潛居水泊、却是替天行道、並不殃民。後來受了招安、遣他征伏大遼、剿除方臘、屢建功勳、亡身殉国。

梁山泊の一〇八人は、緑林にありながら皆が心に忠義を抱き、正直無私であった。その全員が官吏の私事によって迫害され、やむを得ず梁山泊に潜んでいたが、天に替わって道を行い、民衆に危害を加えることは決してなかった。後に招安を受けて遼を征伐し、方臘を滅ぼし、幾度も功績を立てて、身を顧みずに国に殉じた。

ここには明確に、宋江らが朝廷に帰順して大いに功績を立てたと書かれている。その功績すなわち征四寇故事のうち遼征伐と方臘討伐には言及しているが、田虎と王慶には触れられていないことから、『水滸後伝』は百回本の『水滸伝』の後日談として書かれたと考えられる。また宋江らは盗賊でありながらも忠義を抱いていたと評価しているように、『水滸後伝』は彼らに対して肯定的な立場を取っていることも分かる。このような彼らの生き残りである李俊らは、『水滸後伝』においても忠義として称賛される行為を度々実行している。このことが端的に示された例として、第三十七回における彼らの動向を見てみたい。

南宋の高宗は侵略してきた金の軍勢によって牡蠣灘に包囲されてしまったが、李俊らは金軍を破って高宗を救出することに成功する。そこで謁見が叶うと、彼らは高宗から次のような言葉をかけてもらった。

朕久知宋江和卿等心懷忠義、爲朝廷立功。……今日朕家危難、又藉卿等相救、真是功垂竹帛、百世流芳。

朕は宋江やあなたたちが心に忠義を抱き、朝廷のために功績を立てたことは前から知っていた。……今日も朕は危機に瀕していたが、またもやあなたたちに助けられた。これこそ正に「功績は青史に記され、未来永劫その芳名を残す」というものである。

忠義の究極の対象である皇帝の高宗から直々に感謝されているということ自体が、李俊らが忠義であることを最も象徴的に示している。さらにここで高宗は、李俊らの前身である宋江らに対しても忠義であるという認識を表明している。したがって、このように宋江らを忠義として称賛する『水滸後伝』は、百回本の『水滸伝』が忠義の物語であるという前提のもとに創作された、という

ことができよう。

続けて、銭彩と金豊（共に生没年不詳）によって著され、康熙二十三年（一六八四）に出版された『精忠演義説本岳王全伝』（以下『説岳全伝』）¹⁰を取り上げたい。これは南宋初期の名将岳飛とその子孫や義兄弟らの活躍を描いた小説である。岳飛の物語に関しても『水滸伝』と同様に、元曲『東窓事犯』や明代の熊大木の小説『大宋中興通俗演義』など長い歴史が認められるが、この前史の時点で『水滸伝』関連の物語群と直接の関係があったわけではない。しかし『説岳全伝』では、物語の展開する南宋初期という時代が『水滸伝』の舞台である北宋末期と非常に近いことを利用したほか、『水滸伝』の人気を取り入れたことから、梁山泊の好漢やその子孫が何人か登場している¹¹。

『説岳全伝』における『水滸伝』の影響を調べてみると、続書『水滸後伝』と全く同じになっている。まず『説岳全伝』が征四寇故事の後の物語であるということは、次の発言からうかがうことができる。

周侗道「……小兒跟了小徒盧俊義前去征遼、没于軍中。」

周侗「……息子は私の弟子の盧俊義に従って遼征伐へ出かけ、軍中で亡くなりました。」（第三回）

起龍道「……我弟兄兩個、是水滸寨中百勝將軍韓滔的孫子。当初我祖公々同宋公明受了招安、與朝廷出力、立下多少功勞。」

韓起龍「……私と弟の二人は、水滸寨の百勝將軍韓滔の孫です。かつて祖父は宋公明とともに招安を受け、朝廷のために尽力し、たくさんの功績を立てました。」（第六十三回）

前者は後に岳飛の武芸の師匠となり義父となる周侗の、後者は岳飛の息子岳雷が会う韓起龍の発言であるが、宋江らは朝廷に招安され、遼征伐などを行って朝廷に貢献したと述べられている。ただし田虎と王慶には言及されていないことから、『説岳全伝』が参照した『水滸伝』は百回本であると考えられる。

次に宋江らが忠義であるかどうかを読み取ることができる好例として、その子孫の一人である阮良の言動に注目したい。第二十七回、岳飛に大敗したうえなおも追撃されて黄河の畔に追い詰められた金国の兀朮は、偶然居合わせた漁師に対岸へ渡すよう頼み、自分の正体を明かして買収をもちかける。しかしその漁師すなわち阮良は、

我是中原人、祖宗姻戚俱在中國、怎能受你富貴。……我父親叔伯、名震天下、乃是梁山泊上有名的阮氏三雄。我就是短命二郎阮小二¹²爺々の兒子、名喚阮良的便是。你想、大兵在此、不去藏躲、反在這裏救你、那有這樣的獸子。

只因目下新君登位、要拿你去做個進見之禮物。

俺様は中原の人間で、祖先も親戚も皆中国にいるのに、どうしておまえの富貴を受けられようか。……俺様の父や叔父らは天下に名を轟かせた、梁山泊の阮三兄弟だ。そして俺様は短命二郎阮小二様の息子で阮良という者だ。今やおまえは大軍に囲まれて逃げ隠れできないというのに、ここでそんなおまえを助けるような阿呆がどこにいるというのだ。今や新しい天子も位を継いだからには、おまえを捕まえて謁見の手土産にしてやる。

と一蹴して兀朮を捕まえようとするが、結局は逃げられてしまう。ここでの阮良の発言からは、夷狄である兀朮の提示する富貴には目もくれず、宋朝を脅かす彼を捕まえて朝廷に突き出そうとする彼の朝廷に対する忠誠心を読み取ることができる¹³。しかも彼はその後、岳飛に従って各地を転戦しながら手柄を立てて朝廷に貢献することになる。

このように朝廷に従うのは阮良だけではない。『説岳全伝』に登場するほぼ全ての梁山泊の好漢やその子孫が直接的に、あるいは間接的に朝廷に協力している。つまり、彼らは忠義の名将岳飛と同じく忠義の心をもっているのである。ただし彼らにこのような行動を取らせるには、『水滸伝』が忠義の物語であるということが不可欠の前提となる。したがって『説岳全伝』が取り入れたのは、征四寇故事によって忠義であることが示されている百回本などの『水滸伝』であると結論を下すことができる。

一言付け加えると、第一章で論じたように、『水滸伝』は岳飛説話や楊家将説話の構成である宋代忠義英雄譚に則ることで成り立っていた。ならば『説岳全伝』は、岳飛説話から『水滸伝』へと移植された忠義がフィードバックして反映された作品と見ることができよう。

この時期に『水滸伝』に基づいて創作された二作品はいずれも、設定においては征四寇故事をふまえて成立し、内容においては『水滸伝』を忠義の物語と認めている。したがってこれらの創作の前提には、百回本など征四寇故事が含まれた『水滸伝』の流通が必要不可欠となる。もし仮に七十回本以外の版本が流通していなかったならば、このような続作が創作される可能性はなくなる。なぜならば七十回本には征四寇故事が見られず、なおかつ宋江らは単なる盗賊集団であって忠義ではないという前提の下で物語が展開しているからである。

以上のことから、雍正年間までには七十回本だけではなく百回本なども幅広く流通し読まれていたといえる。結局のところ、この時期の基本的な状況は明代とほとんど変わらなかったのである。

第三節、乾隆年間：『水滸伝』七十回本の定本化

雍正年間までは、明末までと同様に様々な版本の存在と流通が確認できた。それでは、このような諸系統版本の林立状態がそれ以降も変わらずに続いたのであろうか。本節では、乾隆年間の動向を見ていくことにしたい。

乾隆年間の『水滸伝』に関する動向の大きなものの一つに、宮廷大戯『忠義璇圖』¹⁴の制作を挙げることができる。その詳しい内容の紹介と分析は第五章で論じることにして、ここでは制作時期と基づいた『水滸伝』の版本について簡単に述べたい。『忠義璇圖』は清の宮廷において『水滸伝』を全二百四十齣に戯曲化したものであり、その成立の詳しい事情に関しては、皇族の禮親王昭棟（一七七六～一八二九）が著した『嘯亭統録』巻一「大戯節戯」の項に記されている。

乾隆初、純皇帝以海内昇平、命張文敏製諸院本進呈、以備樂部演習、凡各節令皆奏演。……其後又命莊恪親王譜蜀漢三国志典故、謂之鼎峙春秋。又譜宋政和間梁山諸盜、及宋金交兵、徽欽北狩諸事、謂之忠義璇圖。

乾隆年間の初めに、乾隆帝は国内が平定されたということから、張照に命じて諸々の戯曲を作らせ、樂部に練習させて、節日に演じさせた。……その後莊恪親王に命じて、三国時代の出来事を『鼎峙春秋』にまとめさせた。また宋の政和年間の梁山の盜賊たちのこと、及び宋金の交戦や徽宗と欽宗が北方に拉致されたことなどを『忠義璇圖』にまとめさせた。

これによると、皇族の莊恪親王（康熙帝の第十七子允祿、一六九五～一七六七）がその編集責任者であったことが分かる。莊恪親王が『鼎峙春秋』と『忠義璇圖』の制作に関わったのは、前任者の張照（一六九〇～一七四五）が乾隆十年（一七四五）に亡くなったためと考えられる。さらに乾隆十八・十九年に『水滸伝』に関する禁令が政府から出されていることを踏まえると、『忠義璇圖』の完成はこの前後と考えられる¹⁵。

それでは乾隆年間初期に宮中で制作されたこの『忠義璇圖』は、どの『水滸伝』を戯曲にしたものであろうか。その内容を見てみると、征四寇故事のうち遼が史実に即して金が討伐するように改変されているのを除いて三勢力の討伐が見られることから、『忠義璇圖』が基にした『水滸伝』が百回本や七十回本でないことは明白である。そして田虎配下の鄔梨や瓊英の設定が文簡本ではなく百二十回本と共通する¹⁶一方で、構成面では七十回本の影響を強く受けていることから、両者の版本を参照したと考えられる¹⁷。

乾隆年間における他の大きな動きとしては、『忠義璇圖』の制作より四十年ほど後の乾隆五十七年（一七九二）に、『続水滸征四寇全伝』（別名『蕩平四大寇

全伝』。以下『征四寇』という書物が出版されていることに注目したい。この『征四寇』は実際のところ『水滸伝』に関する新作ではなく、文簡本の『英雄譜』百十五回本のうち後半部の四十九回分、すなわち征四寇故事のみを単独で刊行したものにほかならない¹⁸。それではなぜこのような形態の本が登場したのであろうか。その手掛かりは、本書に附されている賞心居士（生没年不詳）なる人物が書いた序に見出すことができる。

閑閱水滸一書、見其榜曰第五才子、則與三国志諸書同列、而非野史稗官所可同日語也、明矣。然自納款傾葵之後、尊卑列序之餘、竟忽然而止、杳不知其所終、是與天地珍重生才之心、豈不大相逕庭哉。

『水滸伝』を見てみると、その表題には「第五才子書」とある。つまりこれは『三国志』などの書物と同列のものであって、野史や稗官の小説とは価値が全く異なるのは明白である。しかし宋江ら一〇八人が梁山泊に結集し強固な絆で結ばれると、後はその序列が決まっただけで突如平然と終わってしまい、その結末は杳として分からない。これでは世の中の才能を重んずる心情と大いにかげ離れてしまうではないか。

賞心居士という人物の詳しい経歴は全く分からないが、自分が読んだ『水滸伝』のあまりに唐突な結末に強い不満を抱いていたことは間違いない。ここで注意すべきなのは、彼が不満を抱いた『水滸伝』が何を指しているのかである。

「梁山泊に結集し強固な絆で結ばれると、後はその序列が決まっただけで突如平然と終わってしま」う、という記述は七十回本の最後の部分に相当するだろう。また「第五才子書」とは、すでに述べたように金聖嘆が自ら創作した七十回本を他の版本と区別するために付けた表題である。したがって賞心居士が目にした『水滸伝』は七十回本と断定できる。

ただしより正確にいうならば、彼の読書環境ではすでに七十回本しか見ることができなかつたというべきであろう。もし仮に百回本など征四寇故事を含めた『水滸伝』が幅広く流通して読まれていたならば、その内容について言及するはずである。

同様のことは本書の刊行自体についても言うことができる。百回本などがなおも流通していたならば、それほど高く評価されていたわけではない征四寇故事のみをわざわざ名称を変えて出版する必要は全くない。つまり『征四寇』として単独で刊行されたという事実自体が、七十回本が唯一の『水滸伝』として定着し、他の版本が認知されていなかったという当時の環境を暗に示しているのである。

したがって『忠義璇圖』が完成したと思しき乾隆十八・十九年前後と『征四

寇』が出版された同五十七年の間に、『水滸伝』の流通状況に大きな変化が起こったと予測できる。そこでこの間の人々の『水滸伝』に関する言論を見ていくと、彼らの『水滸伝』認識に揺らぎを確認することができる。乾隆年間中期ごろに活躍した阮葵生（生没年不詳）は、自らの著書『茶餘客話』巻十八「水滸伝」の項で次のように述べている。

水滸傳或作羅貫中作、又云施耐庵作、妄言誨盜、其子孫三世啞啞。

『水滸伝』は羅貫中が書いたとも、施耐庵が書いたともいわれているが、いずれにせよ妄言で盜賊を推奨したため、その子孫は三代口がきけなくなった。

これによると、彼は『水滸伝』の作者を羅貫中と施耐庵のどちらなのかについて判断を保留している。しかし金聖嘆の自序は施耐庵のみを作者としており、羅貫中を作者とは認めていない。もし仮に阮葵生が手にすることのできる『水滸伝』が七十回本のみとなっていたならば、羅貫中をその作者と考えるはずはない。よって阮葵生は、征四寇故事の含まれた百回本などの『水滸伝』を念頭に置いていたと考えられる。一方で阮葵生とほぼ同時期に活躍した翟灝（?～一七八八）は、その著書『通俗編』巻二十において、

陸友仁題宋江三十六人畫贊……則江降後自有攻討方臘等事、續傳不爲無因。

元の陸友仁に「題宋江三十六人画贊」という詩があり、……それでは宋江が朝廷に降った後に方臘らを討伐する事跡があったと述べているので、続伝は根拠がないわけではない。

と述べ、方臘討伐のことを「続伝」と表現している。これは阮葵生の場合とは逆に、征四寇故事が『水滸伝』の一部と認識している人の口からは決して発せられない表現であろう。つまり翟灝は『水滸伝』と征四寇故事とは別個のものと把握していたのであり、七十回本以外の版本の存在を知らなかったと考えられる。

『水滸伝』とは征四寇故事を含めた百回本など複数のものを指すのか、それとも七十回本のみを指すのか。このような認識はある瞬間に一変するものではなく、ある程度の長い時間をかけて徐々に変化していくものと考えられるべきである。したがって七十回本が『水滸伝』の定本の地位を確立するのは、以上の分析から『忠義璇圖』から『征四寇』までの期間、すなわち乾隆年間の中期から後期にかけての期間であると推定できる。

第四節、嘉慶年間以降：認識されていた征四寇故事

乾隆年間の中期から後期にかけて百回本などの版本が淘汰され、それ以降は七十回本のみが『水滸伝』として認知されるようになった。結局のところ冒頭で触れた鄭振鐸の意見は、乾隆年間の後期以降には当てはまるということになるだろう。しかしここで一つ疑問が浮かび上がってくる。乾隆年間に続く嘉慶年間より後には、七十回本に全く見られない征四寇故事はどうなってしまったのだろうか。淘汰された百回本などと一緒に、完全に散逸してしまったのであろうか。この問いに答えるために、まずは嘉慶年間以降の人々の『水滸伝』に対する見解から探っていきたい。

この時期の見解を代表する人物としては、咸豊元年（一八五一）に出版された『水滸伝』の続書『蕩寇志』（別名『結水滸全伝』）¹⁹の作者である俞萬春（一七九四～一八四九）を挙げることができる。該書は七十回本の直後から始まっていることから分かるように、七十回本の続作として書かれたものである。しかも宋江ら一〇八人を徹底的に悪人として描き、さらには朝廷に討伐されて彼ら全員が非業の死を遂げるという物語になっている。このように宋江らを心の底から憎んでいた俞萬春は、自分の『水滸伝』に対する見解について『蕩寇志』の冒頭で明確に表明している。

縁施耐庵先生水滸傳、並不以宋江爲忠義。眾位只須看他一路筆意、無一字不描寫宋江的奸惡。其所以稱他忠義者、正爲口裏忠義、心裏強盜、愈形出大奸大惡也。聖歎先生批得明明白白。忠於何在、義於何在。……乃有羅貫中者、忽撰出一部後水滸來、竟說得宋江是真忠真義。

そもそも施耐庵先生が著した『水滸伝』は、決して宋江を忠義とはしていない。みなさんはその筆遣いをほんの少しでも見れば、宋江を悪人として描いていないところは一字としてないことが分かるだろう。彼を忠義であると言っているのは、実は口先では忠義と言いながら、その心は悪盗以外の何者でもないのであって、その酷い奸悪ぶりをより深くあぶり出すためである。金聖嘆先生はその点を「忠はどこにあるのか。義はどこにあるのか」と実に見事に批評している。……ところが羅貫中という者が突然『後水滸』を創り出し、なんと宋江は本当に忠義であると言い出してしまった。

ここで俞萬春は、施耐庵が著した『水滸伝』は宋江を忠義の仮面を被った極悪人としていたが、羅貫中は低質な続作『後水滸』を作り出して忠義の人物にしてしまった、とのように両者における宋江の位置付けの変化を説明している。そして施耐庵に対する賛同と羅貫中に対する憤慨から、俞萬春は『蕩寇志』においては宋江らを徹底的に悪人として描いたのである。しかし一読して分かるように、この俞萬春の主張は金聖嘆の自序で述べられていたものと基本的に大

差はない。したがってこれは兪萬春独自の見解ではなく、金聖嘆の自序で述べられていたことを事実として受け止めたうえでの見解であると考えられる。

このように金聖嘆の自序に見られる施耐庵と羅貫中の関係を事実と捉えていたのは兪萬春だけに限らない。例えば、兪萬春からやや時代が下った清末の光緒年間には、邱煒萱が『菽園贅談』（一八九七刊）「水滸伝」の項で、

何物羅貫中強起干預、妄行續貂、七十回以前、被其竄乱者亦復不少、實水滸一大厄也。至毅然以忠義之名褒羣盜、更爲耐菴所不及料。

なんと羅貫中は『水滸伝』に強引に手を加え、妄りに低質な続編を作り、七十回以前に少なからず改悪を施したが、これは実に『水滸伝』の一大災厄である。忠義という評価を強盗に毅然と加えてしまうとは、施耐庵にも全く思いつかなかったであろう。

と述べている。またさらに後の民国初期には、錢静方が『小説叢考』（一九一六刊）「水滸演義考」の項で、

水滸實元季施耐庵先生所撰、羅所編者、特征四寇之後水滸耳。……謂宋江招安之後、以征四寇立功、此眞畫蛇添足、大失施耐菴前水滸之本旨矣。

『水滸伝』は元末の施耐庵先生が著したもので、羅貫中が作ったのは四つの賊寇を征伐する『後水滸』だけである。……宋江が招安され、四つの賊寇を征伐して功績を立てるのは、まさに蛇足を加えたにほかならず、施耐庵の「前水滸」の主旨を大いに損なうものである。

とその見解を表明している。両者とも羅貫中は施耐庵の創作意図を全く理解せずに低質な続編を作ったと述べており、兪萬春の主張と全く同じである。

以上の三者が全く同様に金聖嘆の自序とほぼ同じことを述べているのは、やはり七十回本の『水滸伝』定本化が最大の原因であろう。もともとは金聖嘆の捏造にすぎなかった施耐庵と羅貫中に関する主張が、七十回本が定本の地位を確立したことにより、作者に関する情報として絶対的な立場を占めるようになる。そこには相反するような言説が全く存在しないことから必然的にその信憑性も高まり、結果として『水滸伝』の変遷を説明する事実として定着したと考えられる。

さてここで一つ注目すべきなのは、兪萬春らが一様に羅貫中の創作した『後水滸』なるものに対して言及していることである。「低質な続編」とか「蛇足」とかのように、その評価は非常に手厳しい。だが羅貫中が創作した四賊寇を討伐する忠義の物語という彼らの説明から考えるに、ここでいう『後水滸』とは新たに登場した続作などではなく、実質的には征四寇故事のことにほかならな

い。つまり七十回本の『水滸伝』にしか接することができなかつた彼らも、征四寇故事についてはある程度の知識を持ち合わせていたといえる。

それでは彼らは征四寇故事の内容についてどの程度知っていたのであろうか。このような疑問を投げかけるのは、彼らの征四寇故事についての批判は金聖嘆の自序にすでに見られるものであり、したがって作者に関する言説と同様に、それを単に引き写しただけという可能性も否定できないからである。金聖嘆の自序さえ知っていれば、先に引いたような征四寇故事批判を書くことは十分に可能だからである。しかし兪萬春らは決してそのような単純な引き写しをしたわけではない。なぜならば当時『後水滸』なる書物が実際に市場に出回っており、彼らは直接それを手にすることができたと考えられるからである。この事情については、鏡水湖辺老漁なる人物が書いた「蕩寇志跋」に克明に記されている。

近時粵中坊本、又改後水滸之名爲征四寇、仍圖煽惑愚民、而以征寇二字與蕩寇二字相混雜、殆伏莽猶未靖歟。

最近広州で刊行された本の中に、『後水滸』を『征四寇』に改称して、なおも愚民を煽動しようとしているものがある。しかしこれでは「征寇」の二字と「蕩寇」の二字が混同されてしまい、騒乱が治まらなくなるではないか。

跋であることから『蕩寇志』寄りの立場を取ってこの状況を非難しているのだが、『後水滸』が時にその名称を変えながら広範に流通していた事態が窺える。

そして乾隆年間後期以降の人々が征四寇故事を認知していたことの最大の証拠は、胡適が「『水滸伝』考証」を執筆した当時の読書環境から見出すことができる。この論考は、民国九年（一九二〇）に上海の亜東図書館から七十回本を排印した『水滸』が出版された時にその巻頭に附された、中国で最初の科学的な『水滸伝』研究の成果である。しかし一読して分かるように、この論考において胡適は七十回本の『水滸伝』しか用いていない。なぜならばこの当時の胡適は、『水滸伝』とはすなわち七十回本のことであり、その他の版本は全て散逸して現存していないと考えていたからである。七十回本しか見られないという『水滸伝』に関する環境という点では、胡適は兪萬春らと大差はなかったと言えよう。ちなみに胡適が七十回本以外の版本を見ることができるようになるのは、すなわち中国で百回本などの存在が再確認されるのは、「『水滸伝』考証」発表後に青木正児から日本に現存していた百回本などの版本を送られて以後のことである²⁰。

しかし胡適は「『水滸伝』考証」の時点ですでに、前節で言及した『征四寇』を参考資料として使用しているのである。しかも「坊間現行（世間に流布して

いる)」と説明していることから考えるに、簡単に手に入れることができたのであろう。つまり百回本などは手にすることすらできなかった時点においても、『征四寇』は容易に手元で参照することができたのである。しかも胡適が紹介するその内容は、現在の我々が知る征四寇故事と寸分の違いもない。したがって胡適に先んじる俞萬春らも実際に世間に広く流通している『後水滸』すなわち征四寇故事の内容に十分に熟知しており、そのうえでこれを非難していたと考えられる。

結局のところ百回本などが淘汰された乾隆年間後期以降、征四寇故事は『後水滸』『征四寇』などのように『水滸伝』とは別個の作品として、しかもその低質な続作と考えられながらも出版され続けたといえる。ただし忠義の物語か否かという基準だけが両者を別々の作品に分けたのではない。両者の版本の系統に着目すると、『水滸伝』として残った七十回本は文繁本系統であるが、『征四寇』の方は文簡本系統の一部であった。文章表現に歴然とした差異があることから、嘉慶年間以降の人々にとって『征四寇』と七十回本の『水滸伝』が同一の小説であると想定することはほぼ不可能であっただろう。

終わりに

本章で論じてきた清代の『水滸伝』受容事情をまとめると次のようになる。

清代に入っても乾隆年間の前期までは、征四寇故事が含まれた百回本などの『水滸伝』も幅広く流通し読まれていた。つまり金聖嘆が明末清初に創作した七十回本は、その登場と同時に他の版本を淘汰することはできなかったのである。七十回本が『水滸伝』の唯一の通行本としての地位を確立するのは、その登場から百年ほど後の乾隆年間の中期から後期にかけてであった。しかしその後征四寇故事は、『征四寇』などのように七十回本の低質な続作という二次的な地位にありながらも人々に読まれ続けたのである。なお中国で征四寇故事が含まれた百回本などの『水滸伝』の存在が再認識されるのは、胡適が「『水滸伝』考証」発表した後のことであった。この経緯を簡潔に図示すると次のようになる。



それでは、なぜ征四寇故事は『水滸伝』から分離しつつも人々に親しまれ続けたのであろうか。最後にこの問題について少し考えてみたい。

征四寇故事は、多くの点で梁山泊集結までの部分とは一線を画する。第一に、梁山泊集結までの部分が個々人の活躍を中心に描いているのに対し、征四寇故事は梁山泊集団という一集団の動向を描いている。したがって前者が一人ひとりに焦点を当てて精彩に描けるのに比べると、後者はどうしても没個性的な展開にならざるをえない。第二に、梁山泊集結までの部分では一社会での各事件に焦点を当てているのに対し、征四寇故事は朝廷による全体社会の秩序維持という政治的な視点から描かれている。つまり前者においては個々の事件の細部を詳しく描写することで具体性が獲得されているが、後者では政治的な問題を取り扱っているために必然的に抽象性が強くなってしまふ。第三に、使われている言語表現に明確な差異が認められる。高野直子・小松謙両氏の百回本に対する詳細な調査によると、梁山泊集結までの部分は白話的語彙が多いのに対し、それ以降では文言的語彙が多い²¹。

両者にこのような大きな相違が見られる原因は、第一章で論じたように、征遼故事を含む征四寇故事が宋代忠義英雄譚に則するかたちで、おそらく『水滸伝』成立の間際に組み込まれたからである。『水滸伝』に限らず『三国志演義』『西遊記』などの白話小説に見られる物語の一部は、古くは宋代の講談や元代の雜劇などにその原形を見出すことができる。しかし『水滸伝』においてこのような由来を確認できるのは、実際のところ梁山泊集結までの部分に限られる。一方の征四寇故事は、唯一方臘討伐を除き、小説成立以前の講談や戯曲には全く見出すことができない。またその方臘討伐も、その実態は宋江が方臘を討伐したという概説程度に留まっている。例えば、宋末元初に成立したと思われる『大宋宣和遺事』には「後遣宋江平方臘有功封節度使（後に宋江を派遣して方臘を討伐させ、功績があったので節度使に封じた）」の十三字しか見られず、明初の皇族である周憲王朱有燾（一三七九～一四三九）が創作した北曲系雜劇『黒旋風仗義疎財』全五折²²では最後の第五折で方臘討伐が見られるが、そこでは単に経過が語られるにすぎない。当然のことながらここには、梁山泊集団の事実上の崩壊に結びつく現行の『水滸伝』のような起伏に富んだ悲劇的物語性は全く見られない。さらに征四寇故事の一部には、明らかに先行する作品からの借用が認められる。例えば遼征伐には『楊家將演義』やその関連説話からの借用を指摘できる²³。

つまるところ、征四寇故事の成立は梁山泊集結までの部分よりも遅れるのである。明代前期までは全く形成されておらず、明代中期すなわち『水滸伝』成立時かそれからあまり遡らない時点に宋代忠義英雄譚に則るかたちで創作されたということになる。

このような征四寇故事の成り立ちを考えると、金聖嘆が七十回本創作に際し

てそれを完全に切り捨てた処置は、『水滸伝』が宋代忠義英雄譚に則することで成立したことに對する反発と言えないだろうか。

征四寇故事すなわち宋江らが国の存亡に深く関わる物語は、小説以前の梁山泊故事群には見られないものである。一方で金聖嘆は、おそらく講談や戯曲など小説以外のかたちでも梁山泊の好漢の物語に触れていたであろう。また『水滸伝』や『西廂記』などを批評したからには、楊家將説話や岳飛説話など多くの通俗文芸作品を見聞きしていたであろう。ならば金聖嘆にとって、征四寇故事が宋代忠義英雄譚に沿うかたちで作られたと見抜くことは十分に可能であったと考えられる。

金聖嘆は、白話小説における物語創作の先駆けとなった宋代忠義英雄譚に則した作品形成の手法に異議を唱えたのではないだろうか。征四寇故事を含む『水滸伝』を創作した者に対して「何者とも知れぬ騒動好きな輩」と酷評したのは、その憤りの表れであろう。社会に与える影響を深く考えず、ただ物語としての面白さのみを追求する創作姿勢に釘を刺す意図が見えてくる。実際に『水滸伝』が李自成など明末に起きた反乱に影響を及ぼしたことを踏まえると、金聖嘆の現実を重視した作品観が浮かび上がってくる。

ただし金聖嘆が施した内容面での処置は、宋代忠義英雄譚の浸透力を打ち消すには至らなかった。金聖嘆としては、七十回本を出版することによって、征四寇故事という後から付加された部分を『水滸伝』から分離できると考えていたのであろう。しかし宋代忠義英雄譚に則した『水滸伝』にとって、征四寇故事は不可欠な構成要であった。そして清代の人々は、梁山泊に集結するまでの本編とその後を描く続編というやや屈折した受け取り方をしながらも、『水滸伝』を宋代忠義英雄譚として享受していったのである。

-
- 1 高島俊男『水滸伝の世界』（大修館書店、一九八七）「十五、水滸伝をチョン切った男」、大木康・藤井省三『新しい中国文学史』（ミネルヴァ書房、一九九七）第Ⅰ部第二章、张国光『《水滸》与金圣叹研究』（中州書画社、一九八一）「前言」など。
 - 2 このような「忠義水滸伝序」に見られる李卓吾の見解については、井上浩一「李贄と金聖嘆——読書論の差異とその思想的背景——」（『中国——社会と文化』十五、二〇〇〇）参照。
 - 3 『第五才子書施耐庵水滸伝』（中華書局影印、一九七五）を使用。
 - 4 このような金聖嘆の見解については、中鉢雅量『中国小説史研究——水滸伝を中心として——』（汲古書院、一九九六）第Ⅱ部第五章「金聖嘆の水滸伝観」参照。
 - 5 高島俊男注1前掲書「十五」
 - 6 佐藤鍊太郎「李卓吾評『忠義水滸伝』について」（『東方学』七十一、一九八六）。

- 7 高島俊男「水滸伝『石渠閣補刊本』研究序説」(『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』汲古書院、一九八六)。
- 8 马蹄疾『水滸書録』(上海古籍出版社、一九八六)による。
- 9 『古本小説集成』所収影印本を使用。『水滸後伝』については、Ellen Widmer『The margins of utopia: *Shui-hu hou-chuan* and the literature of Ming loyalism』(Harvard University Press、一九八七)、龚维英「简析《水滸》两种续书——《水滸后传》和《荡寇志》比较研究」(『贵州社会科学』第一百五十三号、一九九八)など。
- 10 『古本小説集成』所収影印本を使用。
- 11 『説岳全伝』と『水滸伝』の関係については、渡辺宏明「『説岳全伝』と『水滸伝』」(『法政大学教養部紀要』人文科学編九十二、一九九五)、龚维英「《说岳全传》:《水滸》的特殊续书」(『贵州社会科学』第一百五十八号、一九九九)など参照。
- 12 ちなみに『水滸伝』で阮小二のあだ名は「立地大歳」であり、「短命二郎」はその弟阮小五のあだ名である。
- 13 この阮良をはじめ、『説岳全伝』に登場する人物の宋朝に対する忠義に関しては、笠井直美「〈われわれ〉の境界一岳飛故事の通俗文芸の言説における国家と民族(上)(下)」(『言語文化論集』第23巻第二号・第24巻第一号、二〇〇二)に詳しい。
- 14 『古本戯曲叢刊九集』所収。宮廷大戯そのものに関しては、陈芳『乾隆时期北京剧坛研究』(文化芸術出版社、二〇〇一)参照。『忠義璇圖』に関しては、謝碧霞「忠義璇圖の関目與排場」(『水滸戯曲二十種研究』国立台湾大学出版委員会、一九八一)参照。
- 15 拙論「清代における七十回本『水滸伝』と征四寇故事について」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第七号、二〇〇四)では乾隆十年代としたが、このように絞り込む。
- 16 田虎討伐に登場する人物の設定が文簡本と百二十回本で大きく異なることについては、笠井直美「『水滸』における「対立」の構図」(『東洋文化研究所紀要』百二十二、一九九三)参照。
- 17 注15前掲拙論では百二十回本を底本にしたと断じたが、このように訂正する。
- 18 胡適「『水滸続集兩種』序」(『水滸続集』(亜東図書館、一九二四)に掲載)。
- 19 『古本小説集成』所収影印本を使用。なお本書は俞萬春の生前には出版されず、その死後に子や友人らの編集を経て刊行された。また『蕩寇志』については、龚维英注9前掲論文、高明閣「《荡寇志》对《水浒传》的反扑」(『明清小説研究』第二輯、一九八五)など。
- 20 以上の胡適の『水滸伝』環境に関しては、翌一九二一年に亜東図書館から再版された『水滸』に自ら「『水滸伝』後考」を著して告白している。
- 21 高野陽子・小松謙「『水滸伝』成立考——語彙とテクニカル・タームからのアプローチ——」(『中国文学報』第六十五冊、二〇〇二)。
- 22 小松謙「内府本系諸本考」(『中国古典戯曲論集』汲古書院、一九九一)が指摘するように、四折構成が基本の北曲雑劇では異例のものであり、朱有燉の実験作と考えられる。
- 23 中鉢雅量注4前掲書第二節第三章「楊家将演義と水滸伝」。

第五章：宮廷大戯『忠義璇図』について

はじめに

宮廷大戯『忠義璇図』は、清の乾隆年間に宮廷において『水滸伝』を戯曲化した作品である。清代にはこの他にも『水滸後伝』や『蕩寇志』など『水滸伝』から派生した作品がいくつか創られており、当時『水滸伝』がいかに広く人々に知れ渡っていたかが窺える。その中でも『忠義璇図』は『水滸伝』そのものを戯曲に改作した作品であるため、清代における『水滸伝』受容の一端をより直接探れる貴重な資料と見なせるだろう。しかし宮廷で創作され上演されたという特殊な事情や、一般的な戯曲の数倍という膨大な分量などの理由から、従来あまり注目されることはなかった¹。

そもそも清の宮廷が『水滸伝』を戯曲に編集したこと自体、矛盾した行為に思われるかもしれない。基本的に宮廷大戯では『三国志演義』・『西遊記』や目連戯など著名な通俗文芸作品が題材となっており、『水滸伝』もその一貫として取り上げられている。だが『水滸伝』はこれらの作品とは事情を異にしている。清代を通じて『水滸伝』は、人々に反乱を誘発しかねない有害書の冠たるものと政府から目され、時にその出版や流通が厳しく取り締まられた。

凡坊肆市賣一應小説淫詞水滸傳、俱嚴查禁絕、將版與書、一並盡行銷毀。

民間での全ての卑俗な小説『水滸伝』の販売は、厳しく取り締まって根絶させ、その版木と本は、押しなべて処分せよ。（『欽定吏部処分則例』卷三十「礼文詞」）

したがって、発禁命令を出すなど厳しい態度をとっている朝廷の中核たる宮廷がその対象となる作品を戯曲化したことには、相応の理由があったと考えるべきだろう。

本章では『忠義璇図』の内容を紹介し、その『水滸伝』との関係を考察する。『忠義璇図』のテキストは、『古本戯曲叢刊九集』（中華書局、一九六四）所収の内府鈔本の影印本を用いる²。

第一節、作品概要

『忠義璇図』は二十四齣を一本とし、それを十本組み合わせた、計二百四十齣の大長編戯曲である。

この二百四十齣という齣数は、宮廷大戯の各作品に共通している。これほどまでに膨大な分量となったのは、一つには基となる通俗文芸作品が概ね長編であったためと考えられる。ただし戯曲が一般的に四十齣前後で構成されることを踏まえると、宮廷だからこそ大長編の戯曲を制作できる、という権威を誇示する意図もあったのかもしれない。

『忠義璇図』は基本的に『水滸伝』の物語をなぞっている。つまり洪信が一〇八の妖魔の封印を解いてしまったことから、徽宗の世に転生した宋江ら一〇八人が朝廷からの迫害を逃れて梁山泊に集結し、一転して朝廷に帰順した後は各地の反乱勢力を討伐するが、その功績を妬む奸臣に殺されてしまう、という展開をたどる。後述するように全編が均一に戯曲化されているわけではなく、内容の移動や増減も見られるが、総じてみると作品の約九割は『水滸伝』の戯曲化と見なして差し支えない。

『忠義璇図』の残り一割は、『水滸伝』の内容とは全く無縁な場面から成り立っている。その中でも注目に値するのが、10—8（第10本第8齣を指す。以下同様に略記する）「芙蓉城鬼使神差」以降の展開であり、対照的な二種類の場面で構成されている。一つは、宋江ら一〇八人が冥界で十殿閻君に裁かれる場面である。裁判の結果、彼らはみな地獄に落とされて責め苦を受けることになる。もう一つは、李若水や張叔夜といった史実の忠臣の活躍を描く場面である。彼らは宋江ら一〇八人とは正反対に、天界に招かれて神仙たちに称賛されることになる。

この『忠義璇図』末尾の創設部分は、本戯曲の創作目的が顕著に表現された箇所である。第五節でもう一度詳しく論じる。

第二節、作者および制作時期

『忠義璇図』をはじめ宮廷大戯の制作については、皇族の昭榿が詳しく記述している。

乾隆初、純皇帝以海内昇平、命張文敏製諸院本進呈、以備樂部演習、凡各節令皆奏演。……其曲文皆文敏親製、詞藻奇麗、引用內典經卷、大爲超妙。其後又命莊恪親王譜蜀漢三国志典故、謂之『鼎峙春秋』。又譜宋政和間梁山諸盜、及宋金交兵徽欽北狩諸事、謂之『忠義璇圖』。其詞皆出日華遊客之手、惟能敷衍成章、又抄襲元明『水滸』『義俠』『西川圖』諸院本曲文、遠不逮文敏多矣。

乾隆年間の初め、乾隆帝は国内が平和になったことから、張照（文敏は字）に命じて戯曲を作って献上させ、それを楽部で練習させ、節日などに上演さ

せた。……その（『勸善金科』と『昇平寶筏』の）歌詞は張照が自ら創作したものであり、響きが美しく、仏教の経典を引用しており、非常に素晴らしい出来であった。その後莊恪親王に命じて三国志の物語を『鼎峙春秋』に、宋の政和年間の梁山泊の盗賊および宋金の戦争、徽宗・欽宗の北方拉致などの事件を『忠義璇図』にまとめさせた。その曲辞は浮ついた文人の手によるもので、かろうじて歌詞になっているだけであり、さらに元明期の『水滸記』・『義侠記』・『西川図』等の歌詞を剽窃しているため、張照の作品には遠く及ばない。（昭榎『嘯亭統録』巻一「大戯節戯」）

宮廷大戯は張照とその後任の莊恪親王が監督となって作られた。この莊恪親王とは、康熙帝の第十七子允祿のことである。また引用文にいう「日華遊客」とは、その下で活動していた周祥鉦や鄒金生³らを指す。したがって『忠義璇図』および『鼎峙春秋』の制作は、莊恪親王允祿を責任者とする集団体制で行われ、周祥鉦や鄒金生らが実際の戯曲制作に従事したと考えられる⁴。

制作時期は、允祿が楽部を統括した乾隆七年（一七四二）から没する三十二年（一七六七）までと推定される。ただし後述する『水滸伝』に関する禁令が乾隆十八年（一七五三）と十九年（一七五四）に出されていることを考慮すると、成立はその前後にまで限定できるかもしれない。

第三節、基づいた『水滸伝』版本

序論で述べたように、『水滸伝』の版本は文繁本の百回本・百二十回本・七十回本および文簡本に大別できる。

諸版本のうち七十回本は最も後発であり、金聖嘆が先行する版本に対する不満から創り出したものであるため、他と性質が大きく異なっている。金聖嘆は、盗賊の宋江が朝廷に忠義を尽くすという先行版本の展開に不快感を抱いていた。そこで七十回本では宋江の朝廷下での活躍を全て削除し、さらに忠義の人物であった主役の宋江を描き改めて忠義を騙る悪人とした。また先行版本の第一回すなわち洪信が一〇人の魔王を解き放つ話を「楔子」⁵として扱い、第二回以降の回数を順次一回ずつ繰り下げた⁶。

それでは『忠義璇図』が基づいている『水滸伝』の版本を探るとしよう。まず内容を見通すと、朝廷に帰順した宋江が田虎と王慶を討伐する話が見られる。さらにその田虎討伐に登場する人物の設定を調べると、文簡本ではなく百二十回本に近い⁷。よって『忠義璇図』は百二十回本に依拠して創られたと考えられる。

ただし全体の構成に注目すると、七十回本に強く影響されたと考えざるをえない。その痕跡は二点指摘できる。

一つは、内容の大半を梁山泊集結までの部分が占めている点である。次表は『忠義璇図』各本の『水滸伝』百二十回本における該当部分を簡略に示したものである。なお一部内容の前後が入れ替わっているため、重複する回がある。

第一本	第一回～第五回
第二本	第六回～第十七回
第三本	第十七回～第二十七回
第四本	第二十七回～第三十五回
第五本	第二十九回～第四十四回
第六本	第四十四回～第五十一回
第七本	第五十一回～第六十回
第八本	第六十回～第七十回
第九本	第七十回～第一百十五回
第十本	第一百十五回～第一百二十回

一見して分かるように、内容の八割強が第七十一回の梁山泊集結までに割かれている。それ以降の物語は、削除されるか、かなり簡略に触れられるに留まる。

もう一つは、戯曲の冒頭でこれから演じる内容の概略をあらかじめ解説する「副末開場」または「家門大意」と呼ばれる齣の配置である。一般的な戯曲では第一齣か第二齣に置かれるものであり、他の宮廷大戯でも1-1か1-2に置かれているが、『忠義璇図』では1-5という冒頭以外の位置に配されている。

『忠義璇図』の1-4までの内容を見てみると、1-1では儒仏道三教の教主である文昌帝君・釈迦如来・太上老君が天上界において下界の状況を語る話が展開される。このような作品冒頭における天上界での神仙の会話は他の宮廷大戯でも見られるため、「副末開場」の配置と関わることはない。続く1-2から1-4では、洪信が一〇八の妖魔を解き放つまでの経緯が描かれている。つまり『忠義璇図』は洪信に関する物語を序章として扱っているのである。「副末開場」の前に序章とはいえ物語を差し込むという戯曲の一般則から逸脱した構成は、七十回本の「楔子」に着想を得たものと考えられるしかない。

以上をまとめると、『忠義璇図』は内容面では百二十回本を用いているが、構成面では七十回本をかなり参考にしたと言える。

第四節、『水滸伝』との相違

『忠義璇図』は『水滸伝』を単純に戯曲化した作品ではない。上述したように、物語の比重は梁山泊集結までの部分に置かれていた。ただしそれ以外にもいくつか大きな改変が加えられている。ここでは『水滸伝』から削除された三点を挙げて論じていく。

第一に、梁山泊軍が朝廷の高官率いる討伐軍を撃破する場面が全て削除されている。これは『水滸伝』の第七十五回から第八十一回まで、梁山泊に集結した宋江らが朝廷に帰順する前の話に当たる。童貫や高俅ら奸臣は自ら軍隊を率いて梁山泊を討伐しようと企んだが、宋江らはこれを幾度も撃退した。この一連の戦闘の結果、朝廷は宋江らを招安する方針へと転換する。つまり宋江が朝廷に帰順するまでには、朝廷との間で様々な駆け引きが繰り広げられたのである。だが『忠義璇図』では、宋江ら一〇八人が梁山泊に集結し、燕青の泰山での奉納相撲試合および宋江の汴京での元宵節遊覧（『水滸伝』第七十二回から第七十四回に相当）が終わると、すぐに朝廷からの招安を受けることになる。

この措置はおそらく宮廷大戯の基本的な性質に由るのだろう。宮廷大戯は皇帝が観覧するものである。たとえ童貫や高俅といった奸臣に指揮されていたとはいえ、朝廷の正規軍が盗賊集団に大敗する内容は、極めて不謹慎に思われたであろう。

第二に、征遼故事が削られている。『水滸伝』では第八十三回から第八十九回まで、宋江率いる梁山泊軍が北方の夷狄の強国遼に進出し、最終的に遼を降伏させるに至る顛末が描かれている。『忠義璇図』ではこれを削除し、代わりとして1—24「金主親征伐契丹」、6—24「幽燕路祇迓王師」など、金が遼を征服する話が断片的に差し込まれている。

この改変には二つの理由が考えられる。一つは征遼故事の内容があまりに荒唐無稽なためである。史実の宋遼関係を鑑みると、宋は遼の軍事力に全く歯が立たず、毎年遼に金銭を送ることで平和的な関係を維持していた。第一章で触れたが、歴史的事実と著しく反する物語は、かなり稚拙なものと映ったであろう。もう一つは、金が遼を滅ぼした史実に則するためである。清は金と同じく満洲人の王朝である。よって金の功績を明らかにすることは、祖先の栄誉を称えることにも繋がる。要するに征遼故事に関する措置は、清朝からすれば一挙兩得と言えよう。

第三に、宋江と天との関係が一律に消去されている。具体的には、『水滸伝』第四十二回で宋江が九天玄女から三巻の天書を授かる場面、および第七十一回で梁山泊に一〇八人が集結した際にその名前と序列が刻まれた石碑が天から降

ってくる場面が削除されている。いずれも宋江ら一〇八人が元は天界の星であったことを読者に強く印象づける場面であり、さらには『水滸伝』が人間世界だけでなく天上界の動向も描いた物語であることを示唆している。

『忠義璇図』がこの二場面を消去したことは、宋江らが天界の星の転生であるという『水滸伝』の基本設定を根底から否定することになる。これは『忠義璇図』の制作意図と深く関わっている問題である。よって次節でまとめて論じる。

第五節、制作意図

『忠義璇図』の創作意図は、1—5「歸正傳副末開宗」いわゆる「副末開場」において明確に説明されている。以下、その表現を追いながら検討していこう。

まず『水滸伝』の主役である宋江ら一〇八人に対しては、単なる悪人でしかないという態度を打ち出している。

宋江等一百八人、秉豺狼虎豹之姿、行奪擾矯虔之事、偕黥刑遷徒之輩、矜揭竿斬木之雄、反詭称天罡地煞等名、以爲惑世誣民之具。豈有星精下降、相率爲盜之理。此實爲聖世所必誅、清時所不赦。

宋江ら一〇八人は、猛獣の姿で、悪逆非道を行い、無頼の徒と群れ、反抗的な武勇を誇っているのに、天罡・地煞など星宿を騙り、世の人々を惑わせている。星の精が下界に降りて、群れをなして盗賊を行う道理などありはしない。これは聖なる世では必ず罰せられ、清き世には許されないものである。

『忠義璇図』での宋江ら一〇八人は、この方針に従って『水滸伝』から描き改められている。前節で触れた、天との関係を消去したのはその一例である。ただし最も重要な改変は、作品の末尾に十殿閻君に罪を裁かれて地獄で責め苦を受ける場面を増設したことである⁸。これは、彼らの行為が死後地獄に落とされる悪事でしかないことを明確に表している。

下表は一〇八人がそれぞれ、どの十殿閻君によって何の地獄に落とされたかを示したものである。

刀山地獄（四殿閻君）	元官人	関勝・呼延灼など
碓磨地獄（二殿閻君）	生辰綱強奪組	晁蓋・公孫勝など
火車地獄（五殿閻君）	盗賊出身	魯智深・武松など
血湖地獄（三殿閻君）	漁師	李俊・張横など
鐵鞭一百（七殿閻君）	その他加担者	盧俊義・李逵など
重重地獄（十殿閻君）	首魁	宋江・呉用

梁山泊の中心人物である宋江と呉用は、各地獄を永遠にめぐり続けるという極めて重い処罰が下されている。

『忠義璇図』は宋江ら一〇八人をただ悪人として否定するだけではない。その反証として、北宋末期に朝廷に殉じた者たちを善人として表彰する。

豈知爾時如張叔夜、李若水、李綱、趙鼎諸人、其功略蓋天地、節義亘古今、名姓耀青編、精誠昭日月、這纔是『忠義璇圖』真結脉。

なんとその時には張叔夜・李若水・李綱・趙鼎といった人々がおおり、その功績は天地を覆い尽くし、その節義は古今に鳴り響き、その名は青史に輝き、その誠意は日月をも照らしたのであり、これこそが『忠義璇図』の真の結末なのです。

例えば金の將軍を罵って処刑された李若水や、徽宗と欽宗の拉致に同行するも国境の河で憤死した張叔夜などの生き様が、10—17「李若水噴血盡忠」や10—19「張叔夜白溝致命」などで描かれている。そして10—23「兜率宮羣仙會宴」において、彼らは天界に召され、神仙からその功績を称賛される栄誉を賜る。

したがって『忠義璇図』の制作意図は、史実の北宋末期で活躍した忠臣を称揚することによって『水滸伝』で描かれる忠義を否定するという、極めて道徳色の強いものであったと言えよう。

今日個把這本傳奇、前按舊文、後增正史、真忠真孝、任他生土生天、假義假仁、難騙愚夫愚婦。

本日この伝奇では、前では旧文に従いつつ、後で正史を加えることにより、真の忠孝がこの天地に生じるようにし、仮の仁義ではどんな愚か者も騙せないようにした。

天国と地獄という誰もが容易に理解できる結末を設けることで、『忠義璇図』は『水滸伝』の有害性を示そうとしたのである。しかも『忠義璇図』は真と仮の二つの忠義の相違を、対照的な二つの場面を交互に配置するという戯曲の常套表現手段を用いることによって、より鮮明に表現している。

第六節、『忠義璇図』と『水滸伝』の流通

『忠義璇図』が『水滸伝』を否定したのは、結局のところ、『水滸伝』によって誘発されている盗賊行為を元から絶ち、安定した社会を築くためと言えよう。この目的は当時の実社会でも禁令というかたちで表されている。『忠義璇図』が創られた乾隆年間には、『水滸伝』の流通を取り締まる法令が二つ出されている。

一つは乾隆十八年に出されたもので、『水滸伝』の満洲語翻訳を禁止する法令である。

近有不肖之徒、並不繙譯正傳、反將『水滸』『西廂記』等小説繙譯、使人閱看、誘以爲惡。……似此穢惡之書、非惟無益、而滿州等習俗之偷、皆由於此。如愚民之惑於邪教、親近匪人者、概由看此惡書所致。於滿州舊習所關甚重、不可不嚴行禁止。

近頃不逞の輩が五経のような正統な書を翻訳せずに、『水滸伝』や『西廂記』のような小説を翻訳し、人々に見せて、悪事に誘っている。……このような有害書は、役に立たないだけでなく、満州人の習俗の乱れの根源となっている。例えば愚民が邪教に惑わされ、悪人に親しむのは、ほぼこの有害書を読んだからである。満州の旧習に関わること甚大であるから、厳しく禁止しなければならない。（『大清高宗純皇帝聖訓』卷二百六十三「厚風俗三」）

このような法令が出されたことから、逆に『水滸伝』や『西廂記』といった漢人による通俗文芸作品が満洲人にも強い影響を及ぼしていた事態が窺えよう。

もう一つは翌十九年のもので、『水滸伝』の出版を禁止する法令である。

福建道監察御史胡定奏稱「……闕坊刻『水滸傳』、以兇猛爲好漢、以悖逆爲奇能、跳梁漏網、懲創蔑如。乃惡薄輕狂曾經正法之金聖嘆、妄加贊美、梨園子弟、更演爲戲劇。市井無賴見之、輒慕好漢之名、啓效尤之志、爰以聚黨逞兇爲美事、則『水滸』實爲教誘犯法之書也。……」今該監察御史奏請將『水滸』申嚴禁止等語。查瑣語淫詞、原係例禁、應如所奏請、敕下直省督撫學政、行令地方官、將『水滸』一書、一體嚴禁、亦毋得事外滋擾。

福建道監察御史の胡定が奏上した、「……民間で出版されている『水滸伝』を見ますと、凶暴な者を好漢とし、反逆者を有能とし、法の網を逃れ、懲罰を軽視しております。そして凶悪で軽薄なため処刑された金聖嘆が、妄りに賛美したため、劇団の師弟が、演劇に仕立てました。市井の無頼がそれを見ると、好漢の名声を慕うようになり、真似をしようと思ひ立ち、徒党を組んで悪事をはたらくことを良いことと見なしております。ですから『水滸伝』はまことに犯罪を誘発する本であります。……」今この監察御史が『水滸伝』を厳しく発禁するよう申し出た。卑俗な作品は、前から禁じられていることであるから、奏上のおりに、各直省の督撫や学政に命じ、地方官に『水滸伝』を一律に厳禁して、想定外の騒動を起こさせないようにせよ。（『定例彙編』卷三「祭祀」）

この二つの禁令は、おそらく『忠義璇図』の制作と表裏の関係にあったと考えられる。一方では『水滸伝』の流通を禁じながら、一方ではその有害性を説くことによって、相乗効果が期待されるからである。

しかし『忠義璇図』は、制作者の意図どおりには受容されなかったようである。昭榎は、第二節で引用した箇所直後、次のように続けている。

嘉慶癸酉、上以教匪事、特命罷演諸連臺。

嘉慶十八年（一八一三）、白蓮教徒の乱のため、連台戯の上演を止めさせた。（『嘯亭統録』卷一「大戯節戯」）

次の嘉慶帝の時代になると、『忠義璇図』などの宮廷大戯は政治状況の変化のため上演が取り止められてしまった。やや穿った見方かもしれないが、もし『忠義璇図』が制作者の思惑どおりには人々に『水滸伝』は有害書であるという意識を植えつけられたならば、反乱は死後地獄に落ちるような悪行であるという意識が浸透し、白蓮教徒の反乱も起こらなかつたであろう。

『忠義璇図』の創作意図が機能しなかつた主な理由は、作品の約九割が『水滸伝』の戯曲化にすぎないことに求められる。しかも作中では、天との関係が省かれたことを除けば、主役である宋江ら一〇八人の描写は『水滸伝』とほとんど変わらない。彼らが地獄で責め苦を受ける場面は、最後に付加された建前として見過ごされてしまったのであろう。

よって制作意図や内容面に関して言えば、『忠義璇図』は後世にほとんど影響を及ぼさなかつたと考えられている⁹。しかし筆者は、『忠義璇図』は間接的ながらも後世の『水滸伝』受容に影響を及ぼしたと考える。最後にその見解を示して本章を締めたい。

その影響とは『水滸伝』版本の動向である。『水滸伝』はその成立以降多くの版本が出版され、『忠義璇図』でも百二十回本の使用が確認できた。だが第四章で論じたように、乾隆年間末期には七十回本のみが流通することとなる。その大きな転換点となつたのが、『忠義璇図』の制作および『水滸伝』禁令の発布に通底する、乾隆期に朝廷が明示した『水滸伝』否定の姿勢ではないだろうか。最終的に七十回本のみが生き残つたのは、おそらく『忠義璇図』と同様に宋江を悪人として否定する内容であつたためと考えられる。

¹ 『忠義璇図』に関しては、謝碧霞『水滸戯曲二十種研究』（国立臺灣大學出版委員会、一九八一）一二四～一四七および二六四～三五七頁で詳しく論じられているほか、陳芳『乾隆时期北京剧坛研究』（文化艺术出版社、二〇〇一）第四章「乾隆时期北京之剧作家及其剧作」でも取り上げられている。

-
- 2 『古本戯曲叢刊九集』所収のテキスト以外にも異本がある。テキスト間の異同に関しては別の機会に論じたい。
 - 3 周祥鉦は字南珍、常熟の人、生没年不詳。鄒金生は字・出身地・生没年いずれも不詳。両者は『律呂正義後編』、『九宮大成南北詞宮譜』といった戯曲関連書を著している。
 - 4 允祿も音楽に精通しており、実際の制作にも深く関わった可能性が高い。小松謙「清朝宮廷大戯『鼎峙春秋』について——清朝宮廷における三国志劇——」（『中国文学報』第八十一冊、二〇一一）六二頁参照。
 - 5 もとは雑劇で序章や間章として挿入された短い場面を指す。
 - 6 『水滸伝』の諸版本に関しては、高島俊男『水滸伝の世界』（大修館書店、二三〇～二四四、二七三～二九九頁参照）。
 - 7 田虎討伐に登場する人物の設定は、百二十回本と文簡本で異なる。笠井直美「『水滸』における「対立」の構図」（『東洋文化研究所紀要』第百二十二号、一九九三）四四～五四頁参照。
 - 8 このように作中の悪人が作品末尾で地獄に落とされて責め苦を受けるという筋立ては、『楚漢春秋』など他の宮廷大戯にも見られる。おそらく宮中の創作現場において長編戯曲創作の典型の一つとして機能していたのだろう。
 - 9 陳芳注1前掲書三四三～三四四頁参照。

[付録表]

『忠義璇図』全二四〇齣について、題名・開始葉・『水滸伝』百二十回本での該当回（カッコは会話文中で言及されているだけのもの）・使用曲牌・『水滸伝』に見られない内容、を示したものである。異体字の一部や明らかな誤字は、常用体に直した。なお謝碧霞『水滸戯曲二十種研究』二六五～三三〇頁には、各齣の使用曲牌と概要が載せられているので、参照されたい。

本-出	題名	葉	水滸伝	曲牌	メモ
1-1	宣諸神發明衷旨	1		新水令／駐馬聽／沉醉東風／鴈兒落／得勝令／掛玉鈎／川撥棹／七弟兄／煞尾	
1-2	建大醮酬答昇平	6	1	賽觀音／好子樂／普天樂／千秋歲／尾聲	
1-3	騎牛對使露真言	10	1	點絳脣／混江龍／村里迓鼓／上馬嬌／勝葫蘆／山歌／柳葉兒／煞尾	
1-4	洪信放魔驚鼯鼠	16	1-2	甘州歌／又一體／駐雲飛／尾聲	
1-5	歸正傳副末開宗	21		玉女搖仙珮	副末開場
1-6	肆華筵端王稱慶	24	2	臨江仙／春色滿皇州／生查子／梁州新郎／節節高／尾聲	王都尉と端王が宴会
1-7	宋家庄太公訓子	29		遶池遊／又一體／集賢賓／又一體／琥珀猫兒墜／又一體／三臺令引／簇御林／又一體／尾聲	宋江一家・晁蓋
1-8	高俅上任積嫌伸	36	2	西地錦／五馬江兒水／一江風／皂羅袍／又一體／尾聲	
1-9	史進留賓新義洽	43	2	海棠春／步步嬌／品令／尹令／尾聲	
1-10	聞緝捕王進遊行	47	2	水底魚／又一體／搗練子／風入松／急三鎗／風入松／急三鎗／風入松／牽地錦襠／尾聲	
1-11	保村庄陳達被捉	56	2	點絳脣／滴溜子／六么令／四邊靜／大迓鼓	
1-12	守友誼史進結恩	59	2	六么令／又一體／牽地錦襠	
1-13	送錦襖因醉遺書	62	2	醉花陰／喜遷鶯／出隊子／乱地風／四門子／古水仙子	
1-14	賞中秋潰圍聚義	70	2-3	金錢花／七娘子前／七娘子後／玉芙蓉／朱奴兒／又一體／會河陽／越恁好／紅繡鞋／尾聲	
1-15	魯達揮拳除市虎	76	3	夜行船／粉孩兒／紅芍藥／耍孩兒／會河陽／縷縷金／越恁好／紅繡鞋	
1-16	朱勳怙勢緣石綱	85		卜算子引／六么姐兒／海棠令／尾聲	朱勳、花石綱の監督
1-17	七寶村留賓構禍	88	3-4	好事近／又一體／榴花好／尾聲	
1-18	魯提轄避難被緝	92	4	出隊子／桂枝香／北粉蝶兒／鬪鶴鶉／上小樓／煞尾	
1-19	遇勅敵虎將歸林	97		點絳脣／剔銀燈／摧柏／朱奴兒／玉嬌枝／玉山頽／尾聲	李忠と周通が戦つて、意気投合
1-20	長老修書遣醉客	102	4-5	點絳脣／混江龍／油葫蘆／天下樂／哪吒令／鵲踏枝／寄生草／煞尾	
1-21	桃家庄強逼姻牒	111		風馬兒／三臺令／梧桐樹集／浣溪紗／劉潑帽／秋夜月／金蓮子／紅衫兒／獅子序／東甌令／尾聲	周通が劉太公の娘に惚れる
1-22	小霸王駕幃被打	118	5	單調風雲會／駐馬聽／又一體／催拍／又一體／縷縷金／掉角兒序／又一體／駐雲飛	
1-23	花和尚虎寨懷金	127	5	縷縷金／又一體／越恁好／紅繡鞋／古輪臺／撲燈蛾／又一體／尾聲	
1-24	金主親征伐契丹	134		醉花陰／喜遷鶯／出隊子／乱地風／四門子／古水仙子／尾聲	金が遼征伐を開始

本-出	題名	葉	水滸伝	曲牌	メモ
2-1	金國主草地行圍	1		北一枝花／南一江風／北紅芍藥／南東甌令 ／北罵玉郎／南鮮三醒／北感皇恩／南大聖 樂／北採茶歌／南節節高／北收尾	金主、白狼を射る・ 宋と盟約
2-2	魯智深菜園就職	7	6	香柳娘／又一體／又一體／大迓鼓	
2-3	張氏行香拜東嶽	14		燕歸梁／新荷葉半／普天樂／福馬郎／玉芙 蓉／朝元令	張氏と林冲、東嶽廟 へ・高衙内見初める
2-4	智深拔樹出西墻	17	7	出隊子／又一體／排歌／又一體／撲燈蛾／ 皂羅袍	
2-5	太歲逼紅粉佳人	23	7	不是路／四邊靜／大迓鼓／尾聲	
2-6	教頭遇白虎太尉	26	7-8	海棠春／鎖南枝／又一體／又一體／又一體 ／太師引／繡帶兒／三學士	
2-7	楊府尹開恩發配	33	8	三疊引／啄木兒／三段子／歸朝歡／玉胞肚 ／又一體／尾聲	
2-8	陸虞侯行賄買差	38	8	金蕉葉／祝英臺／又一體／鷓鴣天	
2-9	花和尚陰謀救友	43		引／一枝花／牧羊關／烏夜啼／收尾	魯智深、野猪林で待 ち伏せ
2-10	野猪林仗義防奸	45	8-9	憶多嬌／鬪黑麻／憶多嬌	
2-11	遇狂客庄前比勢	48	9	刷子玉芙蓉／山芙蓉／普天帶芙蓉／朱奴插 芙蓉／劉潑帽芙蓉	
2-12	結管營配所揮金	54	9	玉胞肚／又一體／又一體／又一體／又一體	
2-13	草料場因火復仇	60	10-11	吳小四／步步嬌／江兒水／玉嬌枝／川撥棹 ／四邊靜／又一體／節節高／又一體／尾聲	
2-14	喬打扮名離隘口	68	11	二郎賺／黃鶯兒／又一體／簇御林／琥珀貓 兒墜／又一體	
2-15	投名狀林冲落草	74	11-12	燕歸梁／雁來紅／雙鸞〔涑鳥〕／又一體／ 又一體／又一體／榴花好／兩紅燈／又一體 ／朱奴插芙蓉／又一體／剔銀燈／尾聲	
2-16	賣寶刀楊志除兇	83	12	賞宮花／又一體／錦纏道／千秋歲／好事近 ／又一體／排歌／又一體	
2-17	閻婆惜傳情甌茗	92		一封羅／又一體／醉羅歌／又一體	張文遠と閻婆惜が出 会う
2-18	蔡夫人介壽稱觴	96	16	傳言玉女／翫仙燈／畫眉序／又一體／脫布 衫／小梁州／又一體／滴滴金／尾聲	
2-19	劉唐酣醉擒為賊	102	13-14	縷縷金／醉花陰／出隊子／刮地風／四門子 ／水仙子／尾聲	劉唐が酒を飲む場面
2-20	晁蓋貪財假認甥	111	14-15	駐馬聽／駐雲飛／駐馬聽／駐雲飛／黃鶯兒 ／尾聲	
2-21	訪故友煮酒談心	121	15	甘州歌／排歌／降黃龍／黃龍袞／尾聲	
2-22	巧聚會聯盟行劫	128	15-16	臨江仙引／孤飛雁／梁州序／催拍／一撮棹 ／尾聲	
2-23	黃泥崗上圖金帛	134	16-17	北粉蝶兒／好事近／石榴花／好事近／聞鶴 鶉／千秋歲／上小樓／越恁好／撲燈蛾／紅 繡鞋／撲燈蛾／尾聲	
2-24	銀嶽峯頭獻玉芝	149		北粉蝶兒／南好事近／北石榴花／南好事近 ／北鬪鶴鶉／南撲燈蛾／北上小樓／南撲燈 蛾／北尾聲	徽宗、艮岳で宴会

本-出	題名	葉	水滸伝	曲牌	メモ
3-1	魯達強投寶珠寺	1	(17)	解三醒／降黃龍／黃龍滾／又一體	魯智深、鄧龍と戦う
3-2	二龍山曹正賺關	6	17	燕歸梁半／縷縷金／解三醒／又一體／太平令／風入松／又一體／急三鎗／風入松／急三鎗／風入松	
3-3	黒三郎無心納妾	18		引／引／引／海棠沉醉／姐姐插海棠／撥棹入江水／玉枝帶六么／園林帶僥僥	宋江と閻婆借、結婚
3-4	幸知風何清領捉	23	17-18	金絡索／劉潑帽／東甌令／秋夜月／尾聲	
3-5	趁糾賭白勝差拏	30	18	辣薑湯／普賢歌／憶多嬌／鬪黑麻／粉蝶兒半／尾犯序／又一體／尾聲	
3-6	晁天王聞信明逃	37	18	新荷葉半／芙蓉紅／朱奴插芙蓉／普天紅／朱奴剔銀燈／朱奴帶緊纏／普天帶芙蓉／樂近秦娥／尾聲	
3-7	暗偷香蜂狂露相	45		霜蕉葉半／小桃紅／下山虎／山蕨楷／五韻美／蠻牌令／五般宜／江頭送別／江神子／尾聲	閻婆、張文遠と閻婆借の仲を公認
3-8	逸孤羣齊歸水泊	57	19	錦纏道／普天樂／又一體／古輪臺／又一體／尾聲	
3-9	明拒客蛙怒狀生	63	19-20	賀新郎／節節高／玉山供／山花子／大和佛／舞霓裳／紅繡鞋／意不盡	
3-10	閻氏放刁成怨鬼	69	21	引／引／粉孩兒／福馬郎／紅芍藥／耍孩兒／會河陽／縷縷金／越恁好／紅繡鞋／尾聲／大齋郎	
3-11	美髯公縱友逃刑	83	22	二集傍粧臺／不是路／棹角兒序／又一體／太師引／又一體／三學士／哭相思	
3-12	宋江避難投良友	91	23	滿庭芳半／菊花新半／好事近／千秋歲／尾聲	
3-13	景陽崗斃虎遇兄	95	23-24	水紅花／新水令／折桂令／雁兒落／沽美酒／太平令／鴛鴦煞／夜行船／又一體／鎖南枝／又一體／又一體／朝元令／又一體／玉胞肚／又一體	『義俠記』4・6齣を使用
3-14	孔家庄歡聯舊雨	105		風馬兒／又一體／奈子花／瑣窗寒／秋夜月／金蓮花／又一體／尾聲	宋江、柴進の所を去り孔家庄へ
3-15	潘金蓮癡情誘叔	111	24	縷縷金／菊花新／古輪臺／又一體／撲燈蛾／又一體／尾聲／五更轉／又一體	『義俠記』8齣を使用
3-16	武二郎出路別兄	120	24	秋蕊香半／風入松／又一體／急三鎗／風入松／急三鎗／風入松／哭相思	『義俠記』10齣を使用
3-17	為挑簾無意傳情	124	24	一江風／又一體／又一體／紅衲襖／皂羅袍	『義俠記』12齣を使用
3-18	裁衣料金蓮野合	130	24	懶畫眉／又一體／又一體／又一體／香柳娘／又一體／又一體	『義俠記』14齣を使用
3-19	拋梨籃武大拿奸	140	25	字字雙／太師引／又一體／三學士／又一體／秋夜月／又一體／東甌令／尾聲／玉胞肚／尾聲	
3-20	泉臺冤夢驚同氣	150	26	山坡羊／又一體／憶多嬌／賞宮花／又一體／又一體／又一體	『義俠記』17齣を使用
3-21	靈桌霜鋒獻並頭	155	26	解三醒／又一體／粉蝶兒前／粉蝶兒後／尾犯序／又一體／又一體／又一體／駐雲飛／又一體／哭相思	『義俠記』18齣を使用
3-22	武都頭孟州遣戍	161	27	賀聖朝／又一體／玉嬌枝／又一體／又一體／又一體	『義俠記』19齣を使用
3-23	團練四營商妙計	165	(20)	點絳脣／番竹馬	黃安、梁山泊へ進軍
3-24	軍師全勝奏奇功	167	20	醉太平／傾杯賞芙蓉／普天樂／朝天子／普天樂／朝天子／普天樂／朝天子／普天樂／朝天子／朝元令	

本-出	題名	葉	水滸伝	曲牌	メモ
4-1	水泊慶功伸燕賀	1		刷子序／山漁燈／尾聲	戦勝の宴
4-2	乍下車有心尋覺	4		鳳凰閣／逍遙樂半／雙令江兒水／又一體	花榮と劉高、仲悪い
4-3	投虎寨倭羅剖心	10	32	菊花新半／漁家傲／剔銀燈／破陣子／玉芙蓉／又一體／普天覺好事／尾聲	
4-4	王矮虎漁色無縁	18	32	女臨江前／女臨江後／紅衲襖／東甌令／劉潑帽／浣溪沙／東甌蓮／秋夜月／金蓮子／尾聲	
4-5	公廨故交欣促膝	26	33	小蓬萊前／小蓬萊後／啄木兒／三段子／歸朝歡／尾聲	
4-6	燈棚平地又生波	32	33	一枝花／貨郎兒一轉／二轉／三轉／四轉／五轉／六轉／七轉／八轉／九轉	
4-7	花榮義奪傷弓鳥	42	33	解袍歌／光光乍／尾聲	
4-8	熊氏潜勾脫餌魚	48	33	柳梢青／剔銀燈／又一體	
4-9	詭謀復護虎張三	52	(33)	粉孩兒／紅芍藥／會河陽／縷縷金／尾聲	宋江、清風山へ逃げる途中で捕まる
4-10	狡計併擒小李廣	56	33	一江風／駐馬聽／降黃龍／又一體／尾聲	
4-11	議救援暗離虎寨	62	(34)	破齊陣前／破齊陣後／四邊靜	燕順ら、宋江らを奪還する算段
4-12	明打劫計釋檻車	65	34	錦纏道／普天樂／朱奴兒／尾聲	
4-13	霹靂火興師搦戰	68	34	菊花新／舞霓裳／和佛兒／生查子引／好事近／尾聲	
4-14	清風山騙甲行權	73	34	點絳脣／新水令／步步嬌／折桂令／江兒水／雁兒落帶得勝令／僥僥令／收江南／園林好／沽美酒帶太平令／尾聲	
4-15	假秦明耀威縱火	81	(34)	清江引／風入松／六么令／風入松	偽秦明、暴れる
4-16	真統制負屈歸巢	85	34	一枝花／梁州第七／牧羊關／四塊玉／元鶴鳴／鳥夜啼／煞尾	
4-17	黃信來投除舊恨	93	35	賽觀音／人月圓／賽觀音／人月圓／玉芙蓉／朱奴兒／尾聲	
4-18	宋江作伐締新姻	99	35	趙皮鞋／又一體／秃廝兒／又一體／番山虎／俊孩兒／尾聲	
4-19	母夜叉當壚鳩客	106	27	數板／尾聲	
4-20	小李廣飛箭鮮圍	114	35	四邊靜／又一體／馱環着／駐馬聽／駐雲飛／攤破地錦花／皂羅袍／又一體／尾聲	
4-21	老管營惜士免刑	123	28	生查子／又一體／遶池遊前／宜春令／又一體	『義俠記』21齣を使用
4-22	新都頭獲兇刺配	128	35-36	六么令／十二紅／尾聲	
4-23	兩處人雄歸虎寨	133	35	玉嬌枝／普天樂／剔銀燈／普天樂／剔銀燈／普天樂／尾聲	
4-24	全彪驍傑展龍韜	138		北夜行船／銀漢浮槎／慶宣和／落梅風／風入松／撥不斷／離亭宴帶歇拍煞	梁山泊の好漢が武芸を披露

本-出	題名	葉	水滸伝	曲牌	メモ
5-1	梁山泊要劫宋江	1	36	園林好／又一體／江兒水／五供養／玉嬌枝／川撥棹／尾聲	
5-2	醉打蔣忠還舊業	6	29-30	數板／數板／吹腔／侷腔／耍孩兒／耍孩兒／耍孩兒／耍孩兒	
5-3	贈金薛永惹閒非	13	36-37	小桃紅／下山虎／五韻美／山麻楷／尾聲	
5-4	張橫大鬧潯陽渡	18	37	粉孩兒／紅芍藥／耍孩兒／會河陽／縷縷金／紅繡鞋／尾聲	
5-5	施恩重整快活林	25	30	東甌令／賀新郎／瑣窗寒／尾聲	
5-6	琵琶亭席上論交	29	38	柳梢青／石榴燈／千秋舞霓裳／花六么	
5-7	張都監綺席賺人	35	30	傳言玉女／降都春序／滴溜子／三段子	
5-8	飛雲浦橋邊喋血	40	30	駐馬聽／又一體／駐雲飛／又一體／剔銀燈	『義俠記』29齣を使用
5-9	鴛鴦樓夜試霜鋒	44	31	滿江紅／梁山新郎／節節高／又一體／尾聲／掉角兒序	『義俠記』30齣を使用
5-10	宋公明沉醉題詩	49	39	七娘子／錦纏道／普天樂／朱奴兒／尾聲	
5-11	曲猜詩謎開嚴鞫	54	39	賀聖朝／鎖南枝／孝順歌	
5-12	吳學究謀成五夜	60	39	水底魚兒／醉羅歌／羅袍帶封書／短拍帶長音／尾聲	
5-13	蜈蚣嶺窓前露醜	65	31-32	引／吹腔／點絳唇／水底魚／金錢花／水底魚／新腔／滴溜子／吹腔	
5-14	套私書太保回轅	74	39-40		
5-15	悟假篆軍師遣將	77		點絳唇／混江龍／油葫蘆／天下樂／寄生草／煞尾	吳用、諸將に命令
5-16	江州郡雙雄邁難	81	40	一江風／又一體／宜春令／尾聲	
5-17	劫法場羣雄會廟	89	40-41	四邊靜／又一體／一江風／月上海棠／園林好／江兒水／尾聲	
5-18	無為軍一炬報仇	96	41	駐雲飛／又一體／太平令／粉孩兒／紅芍藥／耍孩兒／撲燈蛾／會河陽／越恁好／尾聲	
5-19	梁山泊雙彪接母	105	42-43	天下樂／長拍／短拍／尾聲	
5-20	冒名剪徑誑金歸	109	43	耍孩兒／耍孩兒／耍孩兒／梆子腔／吹腔／畫眉序／梆子腔	
5-21	殺大蟲熱心報母	124	43	風入松／急三鎗／風入松／急三鎗／風入松	
5-22	李鬼暗算黑旋風	131	43	端正好／倘秀才／叨叨令／脫布衫／小梁州／快活三／朝天子／煞尾	
5-23	朱富麻翻青眼虎	138	43-44	八聲甘州／又一體／憾動山／急急令	
5-24	蕭奉先興師拒敵	144		點絳唇／混江龍／油葫蘆／天下樂／那吒令／鵲踏枝／寄生草／煞尾	遼の蕭奉先、対金迎撃を指示

本-出	題名	葉	水滸伝	曲牌	メモ
6-1	高唐州教演神兵	1		北粉蝶兒／好事近／北石榴花／好事近／北 閉鶴鶉／疊字令／尾聲	高廉が訓練
6-2	楊雄巧遇石三郎	5	44	光光乍／好事近／太平令／撲燈蛾／玉芙蓉 ／四邊靜／又一體／	
6-3	三家村聯盟偷盜	12		疏簾淡月／八聲甘州／又一體／尾聲	祝・扈・李が協議
6-4	惹狂蜂巧雲認義	15	44-45	小蓬萊後／桂枝香／又一體／羅袍歌／又一 體	
6-5	敦正氣酒肆訴情	24	45	引／水紅花／解三醒／水紅花／太師引／搗 練子／又一體／風入松／又一體／急三鎗／ 風入松／急三鎗／風入松	
6-6	行反問蘭房掉舌	31	45	海棠春／園林好／又一體／江兒水／又一體 ／五供養／玉嬌枝／川撥棹／尾聲	
6-7	真拿奸行兇破晚	35	45-46	水底魚／前腔／朱奴兒／前腔／一江風／前 腔／引／紅衲袄／引／賞宮花	
6-8	翠屏山對明心跡	42	46	山羊轉五更／山羊嵌五更／古輪臺／又一體 ／撲紅燈／又一體／尾聲／沽美酒帶太平令	
6-9	鼓上阜隻鷄起鬨	47	46	侷腔	
6-10	撲天雕一扎敗盟	60	47	燒夜香／瑣窗寒／梁州序／又一體／節節高 ／又一體／金錢花／馱環着／尾聲	
6-11	石楊問路投酒店	69	47	鎖南枝／又一體／又一體／朱奴兒／桂枝香 ／尾犯序／鮑老催／雙聲子／尾聲	
6-12	訪出路指明楊樹	76	47-48	新水令／步步嬌／折桂令／江兒水／雁兒落 ／僥僥令／收江南／園林好／沽美酒／尾聲 ／朝天子／普天樂／朝天子／普天樂	
6-13	毛太公匿虎反目	86	49	縷縷金／四邊靜／夜遊湖／水底魚／桃紅菊 ／僥僥令	
6-14	扈三娘落馬被擒	91	48	番竹馬／好事近／又一體／福馬郎／千秋歲 ／越恁好／紅繡鞋／剔銀燈／好孩兒／朱奴 兒	
6-15	鉄叫子送信成謀	98	49	單調風雲會／不是路／掉角兒序／又一體／ 大和佛／尾聲	
6-16	母大蟲劫牢拒捕	106	49	東甌令／風入松／秋夜月／風入松／黑麻序 ／尾聲	
6-17	病尉遲獻計歸巢	111	49-50	高陽臺／又一體／尾聲	
6-18	欒廷玉開門揖盜	116	50	駐馬聽／排歌／錦衣香／點絳脣／油葫蘆／ 鵲踏枝／青歌兒／寄生草／寄生草	
6-19	扮假官李應上山	124	50	錦天芳／傾盃賺／又一體／又一體／四邊靜 ／朱奴帶錦纏／尾聲	
6-20	踐舊約王英合卺	131	(50)	玉芙蓉／又一體／鮑老催／尾聲	
6-21	白秀英斂錢招禍	135	51	邊紅樓／黃鶯兒／縷縷金／又一體／梨花兒 ／清江引／撲燈蛾／光光乍／玉肚枝／又一 體	
6-22	雷都頭荷技行兇	145	51	山坡羊／又一體／水紅花／尾聲	
6-23	美髯公捨身救友	149	51	山東劉袞／臨江仙／梁州序／節節高／哭相 思／香柳娘／又一體	
6-24	幽燕路祇迓王師	156		看花回／綿搭絮／又一體／青山口／聖藥王 ／慶元貞／古竹馬／煞尾	蕭太后逃亡、燕京降 伏

本-出	題名	葉	水滸伝	曲牌	メモ
7-1	吳學究秋日離山	1		點絳脣／泣顏回／又一體／解三醒／又一體／尾聲	吳用と李逵、朱仝勸誘へ
7-2	地藏寺冤遇兇謀	5	51	降黃龍／又一體／黃龍袞／皂羅袍／玉嬌枝	
7-3	小衙内無辜受禍	11	51-52	好事近／千秋歲／好事近／紅芍藥／紅繡鞋／尾聲	
7-4	殷直閣怙勢亡身	17	52	秋夜雨／高陽臺／又一體／玉山頽／水紅花／江兒水／僥僥令	
7-5	黑旋風孤身報信	23	52	滴溜子／四塊玉／窳地錦襠／雙聲子／滴溜子／五馬江兒水	
7-6	高唐州三陣交兵	28	52-53	點絳脣／八聲甘州／黑麻序／風入松／引軍旗／風入松／又一體	
7-7	戴院長密訪仙踪	32	53	水底魚／勝如花／又一體／劉潑帽／東甌令／太師引／尾聲	
7-8	流白血真人被殺	40	53	新水令／步步嬌／折桂令／江兒水／雁兒落帶得勝令／僥僥令／收江南／園林好／沽美酒帶太平令	
7-9	駕黑雲李二遭殃	47	53	菊花新／風帖兒／普賢歌	
7-10	辭仙師逐伴下山	51	53	小桃紅／朱奴兒／玉芙蓉	
7-11	別老母贖路投店	53	54	粉蝶兒／柳梢青／剔銀燈／攤破地錦花	
7-12	撞賣技義結良明	56	54	福青歌／四邊靜	
7-13	三百神兵逢國手	58	54	剔銀燈／風入松／急三鎗／風入松／急三鎗／風入松／急三鎗／風入松／五馬江兒水	
7-14	紫宸朝元戎特薦	63	(54-55)	掛真兒／銀燈紅／又一體／傾盃賞芙蓉	呼延灼、直接聖旨を受け出立
7-15	延灼大排甲馬陣	66	55	榴花好／好事近／又一體／千秋歲／駐馬聽／好事近	
7-16	李俊劫奪轟天雷	73	55-56	六么令／喜還京／賽紅娘／夜行船序／醉翁子／錦衣香／尾聲	
7-17	時遷盜取雁翎甲	79	56	金雞叫／惜奴嬌／園林好／又一體／尹令／品令／豆葉黃／玉嬌枝／么令／江兒水／川撥棹／又一體／尾聲	
7-18	賺徐寧教鈎鎌鎗	86	56-57	窳地錦襠／太師引／東甌令／香柳娘／賽觀音／紅娘子／剔銀燈／玉芙蓉	
7-19	擒韓滔破連環馬	93	57	粉蝶兒／好事近／石榴花／福馬郎／鬪鶴鶉／千秋歲／撲燈蛾／好事近／撲燈蛾／越恁好／上小樓／清江引	
7-20	呼延灼失馬借兵	103	57	滴溜子／秋夜月／點絳脣／豹子令／小引／劉潑帽／水底魚／大趵鼓／水底魚／大趵鼓／風入松／又一體／甘州歌／排歌／風入松	
7-21	獨火星救兄投寨	113	57-58	山花子／剔銀燈／又一體／攤破地錦花／又一體／駐馬聽	
7-22	擒呼延賺城報怨	120	58	普天樂／朝天子／普天樂／朝天子／普天樂／朝天子／普天樂	
7-23	芒碭山作法飛烟	128	59	山花子／大和佛／舞霓裳／福馬郎／尾聲	
7-24	公孫勝降魔佈陣	132	60	出隊子／滴溜子／滴滴金／雙令江兒水	

本-出	題名	葉	水滸伝	曲牌	メモ
8-1	曾頭市悞傷藥箭	1	60	夜行船／風入松／八聲甘州／又一體／朱奴兒／江頭送別／撼動山	
8-2	智多星算命題詩	8	61	賀聖朝引／鎖南枝／園林好／江兒水／玉嬌枝／哭相思／駐馬聽／雁來紅／山歌／剔銀燈	
8-3	羣虎勸降空進酒	18	62	八聲甘州／步步嬌／江兒水／又一體／川撥棹／尾聲	
8-4	回車報信欲攀花	24	62	六么令／又一體／千秋歲／一江風／香柳娘／又一體／	
8-5	逐燕青乘機出首	29		浣溪沙／秋夜月／金蓮子／東甌令／劉潑帽／又一體／臨江仙半／香遍滿	李固と賈氏、燕青を追い払う。梁中書に盧俊義を訴える
8-6	送俠友握手為歡	35	62	節節高／又一體／尾聲	
8-7	背良言回家被捉	37	62	駐雲飛／憶多嬌／鬪黑麻／川潑棹／豆葉黃／哭相思／月上海棠	
8-8	梁中書逼招下獄	41	62	紫蘇丸／玉胞肚	
8-9	盧俊義刺配登程	43	62	皂羅袍／好姐姐／東甌令／山坡羊／水紅花／山坡羊／水底魚／風入松／四邊靜／風入松	
8-10	石秀跳楼劫法場	54	62-63	醉羅歌／鬥鶴鶉／縷縷金／紫花兒序／僥僥令／調笑令／縷縷金	
8-11	宋江大戰槐樹坡	59	63	四邊靜／甘州歌／好事近／又一體／甘州歌	
8-12	王定求援宰相府	66	63-64	六么令／天下樂／三學士／卜算子／神仗兒／滴溜子／鮑老催／又一體／滴滴金／又一體	
8-13	燈前潰陣獲三雄	75	64	排歌／古輪臺／尾犯序／剔銀燈／朱奴兒	
8-14	索超被陷勸歸降	82	64-65	馱環着／又一體／越恁好	
8-15	張順渡江逢夜劫	85	65	駐馬聽／又一體／撲燈蛾／喜漁燈／又一體	
8-16	截江鬼攬金入馬	91	65	嬾畫眉／又一體／又一體／又一體／刮鼓令／大趵鼓／又一體／尾聲	
8-17	地靈星妙手回春	101	65	天下樂／勝葫蘆／光光乍／蠟梅花	
8-18	金沙灘軍師出令	104	66	粉孩兒／紅芍藥／耍孩兒／會河陽／縷縷金／越恁好／紅繡鞋／尾聲	
8-19	翠雲樓元夕下城	112	66-67	福馬郎／水底魚／普天樂／風入松／好事近／急三鎗／風入松／好事近／大和佛／撲燈蛾／舞霓裳	
8-20	李瑞蘭出首忘恩	121	69	海棠春／轉山子／甘州歌／沉醉東風／六么令／好姐姐／玉胞肚／三月海棠／玉嬌枝／尾聲	
8-21	顧大嫂報信探監	129	69	宜春令／又一體／搗白練／紅芍藥	
8-22	九紋龍悞期越獄	133	69	好姐姐／風入松／急三鎗／風入松／急三鎗／水底魚／風入松／縷縷金／四邊靜／普天樂／朝天子／普天樂／朱奴兒	
8-23	雙鎗將被獲獻城	142	69-70	七娘子／芙蓉樂／芙蓉燈／芙蓉紅／芙蓉猫兒墜／普門大士	
8-24	沒羽箭逢人飛石	148	70	好事近／點絳脣／混江龍／油葫蘆／天下樂／遊四門／耍孩兒／青歌兒／煞尾	

本-出	題名	葉	水滸伝	曲牌	メモ
9-1	田虎拜師僭稱王	1		點絳唇／滾綉毬／離經歌／醉太平	田虎、劉鐵嘴を軍師に招く
9-2	吳用運糧施妙計	6	70	步蟾宮／纏枝花／賀新郎／節節高	
9-3	一清作法顯神通	9	70	畫眉序／三段子／滴溜子／歸朝歡	
9-4	沒羽貪功却被擒	12	70	滴滴金／雙聲子／鮑老催／五馬江兒水	
9-5	梁山泊羣虎過関	16	73-74	駐馬聽／又一體／舞霓裳	
9-6	泰安州燕青打擂	22	74	四邊靜／剔銀燈／紅繡鞋／尾聲	
9-7	水滸寨宋江下山	25	71-72	點絳唇／畫眉帶一封	
9-8	柴進簪花遊秘殿	28	72	出隊神仗／琢木二仙歌	
9-9	御樓賜酒慶元宵	32	72	啄木賓／三段催／歸朝出隊／黃龍捧燈月／滴金樓	
9-10	李逵縱火鬧皇城	37	72	臘梅花／本宮賺／解三醒／又一體／劍溪令半／傍粧臺／大齋郎／錦衣香／漿水令／尾	
9-11	宣鳳詔招安水泊	47	82	柳梢青／駐馬聽／駐雲飛／又一體／舞霓裳／又一體／紅繡鞋／尾聲	
9-12	過龍樓齊效山呼	53	82	點絳唇／一枝花／梁州第七／九轉貨郎兒第一轉／二轉／三轉／四轉／五轉／六轉／七轉／八轉／九轉／收尾	
9-13	宋江分兵期滅賊	61	91,93	點絳唇／又一體／四邊靜／又一體／尾聲	
9-14	急交絳瓊英飛石	65	97-98	新水令／駐馬聽／沉醉東風／鴈兒落／得勝令／收江南／沽美酒／太平令	
9-15	乍比勢全羽成親	71	98	西地錦／降黃龍／黃龍滾／神仗兒／畫眉序／鮑老催／下小樓／尾聲	
9-16	宋江奏捷平河北	77	100	北粉蝶兒／南好事近／北石榴花／南好事近／北鬥鶴鶉／南撲燈蛾／北尾聲	
9-17	王慶興師起大房	83	(105)	菊花心／又一體／好事近／千秋歲／越恁好／紅綉鞋／尾聲	王慶、防戦の手配
9-18	朱武大破六花陣	87	107	鬥鶴鶉／紫花兒序／調笑令／禿廝兒／聖藥王／煞尾	
9-19	一清作法取西京	91	108	綿搭絮／水底魚兒／山桃紅／豹子令	公孫勝が霧を起こす
9-20	王慶渡江逢李俊	94	109	哭歧婆／又一體／窄地錦襠／又一體／蠟梅花／曉行序／尾聲	
9-21	清溪洞方臘稱王	100		秋蕊香／海棠春／又一體／錦堂月／醉翁子／又一體／僂僂令／又一體／尾聲	方臘の誕生日、部下を紹介
9-22	瓜歩江張順得采	105	111	醉花陰／興隆引／南小引／又一體／又一體／又一體／尾聲	
9-23	假送糧引水入船	112	111	七娘子／朱奴兒／醉太平／又一體	
9-24	真行祭乘風縱火	116	114-115	園林好／又一體／江兒水／又一體／川撥棹／又一體／尾聲	

本-出	題名	葉	水滸伝	曲牌	メモ
10-1	張順魂捉方天定	1	115-116	點絳脣／混江龍／六么遍／後庭花／賺煞	
10-2	時遷火熬昱嶺關	7	118	北一枝花／南一江風／北罵玉郎／南一江風／北感皇恩／南節節高／北採茶歌／南節節高／北尾聲	
10-3	童宣撫平賊獻俘	13	119	錦纏道／朝中措／四邊靜／又一體／尾聲	
10-4	宋公明回朝受職	18	119	北點絳脣／點絳脣／滴溜子／神仗兒	
10-5	借賞花高楊設計	21	120	高陽臺引／六么令／高陽臺／又一體／尾聲	
10-6	驚賜酒宋李含冤	25	120	粉孩兒／紅芍藥／鼓板賺／耍孩兒／會河陽／縷縷金／越恁好／尾聲	
10-7	蓼兒洼舍生取義	31	120	端正好／滾繡毬／叨叨令／脫布衫／小梁州／又一體／朝天子／清江引	
10-8	芙蓉城鬼使神差	36		北夜行船／北風入松／北喬木查／北沉醉東風／北煞尾	十殿閻君、宋江ら108人を連行するよう命じる
10-9	領鬼卒攝魄勾魂	40		小引／又一體／翫仙燈引／獅子序／玉女步瑞雲引／太平歌／賞宮花／尾聲	酈都使者、宋江らを捕まえる
10-10	東嶽殿狼群對簿	44		一枝花／梁州第七／梧桐樹／元鶴鳴／隔尾／四塊玉／罵玉郎／感皇恩／採茶歌／三煞／二煞／收尾	東嶽大帝と十殿閻君、宋江らを裁く
10-11	河北郡二忠盡節	56		駐馬聽	何灌親子、都門を死守。幹離不、舌を巻く。
10-12	留車駕李綱守死	58		菊花新／柳梢青／好事近／又一體／縷縷金／尾聲	李綱、都城を死守。幹離不、舌を巻く。
10-13	郭道人恃邪演法	63		水底魚兒／引軍旗／又一體／尾聲	郭京、邪法を演じる
10-14	楚江王按罪加刑	67		採蓮船引／孝金經／又一體／南枝映水清／尾聲	楚江王（二殿閻君）、武大ら・宋江・晁蓋組を裁く。
10-15	欽宗車駕幸青城	71		駐雲飛／又一體／粉孩兒／哭相思／紅芍藥／耍孩兒／會河陽／縷縷金	張叔夜、金軍を一時撃退。郭京、逃走。欽宗、降伏に出る。
10-16	地府刀山昭白日	79		慶青春引／二郎神／高陽臺／又一體／尾聲	宋帝王（三殿閻君）、漁師組・張文遠と閻婆惜・宋江を裁く
10-17	李若水噴血盡忠	84		小女冠子引／解三醒／太師引／尾聲	李若水、幹離不と粘没喝を罵って殺される
10-18	四殿勘奸嚴設獄	89		北新水令／北雁兒落／得勝令／川潑棹／北清江引	四殿閻君、潘巧雲と裴如海・軍人組・宋江を裁く
10-19	張叔夜白溝致命	93		沉醉東風／步步嬌／園林好／江兒水／川潑棹／又一體／尾聲	張叔夜、国境の河で憤死
10-20	地獄見六賊伏法	98		點絳脣／混江龍／油葫蘆／天下樂／那吒令／鶻踏枝／寄生草／煞尾	七殿閻君、その他加担者・六賊を裁く
10-21	大金朝鮮甲賞功	105		北醉花陰／出隊子／刮地風／四門子／古水仙子／尾聲	幹離不と粘没喝、凱旋して表彰される
10-22	十殿主轉輪運世	109		憶秦娥引／山坡羊／尾聲	轉輪王（十殿閻君）、忠臣を善門に、梁山泊人を悪門に送る
10-23	兜率宮羣仙會宴	112		粉蝶兒／醉春風／石榴花／鬥鶴鶉／煞尾	忠臣ら、天宮で歓待される
10-24	靈霄闕特旨旌忠	115		仙宮入雙角新水令／南步步嬌／北折桂令／南江兒水／北雁兒落帶得勝令／南僥僥令／北收江南／南園林好／北沽美酒帶太平令／南尾聲	玉皇大帝、真の忠義を表明

第六章：『蕩寇志』——『水滸伝』の鏡

はじめに

清代後期の咸豊年間に『蕩寇志』（別名『結水滸伝』）という『水滸伝』の続編小説が刊行された。『水滸伝』の続書は、清代前期の康熙年間ごろまでは『水滸後伝』や『後水滸伝』が著されたが、乾隆年間以降は『水滸伝』に対する政府側の対応が厳しくなったこともあり、目立った作品は創られなくなった。『蕩寇志』は久しぶりに創作された続書となる。

『蕩寇志』は短期間のうちにかなり頻繁に版を重ねた。時期が現在と比較的近いという要因もあり、現在相当数の版本が残っている¹。この事情から考えるに、『蕩寇志』は多くの人々に読まれたと考えられる。清代において『水滸伝』は厳しく出版を制限されたが、その状況下でも『水滸伝』を代表とする梁山泊の好漢の物語が人々の間で広く親しまれていたことを傍証することになるだろう。

ただし続書とは言っても、『蕩寇志』は、『水滸伝』の内容をそのまま継承して発展させた『水滸後伝』や『後水滸伝』とは性質が大きく異なっている。『蕩寇志』は『水滸伝』を完全に否定する目的で書かれたのである。『蕩寇志』において、主人公は陳希真という真の忠義を備えた人物であり、宋江ら梁山泊の一〇八人は彼と敵対する極悪人として描かれる。そして最終的には、陳希真や彼が仕える朝廷の將軍張叔夜などの手によって、一〇八人全員が悲惨な最期を遂げることになる。

このような内容は、作者兪万春（一七九四～一八四九）の『水滸伝』見解に大きく負っている。兪万春は『水滸伝』の内容に強い不満を抱いていた。さらに『水滸伝』で描かれる一〇八人が人々に好意的に受け入れられていることに強い憤りを感じていた。そこで宋江らを悪人と改め、一〇八人全員が成敗される内容の続書を創作したのである。

このような出版の経緯から、『蕩寇志』は反動的な小説と見なされ、あまり高い評価を得てこなかった。特に『水滸伝』を民衆の反抗精神を巧みに表現した進歩的な作品として高く評価する観点から見れば、時代に逆行する粗悪な作品と見なされてきた²。さらに、太平天国の乱の際に政府側が反乱撲滅の目的で積極的にその出版を後押しした事情も考慮すると、出版を厳しく規制された『水滸伝』とは全く正反対の価値をもつプロパガンダ作品として受け入れられたことは想像に難くない。

しかし、「反動的な小説」という一言で『蕩寇志』の性質をまとめてしまうのは、先入観にとらわれた見解という感が否めない。確かに、英雄として親しんでいた人物が全く正反対の極悪人として描かれているのを見ると、強い反発を感じてしまうのは無理からぬことであろう。だが現在相当数の版本が残っていることも事実である。時期的な要因や政府側の積極的な肩入れを考慮するにしても、多くの人々がそれなりに『蕩寇志』を受け入れたという事実は否定しようがない。

ならば『蕩寇志』を単に反動的なプロパガンダ作品とのみ捉えるのでは不十分ではないだろうか。

本稿は、『蕩寇志』がどのように清代後期以降の人々に読まれたのかを探るものである。まずは『蕩寇志』の構成、作者俞万春の創作意図、および出版時の環境を、先行研究を踏まえながら整理する。そのうえで、反動的な小説という見方にとらわれることなく、『蕩寇志』を詳細に分析することでその性質を検討してみたい。

第一節、『水滸伝』七十回本

俞万春が生きた清代後期、『水滸伝』を取り巻く環境はかなり特殊であった。第四章で述べたように、清代後期には『水滸伝』といえば七十回本のみを指すようになっていた。また後で詳述するように、俞万春は七十回本『水滸伝』の続編というかたちで『蕩寇志』を著している。

そこで『蕩寇志』の創作について論じる前に、『水滸伝』七十回本とこれを創作した金聖嘆の見解を整理しておきたい。なお七十回本のテキストは貫華堂本を影印した『第五才子書施耐庵水滸伝』（中華書局、一九七五）を用いた。

七十回本の特徴は、まず他の版本すなわち忠義系『水滸伝』に見られる梁山泊集結後の部分を削除したことにある。これについて、金聖嘆は次のように説明している。

施耐庵傳宋江、而題其書曰水滸、惡之至、逆之至、不與同中國也。而後世不知何等好亂之徒、乃謬加忠義之目。嗚呼、忠義而在水滸乎哉。

施耐庵が宋江の事跡を描き、その書の題を「水滸」としたのは、それを甚だ憎み、甚だ退け、同じ中国には共存できないことを表明したかったからである³。それなのに後世の物好きな輩が、なんと「忠義」の名を誤って加えてしまった。ああ、忠義は水滸にあるだろうか。（巻一「序二」）

一部書七十回、可謂大鋪排。此一回、可謂大結束。讀之正如千里群龍、一齊入海、更無絲毫未了之憾。笑殺羅貫中橫添狗尾、徒見其醜也。

この書の七十回は、見事に配置されていると言えよう。そしてこの第七十回は、大団円と言えよう。これを読めば千里に連なる龍たちが一斉に海に入るように、未完であるという感覚は全くなくなる。笑うべきは、羅貫中が妄りに蛇足を付け加えて、いたずらにその醜態を晒したことである。(第七十回総評)

金聖嘆は、宋江ら一〇八人が梁山泊に集結するまでの部分は施耐庵が著し、その後の朝廷と関わる部分は羅貫中の続作と判断を下した。そのうえで、施耐庵は盗賊行為を戒める目的で創作したのに対し、羅貫中はその創作意図を全く理解せずに、あろうことか全く正反対の忠義の物語を付け加えてしまった、と断じた。

それまで『水滸伝』の作者に関しては、施耐庵と羅貫中のどちらか一方あるいは両者が『水滸伝』全編の創作に関わっていると見なされていた。例えば高儒『百川書志』には「施耐庵的本、羅貫中編次」と記されている。石渠閣補刊本には「施耐庵集撰」「羅貫中纂脩」の二行が見られる⁴。また李卓吾は『忠義水滸伝序』で「施羅二公」と記している。これを踏まえると、金聖嘆は梁山泊集結前後の物語にそれぞれ著作者を定めることによって、二つの部分の性質を切り離したと言えよう。

次に、金聖嘆は宋江の人物像を、忠義を口にしながら腹の中では自分の利害を常に計算している狡猾な人物として描いた。具体的には、作中で宋江が忠義を口にする場面で上辺だけの偽りであることを評で指摘したり、計算高い人物であるように文章を改めたりしている。

例えば第五十七回、宋江は捕まえた討伐軍の將軍呼延灼に仲間入りを勧めるに際して、

等朝廷見用、受了招安、那時盡忠報國、未為晚矣。

朝廷に用いられるのを待ち、招安をうけて、それから忠義で国に報いても、遅くはないでしょう。

と、朝廷へ報いる忠誠心があることを主張する。だが金聖嘆はこの発言に対して、

仍作好言、寫宋江權詐可笑。

やはり口当たりのよい発言をしている、宋江の詐欺ぶりを描いていておかしい。

という小字双行の評を加えている。この「權詐」という語は、金聖嘆が宋江

を批判する常套句である⁵。

また第五十九回、梁山泊の頭領晁蓋は曾頭市からの挑発に憤り、その征伐に赴くが、流れ矢に当たって命を落としてしまう。その後宋江は梁山泊の頭領の座を引き継ぐことになる。これに先立つ祝家荘や高唐州への出兵に際しては、晁蓋が自ら指揮をとると言い出したのを宋江が引き止めていたが、この曾頭市に限って宋江は晁蓋を引き止めていない。

晁蓋聽罷、心中大怒道、「這畜生怎敢如此無禮。我須親自走一遭、不捉得這畜生、誓不回山。我只點五千人馬、請啓二十箇頭領相助下山。其餘都和宋公明保守山寨。」

晁蓋は報告を聞くと、激怒して言った。「この畜生はなんてこんなに無礼なのだ。私自ら出向いて、その畜生どもを捕まえられなければ、決して山には戻るまい。五千の軍勢のみに号令をかけ、二十名の頭領に手伝ってもらって山を下りるとしよう。その他の者は宋江と共に山寨を守るように。」

だが忠義系『水滸伝』を見ると、宋江はこの場面でも晁蓋を引き止めている。

晁蓋聽了戴宗說罷、心中大怒道、「這畜生怎敢如此無禮。我須親自走一遭、不捉的此輩、誓不回山。」宋江道、「哥哥是山寨之主、不可輕動、小弟愿往。」晁蓋道、「不是我要奪你的功榮、你下山多遍了、廝殺勞困。我今替你走一遭。下次有事、却是賢弟去。」宋江苦諫不聽。晁蓋忿怒、便點起五千人馬、請啓二十個頭領相助下山。其餘都和宋公明保守山寨。

晁蓋は戴宗の報告を聞くと、激怒して言った。「この畜生はなんてこんなに無礼なのだ。私自ら出向いて、そいつらを捕まえられなければ、決して山には戻るまい。」宋江は言った。「兄貴は山寨の主なのでですから、軽々しく動いてはなりません、私が行きます。」晁蓋は言った。「あなたの功績を奪うわけではないが、あなたはこれまで何度も山を下り、何度も戦って疲れているでしょう。今回は代わりに私が行くとしよう。次に何か起こったら、その時はあなたに行ってもらいます。」宋江は強く諫めたが聞き入れられなかった。晁蓋はいきりたって、五千の軍勢に号令をかけ、二十人の頭領に加勢を頼んで山を下りた。その他の頭領は宋江と山寨を守ることとなった。(容與堂本⁶第六十回)

つまり金聖嘆は本文を書き換えてまで宋江を悪人として描いたのである。しかも金聖嘆は、晁蓋を引き止めなかったのは宋江の深謀であると評で指摘する。

若夫宋江之心、固晁蓋去而夷然、晁蓋死而夷然也。故於打祝家則勸、打高唐則勸、打青州則勸、打華州則勸、則可知其打曾頭市之必勸也。然而作者於

前之勸則如不勝書、於後之勸則直削之者、書之以著其惡、削之以定其罪也。

そもそも宋江の心は、とうに晁蓋を離れて平然としていたのであり、晁蓋が死んで平然となったのである。だから祝家荘を討伐しようとした時には引き止め、高唐州を討伐しようとした時には引き止め、青州を討伐しようとした時には引き止め、華州を討伐しようとした時には引き止めたのであるから、曾頭市を討伐しようとした時も引き止めるであろうと予測できる。しかし作者が先には引き止めることを数えきれないほど記したにもかかわらず、後の引き止めは削ったのは、先の引き止めに記すことで宋江の悪を明らかにし、後の引き止めに削ることで宋江の罪を定めたからである。

このように、金聖嘆は本文の書き換えと評を駆使して、宋江を徹底的に悪い人物として描いたのである。

さらに、題目から「忠義」を外した。それまでの『水滸伝』は、例えば容與堂本の題名は「李卓吾先生批評忠義水滸伝」、百二十回本の題名は「袁無涯刊出像評点忠義水滸全書」というように、「忠義」が題目に付けられるのが常であった。金聖嘆はこれを、

後世之人不察於此、而哀然於其外史、冠之以忠義之名、而又從而節節稱嘆之。嗚呼、彼何人斯、毋乃有亂逆之心矣夫。

後世の者は『宋史』の宋江に関する記述が盗賊を戒めるためであることを理解せず、その他の野史をかき集めて、それに「忠義」の名を冠し、さらにその一節一節に称賛を惜しまない。ああ、これでは誰もが反逆する心を持ってしまうのではないか。(巻二)

と述べ、盗賊や反乱などの悪事が「忠義」の名目によって美化されていることに強い不満を示している。

要するに七十回本は、既存の忠義系『水滸伝』から「忠義」という要素を完全に排除するために創作されたものである。

ただし一つ注意すべきなのは、金聖嘆は忠義ではないという前提の下で『水滸伝』を高く評価していることである。例えば、李逵や魯智深のような直情的な人物に対して、金聖嘆は絶賛を惜しまない。

李逵是上上人物、寫得真是一片天真爛漫到底。看他意思、便是山泊中一百七人、無一個入得他眼。

李逵は上上の人物で、まさに天真爛漫が徹底しているように描かれている。その心を見ると、たとえ梁山泊の一〇七人でも、一人もその眼中には入らない。(巻三「読第五才子書法」)

このように多くの好漢を肯定的に評価している点は、以下で取り上げる兪万春とは大きく異なっている。

第二節、『蕩寇志』作者・構成・内容

冒頭で述べたように、『蕩寇志』は反動的な小説という見解がこれまで支配的であった。それではどのような点が反動的と評されているのか。以下先行研究を踏まえながら、『蕩寇志』の基本的な内容を確認していきたい。

まずは作者について見ていく。兪万春は、字は仲華、号は忽来道人。地方官吏の子として生まれた。科挙では秀才にすらなれなかったが、父に従って官府の仕事をしていた。その業績の中で、兪万春の基本的な考え方が窺える出来事が、その子兪龍光によって記されている。

道光辛卯壬辰間、粵東瑤民之變、先君隨先大父任、負羽從戎。

道光十一から十二年（1831～32）、広東で瑤族が反乱を起こした際、亡父は亡祖父の任務に従い、戦闘に参加した。

兪万春は地方で起きた反乱に対し、自ら出陣することで鎮圧に関わった。ここから推測するに、兪万春は清朝政府による秩序の維持に尽力したと言ってよいだろう。

『蕩寇志』の制作については、兪万春が自ら「蕩寇志縁起」⁸に記している。これによると、嘉慶十一年（一八〇五）兪万春が十三才のときに見た夢が契機となっている。そしてほぼ時を同じくして施耐庵の著した『水滸伝』（すなわち七十回本）を読み、執筆を決意した。実際の執筆は、道光六年（一八二六）から道光二十七年（一八四七）まで二十年以上の歳月をかけて行われた。つまり、『蕩寇志』は兪万春が生涯をかけて著した作品と言える。ただし兪万春は細かい修正を加えることなく、道光二十九年（一八四九）に亡くなってしまった⁹。『蕩寇志』はその後、子や友人によって修正が施されたうえで、咸豊三年（一八五三）に出版された。

このように兪万春が心血を注いで創作した『蕩寇志』は、七十回本の続編として書かれている。第四章で検証したように、当時『水滸伝』が七十回本のみとなっていた事情を踏まえると、当然と言えるだろう。それでも兪万春は『蕩寇志』が七十回本『水滸伝』の正統な続編であることを示すために、構成面でいくつか目に見えるかたちの工夫を施している。

その第一点は、物語の前の部分にある。『蕩寇志』では物語の前に、兪万春が簡潔に『水滸伝』と自分の作品について述べている箇所がある。

縁施耐庵先生水滸傳、並不以宋江爲忠義。眾位只須看他一路筆意、無一字不描寫宋江的奸惡。其所以稱他忠義者、正爲口裏忠義、心裏強盜、愈形出大奸大惡也。聖歎先生批得明明白白、「忠於何在、義於何在。」總而言之、既是忠義、必不做強盜。既是強盜、必不算忠義。乃有羅貫中者、忽撰出一部後水滸來、竟說得宋江是真忠真義。

そもそも施耐庵先生が著した『水滸伝』は、決して宋江を忠義とはしていない。みなさんはその筆遣いを少しでも見れば、一字として宋江を悪人として描いていない箇所はないことが分かるだろう。彼を忠義と言っているのは、実は口では「忠義」と言いながら心は強盗であるように、その酷い奸悪ぶりをより深く描くためである。金聖嘆先生はその点を、「どこに忠があるのか、どこに義があるのか。」と見事に批評している。つまり、忠義であるならば盗賊になるはずはないし、盗賊であるならば忠義とはとても言えない。ところが羅貫中という者が、突然『後水滸』を捏造し、なんと宋江は真の忠義であると言い出してしまった。

兪万春は宋江ら梁山泊の好漢の物語について、『水滸伝』と『後水滸』の二つにわけて論じている。まず施耐庵が『水滸伝』を著した目的は、宋江は忠義ではなく悪人であることを表明するためと説明する。一方羅貫中はその深遠な創作意図を理解していないどころか、逆に誤解して宋江を忠義とする『後水滸』を加えてしまったと述べる。この兪万春の主張は、一見して分かるように、金聖嘆が七十回本を創作した際に加えた説明をほぼそのまま踏襲している。

第二点は、作品全体の構成に反映されている。七十回本『水滸伝』は序章に相当する「楔子」と七十回分の物語から構成されている。『蕩寇志』ではこれに対応して、第七十一回から第一百四十回までの七十回と、「結子」という結びで構成される。よって七十回本『水滸伝』と『蕩寇志』を並べると、きれいな対称を示すようになる。

第三点は、物語の最末尾に表れている。七十回本『水滸伝』は、他の版本と異なり、副将の盧俊義が自分以外の一〇七人の好漢が皆処刑されるという不吉な夢を見ることで終わるが、その末尾に二首の詩が配されている。

第一首：太平天子当中坐、清慎官員四海分。

但見肥羊寧父老、不聞嘶馬動將軍。

叨承禮樂為家世、欲以謳歌寄快文。

不學東南無諱日、卻吟西北有浮雲。

第二首：大抵為人士一丘、百年若箇得齊頭。

完租安穩尊於帝、負曝奇溫勝若裘。
子健高才空號虎、莊生放達以為牛。
夜寒薄醉搖柔翰、語不驚人也便休。

一方『蕩寇志』の「結子」は、作者兪万春が作品を総括する見解を示して終わる。そして末尾には二首の詩が書かれている。

第一首：續貂著集行於世、我道賢奸太不分。
只有朝廷除巨寇、那堪盜賊統官軍。
翻將偽術為真跡、未察前因說後文。
一夢雷霆今已覺、敢將柔管寫風雲。

第二首：雷霆神將列圓邱、為輔天朝偶出頭。
怒奮娉婷開甲冑、功收伯仲紹箕裘。
命征師到如擒賊、奏凱歌回頌放牛。
遊戲鋪張多拙筆、但明國紀寫天麻。

注目すべきは両者の韻字である。どちらも韻字に、第一首では文韻に属する「分・軍・文・雲」、第二首では尤韻に属する「丘（邱）・頭・裘・牛・休（麻）」を用いている。第二首の最後の「休」のみ「尸」が付いている点を寛容に見るならば、『蕩寇志』は七十回本末尾の詩に次韻しているのである（「丘」と「邱」は異体字の関係）。

このように七十回本を強く意識して創られた『蕩寇志』は、内容の面では七十回本よりもさらに過激になっている。七十回本では、宋江は忠義を騙る悪人であったが、他の好漢は盗賊という点を除けば概ね高く評価されていた。特に李逵や魯智深のような直情的な人物は非常に肯定的に捉えられていた。

これに対して、『蕩寇志』における宋江ら一〇八人は、いずれも極悪人として描かれている。彼らは積極的に梁山泊近辺の州や県を攻撃し、占領して複数の拠点を構えるとともに、子女や金品を略奪する。

各處倉庫錢糧、都打劫一空、搶擄子女頭口、不計其數、都搬回梁山泊。

各所の倉庫の金品や食料を全て略奪し、女子どもや家畜を数えきれないほど奪って、梁山泊へ連れていった。（第七十一回）

兪万春はこの箇所「此其所謂替天行道。（これこそが彼らのいわゆる「天に替わって道を行う」なのである。）」という評を加えることにより、梁山泊の有名な指針の実態が悪事の実行にはかならないことを理解するよう読者に促している。

梁山泊の一〇八人の悪逆無道な行動は、物語の進展とともにより残虐な性格を帯びるようになっていく。例えば一度は占領しながらも官軍に取り返された嘉祥県と南旺営を再び奪い取った際には、住民を皆殺しにするという極めて残虐な報復を行なっている。

可憐那兩處的軍民，不論老幼男女，直殺得雞犬不留一個。……自此以後，梁山兵馬每破了城池，常洗滌百姓，實是從這一回開手。

憐れなことに、その二箇所の軍民は、老若男女問わず皆殺しにされ、鶏や犬が一匹も残らぬほどであった。……これから後、梁山泊の軍勢は城を攻略するごとに民衆を皆殺しにしたが、それはここから始まった。)(第八十一回)

彼らの非道ぶりは、別の悪人によっても増幅される。『蕩寇志』では宋江らに協力する者が現れるのだが、彼らも一〇八人に劣らぬ悪人として描かれる。例えば、塩山の首領である施威は、悪事を平然と行う凶悪な人物として描かれる。

因酔後強姦他嫂子、他哥哥叫人拿他、他索性把哥哥都做手了、逃來落草。

酒に酔って兄嫁を強姦し、兄が人を呼んで捕まえようとしたところ、逆に躊躇いもせず兄もろとも殺してしまい、逃亡して盗賊になった。(第七十一回)

さらに、宋江らは官軍による討伐の勢いが激しくなって状況が徐々に不利になっていくと、高俅や蔡京といった奸臣とも内通するようになる。賄賂を送ることにより、自分達の都合のよいように朝廷内の言論を誘導しようと企んでいく。

つまり『蕩寇志』における宋江ら一〇八人は、自分達が悪人であるのみならず、他の悪党とも連携する狡猾さを見せる。これにより読者の目には、一〇八人は同情の余地のない極悪人と映るようになる。このように見せたうえで、『蕩寇志』は宋江ら一〇八人が一人残らず悲惨な末路を辿るように描くのである。当然のことながら、宋江と手を結ぶ盗賊や奸臣も、宋江と同様に、最終的には主人公たちによって成敗される。

愈万春の宋江らに対する敵視は、物語内容だけにとどまらず、人名の表記にも及んでいる。例えば一〇八人の一人関勝は、『水滸伝』では三国時代の英雄関羽の子孫という設定になっている。ところが『蕩寇志』では「冠勝」というように、姓を同音の「冠」に改められている。

この書き換えは、当時関羽がどのような人物として受け入れられていたかを考えると、その意図が見えてくる。清代において関羽は、単に英雄としてのみならず、神として崇められていた¹⁰。よって愈万春から見れば、神の子孫が盗

賊として登場することが関羽に対する甚だしい冒瀆と映ったであろう¹¹。

以上のように、『蕩寇志』では宋江らが悪人であることを示すため、その悪事の非道ぶりを描き、表記にも手を加えた。ただし兪万春の筆勢はこれだけにとどまらない。『水滸伝』では彼らの正当性を表している事象に対しても、容赦なくその実態を糾弾していく。

まずは一〇八人の名前が刻まれた石碑を単なる偽造とした。七十回本『水滸伝』第七十回（百回本では第七十一回）、梁山泊に一〇八人が集結すると、天から石碑が降ってきた。そこには古代の蝌蚪文字で、一〇八人の星と名前と序列、そして「替天行道」「忠義双全」の二句が刻まれていた。つまり一〇八人が集結することは天命によって定められており、しかも彼らのその後の行動方針も刻まれていたのである。それまでの物語を総括しつつその後の展開を窺わせるこの場面は、『水滸伝』の中でも屈指の重要場面と言えるだろう。

『蕩寇志』ではこの神秘的な石碑が、宋江らによる捏造にすぎないと暴露する。第一百三十六回、梁山泊を攻略した主人公陳希真と朝廷の將軍張叔夜は、一〇八人に含まれる書道家の蕭讓と刻工の金大堅を拷問にかけて、石碑の真相を白状させた。

蕭讓熬刑不過、只得從實供道「這石碣上字是小人寫的。因楷書恐人識得破綻、所以改寫古篆、又特訪得那道士何元通善識蝌蚪、所以特寫蝌蚪古篆。……」金大堅也將怎樣密鑄石碣的話說了、又道「這是宋江想與盧俊義爭位、故與吳用・公孫勝議得此法。……此一事、惟有宋江・吳用・公孫勝及小人等知悉、餘人都不曉得。」張公大笑道「妖言惑人、一至於此。」

蕭讓は拷問に耐え切れず、ついに事実を供述した。「この石碑の字は小生が書いたものです。楷書だと人に見破られてしまいかねないので、古い篆書体で書きました。蝌蚪文字に通じている何元通道士のもとを訪れることができたので、蝌蚪文字で書くことにしました。……」金大堅もどのようにして密かに石碑に刻んだのかを話すと、言った。「これは宋江が盧俊義よりも上位につこうとして、吳用・公孫勝とこの方法を協議したのです。……このことは宋江・吳用・公孫勝と私たちだけが知っていて、他の者は知りません。」張叔夜は大笑いして言った。「妖言で人々を騙そうとしても、必ずこのような結末になるのだ。」

一〇八人と天との関係を示す石碑が、ただの偽造にすぎないことを白日の下にさらしている。しかも宋江が梁山泊内での支配権確立のために企んだ謀略とすることで、宋江の狡猾さを際立たせる効果も上げている。

次に、宋江が口にする忠義については、技巧を凝らして明示的に否定する。

第一百三十七回、陳希真らによって梁山泊は攻め落とされてしまい、宋江は少数の伴を連れて命からがら逃げ出した。だが途中で漁師の兄弟に身柄を拘束されてしまう。その兄弟が賈忠・賈義と名乗ると、宋江は自分の運命を悟る。

宋江聽罷，又浩然長歎道「原來我宋江死於假忠假義之手。」

宋江は聞き終わると、大きくため息をついて言った。「そもそもこの宋江は假忠假義の手にかかって最期を迎える定めだったのか。」

姓の「賈」は、「うそ、偽り」という意味の「假」と同音である。つまり宋江の唱える忠義は、全くの偽物でしかないことを明らかにしている¹²。

以上、作者兪万春の経歴、作品の構成と内容から分かるように、『蕩寇志』は『水滸伝』で描かれる宋江ら梁山泊の一〇八人を完全に否定するために創られた小説なのである。その徹底ぶりからは、兪万春の強い意思が窺えよう。

第三節、『蕩寇志』と太平天国の乱

上述したように、兪万春が生涯をかけて著した『蕩寇志』は、その生前には出版されず、子や友人による修正を経たうえで咸豊三年に刊行された。このような経緯の出版は、往々にして少数を刷って身内や近辺者のみに配る記念出版となりがちである。しかし『蕩寇志』は、太平天国の乱（一八五〇～一八六四）という歴史的イベントと関わることで、頻りに版を重ねることとなった。

まずは政府側の対応から見ていこう。『蕩寇志』は、真の忠義の人である主人公陳希真らが朝廷の大將軍張叔夜の指揮下に加わり、凶悪な盗賊である宋江ら一〇八人を成敗する物語であった。政府側から見れば、このような内容は凶悪な反乱軍を鎮圧する自分達の行為を物語化したものと映ったことであろう。『水滸伝』がこれまで幾度と無く反乱に利用されたことも、このような認識形成に大きく作用したのであろう。そのうえ『蕩寇志』は太平天国軍の側に将来はないことを暗示することにもなる。よって政府側は『蕩寇志』の出版を積極的に推進した。

その経緯の一端が、錢湘「続刻蕩寇志序」に記述されている。

咸豊三年、五嶺以南、萑苻四起、以絳帕蒙首、號曰紅兵、蜂屯蟻聚、跨邑連郡。於斯時也、櫓槍曉碧、烽火晝紅、惟他城巋然獨存、危於累卵。當道諸公、急以袖珍版刻播是書於鄉邑間、以資勸懲。厥後漸臻治安、謂非是書之力也、其誰信之哉。

咸豊三年、五嶺より南で反乱軍が四方から決起し、紅い衣を頭に巻き、「紅兵」と称して徒党を組み、村々を荒らしまわった。この時は、朝から武器が

輝き、昼間も烽火が灯り、ただ城だけが残り、累卵の危機に瀕していた。そこで統治者たちは、急いで『蕩寇志』の袖珍版を印刷して村々に配らせ、勸善懲惡の教えの助けとした。それ以後治安は徐々に良くなったが、この小説の力でないと誰が信じようか。

この記述によれば、反乱軍が跋扈することによって治安が著しく悪化していたが、『蕩寇志』が出版され流布されることによって治安が良くなっていった。『蕩寇志』が広く流布したことによって治安が回復したというのは、序文ゆえの誇張表現と考えるとよいだろう。ただし、政府側が『蕩寇志』を好ましい作品として歓迎した雰囲気は窺うことはできる。

一方で、太平天国軍は『蕩寇志』の出版を厳しく取り締まった。例えば一八六〇年、太平天国軍は蘇州を攻略した際に、『蕩寇志』を処分した。

於是『蕩寇志』盛行於大江南北、鉅本之有批注者、爲髮逆所嫉、毀於姑蘇。

『蕩寇志』は国中に流通したが、批評や注が含まれた大きな本は、長髮賊に憎まれ、蘇州で破棄されてしまった。(銭湘「続刻蕩寇志序」)

『蕩寇志』において、政府に反抗した宋江らは討伐軍によって完全な敗北を喫してしまう。これは太平天国軍の側から見れば、自分たちの行動が最終的には失敗に終わることを暗示する不吉なものと同映たであろう。

『水滸伝』が往々に反乱に利用され、それゆえに政府によって厳しく出版を制限されたのと比べると、『蕩寇志』の流通は極めて対照的であると言えよう。政府側は歓迎して出版を促進し、太平天国側は忌み嫌って破棄した。兪万春の創作意図に沿うかたちで進展していったと言うことができよう。

第四節、『蕩寇志』の実態——宋代忠義英雄譚の再編

『蕩寇志』はこれまで反動的な小説と見なされてきた。その理由はこれまでの分析から明らかであろう。一つには、作者兪万春が創作意図を明確に述べていることが挙げられる。彼は、『水滸伝』の宋江ら一〇八人は処罰されるべき悪人にすぎないことを強く主張した。『水滸伝』に描かれる梁山泊の好漢の言動に魅力を感じている人々から見れば、受け入れがたい主張であることは想像に難くない。

もう一つの理由としては、太平天国の乱の際に政府側が積極的に出版を推進したことが指摘できる。当時清朝はアヘン戦争の敗北による西欧列強の侵出、および統治機構内部の腐敗の蔓延によって、その統治力に翳りが見え始めてい

た。そのような時代状況において、朝廷に忠義を尽くす人々が反乱を鎮圧するという内容の作品を後押しする行為は、時代に逆行したものと映るであろう。

このような反動的な物語内容と政府側の対応から、『蕩寇志』の受容層は『水滸伝』の流通に不快を覚える人々、すなわち清朝政府側の官吏とその周辺の人々に限られると考えられてきた。言い方を変えるならば、多くの被支配者層は『蕩寇志』を歓迎しなかったということになる。この従来 of 観点を突き詰めていくと、支配者層は『水滸伝』を否定して『蕩寇志』を歓迎したが、被支配者層は『蕩寇志』を無視して『水滸伝』を受け入れたという、単純明快な二項対立の構図が浮かび上がってくる。

しかしこのような受容の構図は、あまりに単純にすぎよう。作者の意図や周囲の反応は作品を分析する重要な鍵となる。しかしそれのみで作品の全てを説明できるわけではない。『蕩寇志』に関して言えば、極めて明快な作者の創作意図に引きずられすぎている感が否めない。しかも作品そのものに対する詳細な分析がほとんどなされてこなかった。

そこで以下では、『蕩寇志』の内容を詳しく分析していきたい。

まずは、物語の主人公陳希真の動向をしばらく追いかけていこう。陳希真は五十歳をこえた隠居の身であり、道士として修練に励んでいる。その娘陳麗卿は眉目秀麗でありながら膂力にも抜きん出ており、特に弓の腕は「女飛衛」の異名をとるほどであった。

陳親子は東京で暮らしていたが、陳麗卿は朝廷の高官高俥の養子である高衙内に目をつけられ、強引に結婚させられそうになる。怒った麗卿は高衙内をしたたかに打ちのめしてしまう。後難を恐れた陳親子は、策を講じて東京を脱出した。

この『蕩寇志』の冒頭に配された陳麗卿と高衙内の確執は、『水滸伝』における林冲の物語を彷彿とさせる。林冲は東京の武芸師範で、妻と仲睦まじく暮らしていた。だが高衙内は妻に手を出そうとしたことがきっかけとなり、無実の罪に陥れられて東京を追われてしまう。もちろん陳親子と林冲では様々な点で相違があるため、『蕩寇志』のここまでの物語が『水滸伝』を参照したとは言いきれないだろう。ただし、正道を歩んでいた者が権力を笠に着る悪人に目をつけられることによって正道から外れざるをえなくなった、という基本構図が共通していることは留意しておきたい。

もう少し陳希真の動向を追いかけていこう。犯罪者として追われる身となった陳親子は、やがて猿臂寨というという山寨に迎え入れられ、頭領の座につく。ただし陳希真は、一時の災難を逃れるべくやむを得ずして山寨の頭領になる、と考えていた。

希真望東京遙拜道、「微臣今日在此暫避冤仇、區區之心實不敢忘陛下也。」
説罷、痛哭不已。眾人無不下淚。

陳希真は遠く東京の方角に向かって拝礼して言った。「私は今日この場にて
しばし無実の罪を避けますが、私の心は決して陛下を忘れたわけではござい
ません。」言い終わると、痛哭してやまなかった。周囲にいる者で涙を流さな
い者はいなかった。(第八十四回)

たとえ身は盗賊となろうとも、心は朝廷への忠誠心を抱いていることが表明
されており、陳希真の強い意思が垣間見られる場面である。しかし同様のこと
は、実は『水滸伝』の宋江の発言にも見られる。

小可宋江、怎敢背負朝廷。蓋為官吏汚濫、威逼得緊、誤犯大罪、因此權借
水泊裏隨時避難、只待朝廷赦罪招安。

私宋江は、どうして朝廷に背きましようか。ただ官吏が金に汚く、ひどく
威張り散らしたことから、誤って大罪を犯してしまいました。ですから梁山
泊を仮の宿りとして一時的に災いを避けながら、朝廷が罪を赦して招安して
くださるのをただ待っております。(容興堂本第五十八回)

陳希真と宋江の主張を比べてみると、自ら進んで盗賊に身をやつたのでは
ないこと、災いを避けるために一時的に避難しているだけということ、そして
心の中では朝廷へ忠義を尽くす想いを抱いていること、の三点で共通しており、
両者の主張に本質的な相違は認められない。

ここまでの分析から分かるように、『蕩寇志』には『水滸伝』の展開を彷彿と
させる場面が含まれている。そしてこのような『水滸伝』との類似点は、『蕩寇
志』からいくつも挙げることができる。

次に取り上げるのは、主人公陳希真とその協力者たちの人物像である。『蕩寇
志』では主人公陳希真側の陣営は、最終的に朝廷の將軍張叔夜とその指揮に従
う陳希真ら三十六人というかたちに収まる。なお作中では、陳希真ら三十六人
は雷部神將の転生、張叔夜はそれを統率する神威蕩魔真君の転生という設定に
なっている。作品の終盤第一百三十八回、陳希真らが梁山泊を討滅した後、彼
ら一人ひとりの天界での身分が明かされている。兪万春としては、宋江ら一〇
八人を成敗した陳希真らを表彰する意図があったのだろう。しかしこれは、『水
滸伝』で一〇八人が梁山泊に集結した際に天から降ってきた石碑にそれぞれの
名前と天界での身分が刻まれていたことと同工異曲と言えるだろう¹³。

個々の人物にも目を向けよう。『水滸伝』の梁山泊の一〇八人には、優れた能
力をもつ人材が多い。作戦立案能力に優れ、三国志の名軍師諸葛亮より優れて

いるという「加亮」の渾名もある呉用、素手で虎を退治した武松、弓の腕が立つことから弓の名手李広にあやかった「小李広」という渾名をもつ花榮など、多彩な人材が梁山泊には集まっている。

『蕩寇志』では、宋江ら一〇八人が処罰されるべき悪人ということもあり、上で挙げた能力者を凌駕する者が陳希真の協力者として登場する。例えば、呉用を上回る軍師としては、劉慧娘が陳希真の陣営に加わる。第一百九回では題目に「劉慧娘計窺智多星（劉慧娘、計もて智多星を窺しめる）」とあるように、呉用が大砲を用いて攻撃を仕掛けたのに対し、劉慧娘は竹で組んだ垣で弾を防ぐという対応策を講じて退けることに成功した。

虎退治の武松に対しては、唐猛という人物が登場する。第一百十五回、唐猛は額に水晶の角の生えた神獣を退治する。しかもその直後には、

我去年也曾兩次空手活捉兩只大虫、卻不恁地費力。

私は去年にも虎を二頭素手で生け捕りましたが、これほどは疲れませんでした。

と、虎を生きたまま捕まえることなど造作もないと誇らしく語っている。

そして弓の名手花榮には、「女飛衛」陳麗卿が立ちはだかる。第一百二十五回、題目に「陳麗卿鬪箭射花榮（陳麗卿、箭を鬪わして花榮を射る）」とあるように、弓の腕の立つ両者が戦場で弓の実力を競い合い、最後は陳麗卿が花榮を射殺することで決着がついた。

以上の劉慧娘・唐猛・陳麗卿のように、陳希真の周囲には優れた才能の持ち主が集まっている。しかもいずれも梁山泊の一〇八人の実力を上回っていることにより、作中では梁山泊の討伐に成功することができたのである。しかし『水滸伝』の一〇八人と『蕩寇志』の三十六人のあり方を比較すると、実力の程度を除けば両者に本質的な差異は認められない。どちらの作品でも、優れた能力の持ち主が集まり、その一人ひとりの活躍が作品を構成する重大な要素となっている。

さらに朝廷との関係に目を向けてみよう。主人公陳希真はその能力と忠義の心が認められて、朝廷の將軍張叔夜の指揮下に加わる。そして張叔夜の統率に従って梁山泊討伐に赴き、その攻略に成功する。この張叔夜と陳希真の関係を、第三章で議論した、一貫して朝廷側の人材である忠義英雄と、身分や経歴を問わず在野の有能な人材である豪傑の概念に当てはめると、張叔夜は忠義英雄で、陳希真らは豪傑ということになる。ただし同様の構図は『水滸伝』でも見られる。『水滸伝』の場合、忠義英雄が宋江で、豪傑がその他の梁山泊の好漢ということになる。下表は、両作品に見られる関係を図示したものである。

	『蕩寇志』	『水滸伝』（百回本）
忠義英雄	張叔夜	宋江
豪傑	陳希真ら	梁山泊の好漢
敵対勢力	宋江	遼・方臘

以上の分析をまとめると、主人公の境遇、主人公陣営の人々の人物像、作品の骨格を成す朝廷と敵対勢力との関係の三点で、『蕩寇志』の構成は『水滸伝』のそれと相似形を成していることが分かるだろう。両者において、宋江ら梁山泊の一〇八人の描かれ方は対照的である。しかし物語構成という点から見れば、それほど大きな違いは認められない。

このように作品の内容を見定めると、清代後期の人々は『蕩寇志』を『水滸伝』のような作品として享受したと考えられないだろうか。第一章で述べたように、『水滸伝』の基本構成である宋代忠義英雄譚は、楊家将説話や岳飛説話に備わっており、通俗文芸の人気演目の一つとして受け入れられていた。これを踏まえるならば、『蕩寇志』は清代後期に新しく創られた宋代忠義英雄譚として人々に受け入れられたと考えることができよう。

このことを別の側面から傍証してみたい。白話小説と密接な関係にある演劇の動向に着目しよう。陶君起『京劇劇目初探』（中国戯劇出版社、一九六三）によると、『蕩寇志』の一場面を演劇化したものとして、「九曜鐘」・「陳麗卿」・「美人一丈青」の三点が確認できる。少数ではあるが梁山泊の一〇八人を悪人として描く演目が作られていたという事実から、誰が悪人かという内容ではなく、どのような物語かという形式から人々が『蕩寇志』を受け入れたと考えてよいだろう。

結局のところ多くの人々は、表面では兪万春や政府の『水滸伝』否定の思惑に従って『蕩寇志』を受け入れたが、その裏側では『水滸伝』と同類の宋代忠義英雄譚として享受したのであろう。

終わりに

『蕩寇志』は作者兪万春が『水滸伝』を完全に否定する目的で創られた小説である。また政府側も太平天国の乱の際には、その創作意図に便乗するかたちで、その出版を助勢した。しかし作者や政府の強い意図とは正反対に、『蕩寇志』は実質的には『水滸伝』の焼き直し、つまり宋代忠義英雄譚の再編としても人々に受け入れられていたと考えられる。『水滸伝』の受容という点からまとめると、『蕩寇志』をその反動的な続書と捉えるのみでは不十分であり、その模倣作品という正統な続書としての側面を考慮に入れる必要があるだろう。

最後に『蕩寇志』の宋代忠義英雄譚としての出来に言及したい。

ここまで『蕩寇志』が宋代忠義英雄譚の構成を備えていると論じてきたが、実際には一つ決定的な要素を欠いている。それは悲劇性である。

宋代忠義英雄譚の基調は悲劇にある。忠義英雄は外なる敵対勢力は撃退できるのだが、内なる奸臣にはほぼ無力であり、往々にしてその謀略によって殺されてしまう。『水滸伝』の宋江や岳飛説話の岳飛は、まさにその好例であろう。

これに対して『蕩寇志』は悲劇性に乏しい。主人公の陳希真ら三十六人には一人の死者も出ていない。また『蕩寇志』に登場する奸臣は、上述したように張叔夜らの活躍によって悲惨な末路を辿ることとなる。つまり、主人公たちはあまり代償を払うことなく目的を達成してしまうのである。『蕩寇志』という作品を一言でまとめるならば、正義が悪に鉄槌を下す物語と言えらるう。

このような作品は、善が悪を裁くという普遍的な希望を具現化しているという点から、読者に一時的な爽快感を与えることはできるだろう。しかし同時に、単純な二項対立だけでは文学作品の構成としては甚だ稚拙であり、多くの人を魅了する作品とはなりえない。

『蕩寇志』がこれまで文学作品としてあまり注目されてこなかったのは、多くの人々に親しまれていた『水滸伝』を完全に否定しただけではなく、宋代忠義英雄譚として拙いものであったことも原因の一つとして加えるべきだろう。

-
- 1 马蹄疾『水浒书录』（上海古籍出版社、一九八六）三一八～三一九頁。
 - 2 例えば、谈凤梁「蕩寇志批判」（『古小说论稿』（浙江古籍出版社、一九八九）二六五～二八三頁、陈松柏『水浒传源流考论』（人民文学出版社、二〇〇六）三九九～四〇四頁、高日暉・洪雁『水浒传接受史』（齐鲁書社、二〇〇六）一六七～一七二頁、など。
 - 3 後の部分で金聖嘆は「王土之濱則有水、又在水外則有滸、遠之也。遠之也者、天下之凶物、天下之所共擊也。天下之惡物、天下之所共棄也。（王土の果てには「水」があり、さらにその「水」の外側を「滸」と言っ、これは遠ざけるものである。この「遠ざけるもの」はこの世界の凶であり、天下の人々が攻撃するものである。またこの世界の悪であり、天下の人々が破棄するものである。）」と、「水滸」は中国ではなく遠方の周縁に存在するものであり、ゆえに人々が忌み嫌うものであるという解釈を示している。
 - 4 高島俊男「水滸伝『石渠閣補刊本』研究序説」（『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』汲古書院、一九八六）
 - 5 中鉢雅量『中国小説史研究——水滸伝を中心として——』（汲古書院、一九九六）二三三頁。
 - 6 『明容與堂刻水滸伝』（上海人民文学出版社、一九七五）を使用。
 - 7 金聖嘆による宋江評価については、中鉢雅量注5前掲書二二二～二五一頁、井上浩一「宋江評価に見る金聖嘆評の一特徴——金聖嘆評に関する先学の論点整理を手掛かりとして——」（『集刊東洋学』第八十一号、一九九九）参照。

-
- 8 咸豊三年初刻本に付されている。
- 9 兪龍光「識語」に「感兆於嘉慶之丙寅、草創於道光之丙戌、迄丁未、寒暑凡二十易、始竟其緒、未遑修飾而歿。(嘉慶丙寅に着想を得て、道光丙戌に書き始め、丁未に至るまで、二十年の歳月を経て、ようやく出来上がったが、修正は間に合わずに亡くなった。)」とある。
- 10 清代における関羽の神格化については、小島毅「国家祭祀における軍神の変質——太公望から関羽へ——」(『日中文化研究』第三号、一九九二) 参照。
- 11 この点については、清末の文人邱煒萱が、「兪仲華又以耐庵出色寫一關勝、直同雲長變相、譏爲惡札不堪、遂因而改關勝爲冠勝。(兪万春は、施耐庵が丹精込めて描いた関勝が関羽と瓜二つであることを甚だしい誹謗と感じたため、「関勝」を「冠勝」に改めたのである。)」(『菽園贅談』) と指摘している。
- 12 この「賈」すなわち「假」という同音を利用した仕掛けは、『紅樓夢』の根幹を成すものでもある。『紅樓夢』は乾隆年間末期から流行しており、兪万春が読んでいた可能性が高いことを考え合わせると、兪万春は『紅樓夢』を参考にしたと言えるかもしれない。
- 13 このような登場人物の作品中でのリストアップは、多くの白話小説作品に見られる。大木康『中国近世小説への招待——才子と佳人と豪傑と』(日本放送出版協会、二〇〇一) 一一二～一一四頁参照。

結論

本論文では『水滸伝』の成立と受容について、宋代忠義英雄譚という概念を定義することによって考察してきた。それにより従来見過ごされてきた点がいくつか解明できた。

第一部では『水滸伝』が成立するまでの過程に焦点を当てた。『水滸伝』前史において、人々は好漢たちの梁山泊における活躍に魅力を感じていたのであり、朝廷帰順後の活躍についてはほとんど注目していなかった。ましてやその死には全く関心を向けていなかった。そのため宋江は南宋初期にも活躍することとなっていた。また宋江は朝廷との関係をほとんどもたなかったため、忠義という評価とは無縁の存在であった。

『水滸伝』で敵役として登場する奸臣は、史実では『水滸伝』とは大きく実態が異なっており、通俗文芸においてもほとんど登場していなかった。また史実と通俗文芸のどちらにおいても宋江らとは全く関わっていなかった。

一方で、宋から明にかけての通俗文芸の世界では、楊家将説話と岳飛説話に代表される「宋代忠義英雄譚」が広く浸透していた。朝廷に忠義を尽くす英雄・朝廷で暗躍する奸臣の妨害・北方の夷狄討伐、という三点を備えた悲劇を基調とする物語構成は、当時の人気演目の一つとなっていた。

以上のことから『水滸伝』の成立は次のように想定できるだろう。明代中期、通俗文芸に親しんでいた或る人物は、宋代忠義英雄譚と梁山泊故事群との間に多くの共通性を見出した。そして梁山泊故事群の内外から宋代忠義英雄譚に則する様々な要素を集めて、一つの長編物語となるように整理していく。征遼故事・忠義英雄としての宋江・四人の奸臣の三点及び宋江の死は、このようにして物語の世界に組み込まれた。その結果『水滸伝』は完成に至ったのである。ただしこの宋代忠義英雄譚への転換は比較的短い期間に行われたため、不徹底な奸臣や能吏の張叔夜など作品内に痕跡がいくつか残されることとなった。

第二部では、清代における『水滸伝』受容事情を追いかけた。まず資料を幅広く分析した結果、七十回本が唯一の『水滸伝』となるのは、乾隆年間中期から後期にかけての期間に絞り込むことができた。ただしその後も征四寇故事は「続編」のかたちで流通し続けた。つまり、清代の人々も「宋江ら梁山泊の好漢の物語」は梁山泊に集結した宋江らが朝廷に帰順して忠義を実践する物語として認知していたと言えよう。

『水滸伝』が忠義の物語であることは、清代では暗黙の前提として機能して

いる。乾隆期の『忠義璇図』の創作者にせよ、『蕩寇志』の作者俞万春にせよ、『水滸伝』が忠義の物語として流通していることを知ったうえで、強く反発したのである。

また『水滸伝』を完全に否定しようとした俞万春の『蕩寇志』は、結局は宋代忠義英雄譚の亜種にすぎなかった。

以下では、これまでの『水滸伝』に焦点を当てた議論について、中国文学史というより大きな文脈に則して少し考察をしてみたい。

第一部の議論を踏まえると、『水滸伝』の成立はもはや『三国志演義』や『西遊記』と同列に論じるわけにはいかない。『三国志演義』や『西遊記』は、史実に端を発し、通俗文芸の世界で長きにわたって洗練されることで集大成された作品である。しかし『水滸伝』にとってこの過程から生み出されたものは、その一側面を形成するにとどまっていた。特に物語の基本構成はこの過程からではなく、他の通俗文芸作品から宋代忠義英雄譚の構成を導入することで成り立っていた。

一方で宋代忠義英雄譚の導入による『水滸伝』の成立を、単なる模倣や剽窃と見なすわけにもいかない。その理由は二つ挙げられる。一つは、『水滸伝』が白話小説の最初期の作品だからである。むしろ当時としては新しい文学作品媒体である白話小説だからこそ、それまで国と関わっていなかった梁山泊故事群を宋代忠義英雄譚の導入によって国の大事と関連付けようとする大胆な試みが行われたのではないだろうか。

もう一つは、通俗文芸により長きにわたって洗練された部分とうまく融合されたからである。梁山泊故事群には、通俗文芸による長い洗練を経てきた魅力的な人物が多く登場していた。一方、宋代忠義英雄譚も、通俗文芸の世界で魅力的な物語の型の一つとして人々に受け入れられてきた。この二点を考え合わせると、梁山泊故事群にもともと備わっていた魅力に宋代忠義英雄譚の魅力を掛け合わせた相乗効果ゆえに、『水滸伝』は後世にまで強い影響力を及ぼす作品となったのであろう。

以上のように考えると、『水滸伝』の中国文学史上における位置づけは、同じ「四大奇書」に属する『三国志演義』と『西遊記』よりも一歩進んでいると見なすことができる。しかし同じく「四大奇書」の一つ『金瓶梅』と等しいとまでは言えない。『金瓶梅』は『水滸伝』の武松の物語に着想を得ているとはいえ、その内容の大半が「蘭陵笑笑生」なる作者の独創であった。詰まるところ、『水滸伝』は、通俗文芸による長きにわたる洗練に多くを負う『三国志演義』・『西遊記』から一歩抜け出し、内容のほぼ全てが新規に創られた『金瓶梅』へと発

展するための先駆者としての位置に配することができよう。

第二部の議論を踏まえると、清代を通じて『水滸伝』は、より正確に言うならば宋江ら梁山泊の好漢の物語は、宋代忠義英雄譚として浸透していたと言える。『忠義璇図』を制作した清朝宮廷の文人も、『蕩寇志』を著した兪万春も、『水滸伝』が宋代忠義英雄譚として社会に広く浸透していることに懸念を抱いていたことになる。兪万春が結局は『蕩寇志』を宋代忠義英雄譚の稚拙な作品として再生産してしまったのも、宋代忠義英雄譚の伝播力の強さゆえであろう。

清代にも『水滸伝』が宋代忠義英雄譚として流通していたとすると、考え直さなければならない問題が浮上する。それは清代に『水滸伝』が厳しい批判的となった理由である。

具体例として、出版に対する規制を取り上げよう。『水滸伝』は社会に悪影響を及ぼすという理由から、その出版が厳しく取り締まられた。ただし当然のことながら、『水滸伝』に備わっている宋代忠義英雄譚の構成は『楊家将演義』に代表される楊家将説話や『説岳全伝』に代表される岳飛説話にも備わっている。だがこの両者に対する出版規制は『水滸伝』ほどには厳しくない¹⁾。それでは、『水滸伝』と『楊家将演義』・『説岳全伝』とで対応が異なる要因は何であろうか。

それは第三章の考察を用いることで説明できる。『水滸伝』における宋江の扱いと、宋代忠義英雄譚における宋江の妥当な位置づけとの間に齟齬が生じるからである。『水滸伝』において宋江は忠義英雄として扱われている。だが宋代忠義英雄譚として基づいた楊家将説話や岳飛説話と比較してみると、梁山泊を根拠地として多数の手下を統率する宋江はむしろ豪傑に位置づけられる。つまり宋江は楊六郎や岳飛ではなく、孟良や牛皐に該当するのである。梁山泊故事群に宋代忠義英雄譚を忠実に適用するならば、宋江は忠義英雄ではなく、その指揮下で活躍する豪傑となるべきなのである。ところが『水滸伝』では宋江を、李逵や魯智深など他の豪傑を統率する忠義英雄に格上げしてしまった。

このように考えると、反乱を誘発するなど社会に悪影響を及ぼす有害書として『水滸伝』に強く反発した人々の心理まで解説することができる。彼らの通俗文芸受容環境を想像するに、『水滸伝』だけではなく、楊家将説話や岳飛説話など多くの文芸作品に触れられたであろう。よって宋代忠義英雄譚についても理解が深かったと推定できる。宋代忠義英雄譚の規範に沿うと、梁山泊で手下を従える宋江は豪傑に該当する。一方で現実の社会では、宋江を忠義英雄とする『水滸伝』が宋代忠義英雄譚として広く享受されている。このような理念と現実の食い違いに対して、宋代忠義英雄譚の規範が捻じ曲げられ、豪傑たるべき者が忠義英雄に「すり替え」られた、と違和感を強く覚えた者が『水滸伝』

非難に投じたのであろう。

宋江の「すり替え」に対する強い反発は、同じく宋代忠義英雄譚である楊家将説話や岳飛説話と比較すると明確になるだろう。楊家将説話や岳飛説話ではこのような批判は起こらない。忠義英雄と豪傑の区別が厳然としているからである。豪傑たる孟良や牛皐は、決して忠義英雄たる楊六郎や岳飛のように行動しない。

『水滸伝』への反発の原因は、単に社会に悪影響を及ぼす有害書であるだけでなく、宋代忠義英雄譚の規範に反していることにも見出させる。社会的には勿論のこと文学的にも許容できなかったからこそ、『水滸伝』は清代の一部の人々から強く否定されるに至ったのであろう。

ここまでの議論をまとめると、『水滸伝』は、一方では宋代忠義英雄譚を導入することによって完成し、梁山泊故事群が元来有していた魅力との相乗効果によって幅広く人気を博した。だが他方では宋代忠義英雄譚の導入による「すり替え」によって強い反発を受けるようにもなった。このことから、宋代忠義英雄譚が人々の間で広く認識されていた事態が窺える。したがって宋代忠義英雄譚の概念は、『水滸伝』とその関連作品を分析するのに有効な概念であると言えよう。

ここまで『水滸伝』の成立と受容に関する多くの問題について、宋代忠義英雄譚という概念に注目しながら論じてきた。従来中国文学史における通説にいくつか修正を加えることができたと思われる。

最後に、本論文の議論から発展的に考察できると思しき論点を二つ挙げたい。

第一点は、『水滸伝』と後の白話小説『金瓶梅』・『儒林外史』との継承および発展関係についてである。

上で述べた、豪傑宋江の忠義英雄への「すり替え」に対しては、全ての人が反発したわけではない。豪傑であった者が忠義英雄となったことを、むしろ斬新な発想として高く評価した者もいた。その代表者は李卓吾である。李卓吾は盗賊出身でありながら忠義を尽くす宋江を高く評価した。その評価点からは、宋江に見られる「すり替え」を素直に受け入れた李卓吾の感性が窺える。

宋江における「すり替え」によって起こる齟齬について、読者という視点から考えてみたい。物語を読むに当たって、読者は物語世界に感情移入するものである。しかし物語世界での描写とそこから受ける印象が大きく異なる場合、感情移入が妨げられてしまい、結果として感情移入しながら読書をしているということを冷静に自覚するに至る。

『水滸伝』の宋江における齟齬は、宋代忠義英雄譚における忠義英雄の人物

像に合わせた結果として生じてしまった偶然の産物であろう。だがこれを齟齬として非難するのは、あくまで宋代忠義英雄譚を則るべき規範として絶対視することが前提となる。規範を絶対に沿うべき基準と見なさなければ、齟齬は否定的に捉えられることなく、それどころか効果的な技法として利用することもできる。実際に後の白話小説では、読書による感情移入を読者に自覚させる齟齬が意図的かつ戦略的に用いられている。

例えば、『水滸伝』の武松の物語から派生した『金瓶梅』には、読者に物語に感情移入していることを自覚させる仕掛けが多く含まれている²。この点から考えるに、『金瓶梅』は技巧の面でも『水滸伝』の正統な発展作品と言えよう。また『儒林外史』では、この手法をさらに発展させて多くのエピソードを創っている³。

翻って考えるに、梁山泊故事群に宋代忠義英雄譚が導入されることによって誕生した『水滸伝』は、偶然の産物とはいえ宋江の役割の「すり替え」を生み出したことから、後の白話小説の一つの大きな潮流の原点となったと見なせるだろう。

第二点は、現代日本で広く流通しているアニメやゲーム作品との関連についてである。この類の作品は、明清白話小説と似たような特徴があると指摘されている⁴。子どもが楽しむものにすぎず、大人が真面目に論じるべきものではないと見なされている。ゆえに世間からの評価はあまり高くない。だが実際には多くの人々が親しんでいるものなのである。

もう少し追究していくと、明清白話小説との共通点は、作品の内容にも見出すことができる。近年の人気作の一部を詳しく分析すると、一つの作品内に同じ設定の複数の物語が入っており、しかも前の物語が後の物語の読解に影響を及ぼすという手法を用いたものが見られる⁵。これは、『金瓶梅』や『儒林外史』に見られるような、読者に物語に感情移入していることを自覚させる仕掛けの一種と考えてよいだろう。

このように様々に考察を進められることから、『水滸伝』の成立と受容を宋代忠義英雄譚という概念から解明することは、ただ過去の明清時代の中国人の通俗文学観を明らかにするだけではなく、現代日本で人気を博するアニメやゲーム作品の分析にも役立つであろう。そしてさらには、共時と通時の両方の観点から通俗的な物語一般について考える基礎の一つとなることも期待できよう。

¹ 岳飛説話は厳しく取り締まられたが、それは南宋初期に関して誤った歴史認

識を植えつけないためである。例えば、『大清高宗純皇帝聖訓』卷二百六十四に、「至南宋與金朝關涉詞曲、外間劇本、往往有扮演過當、以致失實者。流傳久遠、無識之徒、或至轉以劇本爲真、殊有關係、亦當一體飭查。(南宋と金に関わる詞曲や民間の劇本には、往々にして演技に熱が入りすぎて、事実から離れてしまっているものがある。長らく流通すれば、何も知らない者は、かえって劇本を真実と捉えかねず、特に関係のあるものも、一律に取り締まらねばならない。)」とある。

- 2 田中智行「『金瓶梅』の感情観——感情を動かすものへの認識とその表現」(『日本中国学会報』第五十七集、二〇〇五) 参照。
- 3 『儒林外史』における表現技法については、須藤洋一『儒林外史論：権力の肖像、または十八世紀中国のパロディ』(汲古書院、一九九九) に詳しい。
- 4 藤井省三・大木康『新しい中国文学史：近世から現代まで』(ミネルヴァ書房、一九九七) 八頁。
- 5 例えば、東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生』(講談社現代新書、二〇〇七) 二二七～二三五頁で取り上げる『ひぐらしのなく頃に』がこれに該当する。

参考文献

1、『水滸伝』等テキスト

- 『明容輿堂刻水滸伝』（上海人民文学出版社、一九七五）
『出像評点忠義水滸全書』（東京大学文学部所蔵）
『第五才子書水滸伝』（中華書局、一九七五）
『水滸志伝評林』（文学古籍刊行社、一九五六）
『水滸後伝』（『古本小説集成』所収影印本）
『水滸後伝』（上海古籍出版社、一九八一）
『後水滸伝』（春風文芸出版社、一九八一）
『説岳全伝』（『古本小説集成』所収影印本）
『説岳全伝』（上海古籍出版社、一九七九）
『忠義璇図』（『古本戯曲叢刊九集』（中華書局、一九六四）所収）
『結水滸全伝』（『古本小説集成』所収影印本）
『蕩寇志』（人民文学出版社、一九八五）
張恨水『水滸新伝』（中国民間文藝出版社、一九八六）

2、資料集および資料

- 傅惜華『水滸戯曲集』（上海古籍出版社、一九八五）
朱一玄、劉毓忱『水滸伝資料汇编』（南开大学出版社、二〇〇二）
馬蹄疾『水滸資料彙編』（中華書局、一九八六）
馬蹄疾『水滸書録』（上海古籍出版社、一九八六）
王利器『元明清三代禁毀小説戏曲史料（増訂本）』（上海古籍出版社、一九八一）
- 查繼佐『罪惟録』（『四部叢刊三編』所収影印本）
『明清史料乙編』（商務印書館、1936）
『欽定吏部処分則例』（東京大学東洋文化研究所所蔵）
高儒『百川書志』（古典文学出版社、一九五七）
『皇宋十朝綱要』（文海出版社、一九八〇）
『東都事略』（東京大学文学部所蔵）
『三朝北盟会編』（上海古籍出版社、一九八七）
『宋史』（中華書局、一九七七）
『醉翁談録』（古典文学出版社、一九五七）
『新刊宣和遺事』（『古本小説集成』（上海古籍出版社）所収影印本）
『元曲選』（中華書局、一九五八）

- 吳梅（輯録）『奢摩他室曲叢』（商務印書館、一九二八）
『歐陽文忠公集』（『四部叢刊』所収）
- 熊大木『大宋中興通俗演義』（『古本小説集成』所収）
- 李卓吾『焚書、続焚書』（中華書局、1975）
- 邵璨『香囊記』（毛晋『六十種曲』（文学古籍刊行社、一九五五）所収）
- 吳從先『小窓自紀』（『四庫全書存目叢書』子部二五二冊所収）
『晋書』（中華書局、一九七四）
『三国志』（中華書局、一九八二）
『元刊雜劇三十種』（『古本戲曲叢刊四集』（商務印書館、一九五八）所収）
- 介石逸叟『存廬新編宣和譜』
（『古本戲曲叢刊五集』（上海古籍出版社、一九八六）所収）
- 王士禛『居易録』（『王士禛全集』（東京大学文学部所蔵）所収）
- 錢曾『也是園書目』
（『羅雪堂先生全集三編』（文華出版公司、一九七〇）第十四冊所収）
- 昭槿『嘯亭雜録』（中華書局、一九八〇）
- 阮葵生『茶餘客話』（中華書局、一九五九）
- 翟灝『通俗編』（『叢書集成初編』（商務印書館、一九三七）所収）
- 邱煒萱『客雲廬小説話』
（阿英『晚清文学叢鈔小説戲曲研究卷』（中華書局、一九六〇）所収）
- 錢静方『小説叢考』（古典文学出版社、一九五七）
『大清高宗純皇帝聖訓』（東京大学文学部所蔵）
『定例彙編』（東京大学東洋文化研究所所蔵）

3、単行本

- 『宮崎市定全集』第十二卷（岩波書店、一九九二）
- 東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生』（講談社現代新書、二〇〇七）
- 磯部彰『『西遊記』形成史の研究』（創文社、一九九三）
- 大木康『中国近世小説への招待——才子と佳人と豪傑と』
（日本放送出版協会、二〇〇一）
- 金文京『三国志演義の世界（増補版）』（東方書店、二〇一〇）
- 小松謙『中国歴史小説研究』（汲古書院、二〇〇一）
- 小松謙『「四大奇書」の研究』（汲古書院、二〇一〇）
- 佐竹靖彦『梁山泊』（中公新書、一九九二）
- 須藤洋一『儒林外史論：権力の肖像、または十八世紀中国のパロディ』
（汲古書院、一九九九）

高島俊男『水滸伝の世界』(大修館書店、一九八七)
中鉢雅量『中国小説史研究——水滸伝を中心として——』(汲古書院、一九九六)
藤井省三・大木康『新しい中国文学史：近世から現代まで』
(ミネルヴァ書房、一九九七)
宮崎市定『水滸伝——虚構のなかの史実』(中公文庫、一九九三)

『胡適古典文学研究論集』(上海古籍出版社、一九八八)
『魯迅全集』(人民文学出版社、一九八一)
陈芳『乾隆时期北京剧坛研究』(文化艺术出版社、二〇〇一)
陈松柏『水浒传源流考论』(人民文学出版社、二〇〇六)
高日晖・洪雁『水浒传接受史』(齐鲁書社、二〇〇六)
高玉海『明清小说续书研究』(中国社会科学出版社、二〇〇四)
侯会『《水滸》源流新证』(華文出版社、二〇〇二)
欧阳健・萧相恺『水滸新议』(重慶出版社、一九八三)
陶君起『京劇劇目初探』(上海文化出版社、一九五七)
谈凤梁『古小说论稿』(浙江古籍出版社、一九八九)
王利器『耐雪堂集』(中国社会科学出版社、一九八六)
謝碧霞『水滸戲曲二十種研究』(国立台湾大学出版委員会、一九八一)
嚴敦易『水滸伝的演變』(作家出版社、一九五七)
余嘉錫『宋江三十六人考実』(作家出版社、一九五五)
张国光『《水滸》与金聖嘆研究』(中州書画社、一九八一)
鄭振鐸『中国文学研究』(作家出版社、一九五七)
周兆新『三国演义考评』(北京大学出版社、一九九〇)
Ellen Widmer『The margins of utopia: *Shui-hu hou-chuan* and the literature of Ming loyalism』(Harvard University Press、一九八七)

4、論文

井上浩一「宋江評価に見る金聖嘆評の一特徴——金聖嘆評に関する先学の論点整理を手掛かりとして——」(『集刊東洋学』第八十一号、一九九九)
井上浩一「李贄と金聖嘆——読書論の差異とその思想的背景——」
(『中国——社会と文化』第十五号、二〇〇〇)
上田望「講史小説と歴史書(三)——『北宋志伝』、『楊家将演義』の成書過程と構造——」(『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第三輯、一九九九)
大内田三郎「水滸伝版本考——繁本各回本の関係について——」
(『ビブリア』第四十輯、一九六八)

- 大内田三郎「『水滸伝』版本考——再び繁本と簡本の関係について——」
(『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』汲古書院、一九八六)
- 大塚秀高「天書と泰山——『宣和遺事』よりみる『水滸伝』成立の謎——」
(『東洋文化研究所紀要』第四百十冊、二〇〇〇)
- 岡村真寿美「『宣和遺事』の成立過程に関する一試論——その歴史書引用部分をめぐって——」(『文学研究』第九十四号、一九九七)
- 笠井直美「義賊の誕生——雑劇『水滸』から小説『水滸』へ——」
(『東洋文化』第七十一号、一九九〇)
- 笠井直美「『水滸』における「対立」の構図」
(『東洋文化研究所紀要』第二百二十二冊、一九九三)
- 笠井直美「〈われわれ〉の境界——岳飛故事の通俗文芸の言説における国家と民族(上)」(『名古屋大学言語文化部国際言語文化研究科言語文化論集』第二十三巻第二号、二〇〇二)
- 笠井直美「〈われわれ〉の境界——岳飛故事の通俗文芸の言説における国家と民族(下)」(『名古屋大学言語文化部国際言語文化研究科言語文化論集』第二十四巻第一号、二〇〇二)
- 小島毅「国家祭祀における軍神の変質——太公望から関羽へ——」
(『日中文化研究』第三号、一九九二)
- 小松謙「内府本系諸本考」
(『田中謙二博士頌壽記念中国古典戯曲論集』汲古書院、一九九一)
- 小松謙「梁山泊物語の成立について——『水滸伝』成立前史——」
(『中国文学報』第七十九冊、二〇一〇)
- 小松謙「清朝宮廷大戯『鼎峙春秋』について——清朝宮廷における三国志劇——」(『中国文学報』第八十一冊、二〇一一)
- 佐藤鍊太郎「李卓吾評『忠義水滸伝』について」
(『東方学』第七十一輯、一九八六)
- 清山孝子「『水滸伝』における宋江は英雄か」
(『山口大学文学会志』第四十五巻、一九九四)
- 高島俊男「水滸伝『石渠閣補刊本』研究序説」
(『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』汲古書院、一九八六)
- 高島俊男「宋江実録」(『東洋文化研究所紀要』第二百二十二冊、一九九三)
- 高野陽子・小松謙「『水滸伝』成立考——語彙とテクニカル・タームからのアプローチ——」(『中国文学報』第六十五冊、二〇〇二)
- 田中智行「『金瓶梅』の感情観——感情を動かすものへの認識とその表現」
(『日本中国学会報』第五十七集、二〇〇五)

- 千田大介「岳飛故事の変遷をめぐって——鎮魂物語から英雄物語へ——」
(『中国文学研究』第二十三期、一九九七)
- 宮崎市定「宋江は二人いたか」(『東方学』第三十四輯、一九六七)
- 渡辺宏明「『説岳全伝』と『水滸伝』」
(『法政大学教養部紀要・人文科学編』第九十二号、一九九五)
- 陈小林「杨家将故事与水滸故事关系考述」(『殷都学刊』二〇〇八年第三期)
- 高明閣「《荡寇志》对《水滸传》的反扑」(『明清小説研究』第二輯、一九八五)
- 龚维英「简析《水滸》两种续书——《水滸后传》和《荡寇志》比较研究」
(『贵州社会科学』第百五十三号、一九九八)
- 龚维英「《说岳全传》:《水滸》的特殊续书」
(『贵州社会科学』第百五十八号、一九九九)
- 黄霖「一种值得注目的《水滸》古本」
(『复旦学报(社会科学版)』一九八〇年第四期)
- 李伟实「从水滸戏和水滸叶子看《水滸传》的成书年代」
(『社会科学战线』第四十一号、一九八八)
- 孟宪玉「张叔夜籍贯、亲属考」(『中国报业』二〇一一年第十期)
- 曲家源「元代水滸杂剧非《水滸传》来源考辨」
(『山西师大学报』一九八六年第二期)
- 汤国梁·周洪喜「《忠义水滸传》征辽部分得失论」
(『济宁师专学报』一九九五年第一期)
- 王振星「“嵇康”与卢俊义的梦意象——金圣叹“梁山泊英雄惊恶梦”解读」
(『水滸争鸣』第十一輯、二〇〇九)
- 魏永生「国家危亡 现大忠大义本色——张恨水《水滸新传》张叔夜形象重读」
(『学术交流』二〇〇九年第一期)
- 徐朔方「元明兩代の楊家将戯曲和小説」(『戯劇論叢』第三号、一九八二)